田川市文化財調査報告書第18集

田川市内埋蔵文化財試掘・確認・発掘調査報告書（２）

平成28～令和元年度の各種開発に伴う試掘・確認・発掘調査報告

２０２１

田川市教育委員会

田川市内埋蔵文化財試掘・確認・発掘調査報告書（二）　田川市文化財調査報告書第18集　二〇二一　田川市教育委員会

田川市文化財調査報告書第18集

田川市内埋蔵文化財試掘・確認・発掘調査報告書（２）

平成28～令和元年度の各種開発に伴う試掘・確認・発掘調査報告

２０２１

田川市教育委員会

序

福岡県の東北部に位置する田川市は、豊かな水と緑に囲まれ、古来より生活環境に恵まれてきました。明治時代に入ると石炭産業によって、近代日本の礎を支えることで繁栄しました。市内には旧石器時代から近代まで、先人たちが残した足跡である文化財が多く存在し、歴史や文化を解明するためにかけがえのない財産でもあります。

しかし、各種開発等によって失われつつあることも事実であります。そのため、本市では文化財保護の立場から、各種開発事業者と調整を図り、埋蔵文化財の試掘・確認調査および発掘調査を実施しています。

本書は、平成28年度から令和元年度に実施した市内遺跡の試掘・確認調査および発掘調査の報告書です。これらの成果は、本市の歴史的景観を復元するにあたり、欠くことのできない貴重な資料と言えます。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、試掘・確認調査、発掘調査および本書の作成にあたり、ご指導とご助言、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に対し、厚くお礼を申し上げます。

令和３年３月

田川市教育委員会

教育長　吉　柳　啓　二

例　言

1．本書は、平成28～令和元年度に実施した各種開発事業に伴う田川市内の試掘・確認・発掘調査に関する調査報告書である。
2．試掘・確認・発掘調査、整理・報告書作成については、田川市教育委員会文化生涯学習課が実施した。
3．本書で使用した実測は、遺構を吉岡淳子、城戸富士子、福本寛、江上正高、遺物を福本・江上が行った。製図は江上、遺構・遺物の写真撮影を福本、江上が行った。
4　第Ⅲ章第３節の墳丘計測図および石室内の３Ｄ写真計測図の作成について九州文化財計測支援集団（作業者：永見秀徳氏・久保伸洋氏）、空中写真測量図を株式会社測技の協力を頂いた。なお、取得した３Ｄデータは、田川市ホームページにて、公開をしているので活用されたい。
https://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/kiji0033764/index.html
5．第Ⅳ章第1節は、株式会社古環境研究所に委託した。第Ⅳ章第2節を志賀智史氏（九州国立博物館）、第Ⅵ章第２節④を九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに依頼した。
6．第Ⅵ章第１節は、昭和62年度金川小学校体育館建設に伴う発掘調査、第２節は平成13年度地蔵堂建替え工事に伴う発掘調査を実施したが、報告が行われていなかったため、本報告に掲載した。
7．本書は古賀彩音の協力のもと、福本が第Ⅱ章第３節⑶、第４節⑼・⑽、第Ⅲ章第１・２節、第Ⅵ章第２節①～④・⑥、江上がその他の章と編集を行った。
8．本書に関わる遺物、図面、写真等の資料は、田川市教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
　第３節　地理的・歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　試掘・確認調査の記録 …… 11
　第１節　平成28年度試掘・確認調査の概要 …… 11
　第２節　平成29年度試掘・確認調査の概要 …… 13
　第３節　平成30年度試掘・確認調査の概要 …… 15
　第４節　平成31・令和元年度試掘・確認調査の概要 …… 21
　第５節　確認調査・工事立会出土遺物 …… 28
第Ⅲ章　市内遺跡発掘調査の記録 …… 29
　第１節　弓削田原Ｂ遺跡２次の調査 …… 29
　第２節　上の原遺跡群３次の調査 …… 30
　第３節　猫迫1号墳２次の調査 …… 38
　第４節　上の原遺跡群４次の調査 …… 44
　第５節　番町遺跡の調査 …… 55
第Ⅳ章　自然科学分析 …… 58
　第１節　猫迫１号墳自然科学分析 …… 58
　第２節　猫迫１号墳及び周辺遺跡から出土した赤色顔料について …… 63
第Ⅴ章　まとめ …… 69
第Ⅵ章　付編 …… 71
　第１節　上の原遺跡群１次の調査 …… 71
　第２節　位登古墳の調査 …… 77

挿図目次

第１図　市内遺跡分布図（S＝1/70,000）…… 3
第２図　平成28・29年度試掘・確認調査地点位置図（S＝1/100,000）…… 9
第３図　平成30・31・令和元年度試掘・確認調査地点位置図（S＝1/100,000）…… 10
第４図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）…… 12
第５図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）…… 12
第６図　下伊田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）…… 12
第７図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 12
第８図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）…… 14
第９図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/4,000）…… 14
第10図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）…… 14
第11図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）…… 14
第12図　弓削田原Ｂ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）…… 16
第13図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/300）…… 16
第14図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）…… 16
第15図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 16
第16図　上本町遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）…… 18
第17図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）…… 18
第18図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）…… 18
第19図　桐ヶ丘遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/4,000）…… 18
第20図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 20
第21図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）…… 20
第22図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）…… 20
第23図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 20
第24図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）…… 22
第25図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）…… 22
第26図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）…… 22
第27図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）…… 22
第28図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 24
第29図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/300）…… 24
第30図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S=1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）…… 24
第31図　包蔵地外調査地位置図（S=1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）…… 24
第32図　番町散布地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）…… 26
第33図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,800）…… 26
第34図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）…… 26
第35図　上伊田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）…… 26
第36図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）…… 27
第37図　横手木遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）…… 27
第38図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）…… 27
第39図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）…… 27
第40図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）…… 28
第41図　確認調査・工事立会出土遺物（１～５はS＝1/4、６・７はS＝1/20）…… 28
第42図　弓削田原Ｂ遺跡２次遺構配置図（S＝1/80）…… 29
第43図　SC１実測図（S＝1/40）…… 30
第44図　出土遺物実測図（S＝1/4）…… 31

第45図　上の原遺跡群３次遺構配置図（S＝1/80）…… 32
第46図　SC１・２実測図（S＝1/60）…… 33
第47図　SC１、SK１・２出土遺物実測図（S＝1/4）…… 33
第48図　SK１～４・７、SC４実測図（SK４・SC４はS＝1/60、その他はS＝1/40）…… 34
第49図　SK４・SC４出土遺物実測図（S＝1/4）…… 36
第50図　SK７・ピット・表採出土遺物実測図（S＝1/4）…… 37
第51図　猫迫１号墳測量図（S＝1/200）…… 39
第52図　南・北・東トレンチ平面図・土層図（S＝1/60）…… 40
第53図　前庭部左側土層図・平面図（S＝1/60）、墳丘南側盛土平面図（S＝1/200）…… 41
第54図　石室写真測量図（S＝1/60）…… 42
第55図　石室実測図（S＝1/60）…… 43
第56図　出土遺物実測図（１～20はS＝1/4、21・22はS＝1/3）…… 43
第57図　上の原遺跡群４次調査区平面図（S＝1/60）…… 45
第58図　調査区西壁土層図（S＝1/60）、SC５、SK１実測図（S＝1/40、1/30）…… 46
第59図　S４・SC５出土遺物実測図（S＝1/4）…… 47
第60図　SK２・３実測図（S＝1/40）…… 47
第61図　SK１～３出土遺物実測図（S＝1/4）…… 48
第62図　SK８・13実測図（S＝1/40）…… 50
第63図　SK８出土遺物実測図（S＝1/4）…… 51
第64図　SK10出土遺物実測図（S＝1/4）…… 52
第65図　SK11・12実測図（S＝1/40）…… 53
第66図　SK11・12、柱穴跡出土遺物実測図（S＝1/4）…… 54
第67図　番町遺跡調査区平面図（S＝1/400）…… 55
第68図　調査区①平面図（S＝1/60）…… 56
第69図　SX１～３土層図・断面見通図（S＝1/60）…… 57
第70図　SX１～３出土遺物実測図（S＝1/4）…… 57
第71図　上の原遺跡群１次位置図（S＝1/5,000）、A地点位置図（S＝1/400）…… 71
第72図　P１・２実測図（S＝1/40）…… 72
第73図　P１、P10、P３横、表採出土遺物実測図（S＝1/4）…… 73
第74図　B地点遺構配置図（S＝1/200）…… 73
第75図　P１・２実測図（S＝1/40）…… 74
第76図　P１・２出土遺物実測図（S＝1/4）…… 74
第77図　P３出土遺物実測図（S＝1/4）…… 76
第78図　P４～６実測図（S＝1/40）…… 77
第79図　P４出土遺物実測図（S＝1/4）…… 78
第80図　P３・６・９出土遺物実測図（S＝1/4）、検出遺構略測図（S＝1/40）…… 79
第81図　位登古墳位置図（S＝1/5,000）…… 80
第82図　測量図（S＝1/300）…… 81
第83図　箱式石棺実測図（S＝1/40）…… 82
第84図　位登古墳出土遺物実測図（１はS＝1/1、２はS＝1/2）…… 83
第85図　オトガイ高／下顎角幅と下顎枝示数の関係 …… 86

分析挿図目次

第１図　赤色顔料の顕微鏡写真
第２図　蛍光X線スペクトル図
第３図　X線回折図
第４図　ラマン分光スペクトル図

表　目　次

表１　平成28～令和元年度 埋蔵文化財保護調整一覧（件）
表２　平成28年度試掘・確認調査一覧表
表３　平成28年度工事立会等一覧表
表４　平成29年度試掘・確認調査一覧表
表５　平成29年度工事立会等一覧
表６　平成30年度試掘・確認調査一覧表
表７　平成30年度工事立会等一覧表
表８　平成31・令和元年度試掘・確認調査一覧表
表９　平成31・令和元年度工事立会等一覧工事
表10　下顎骨計測比較（男性）
表11　上肢骨計測比較（位登人骨：両側、R：右側、L：左側、比較群上肢左側・男性）
表12　下肢骨計測比較（位登人骨：両側、R：右側、L：左側、比較群上肢左側・男性）
表13　遺物観察表
表14　付編　遺物観察表

分析表目次

表１　花粉分析結果
表２　植物珪酸体分析結果
表３　田川市内出土赤色顔料分析結果一覧

分析図版目次

分析図版１　花粉化石・プレパラート状況写真　　分析図版３　植物珪酸体（プラント・オパール）
分析図版２　植物珪酸体（プラント・オパール分析）のダイヤグラム

図 版 目 次

図版１　平成29～令和元年度工事立会、試掘・確認調査
平成28年度工事立会⑵上の原遺跡群（東から）
平成29年度工事立会⑵上の原遺跡群（南から）
平成29年度弓削田原Ｂ遺跡Ｔ１完掘状況（北から）
平成29年度上の原遺跡群Ｔ１完掘状況（南から）
平成29年度⑹包蔵地外Ｔ１完掘状況（南から）
平成30年度上の原遺跡群Ｔ１完掘状況（南から）
平成30年度確認調査⑵上の原遺跡群（北から）
令和元年度番町散布地Ｔ１完掘状況（西から）
令和元年度弓削田原Ｃ遺跡工事立会①
令和元年度工事立会②
令和元年度工事立会⑶上の原遺跡群（南から）
確認調査・工事立会出土遺物

図版２　弓削田原Ｂ遺跡２次、上の原遺跡群３次、猫迫１号墳２次
①弓削田原Ｂ遺跡２次調査区全景（南から）
②弓削田原Ｂ遺跡２次ＳＣ１完掘状況（東から）
③弓削田原Ｂ遺跡２次出土遺物
④上の原遺跡群３次ＳＣ１・２完掘状況（東から）
⑤上の原遺跡群３次ＳＫ１遺物出土状況（西から）
⑥上の原遺跡群３次ＳＣ１、ＳＫ１・２出土遺物
⑦上の原遺跡群３次ＳＫ４完掘状況（北から）
⑧上の原遺跡群３次ＳＫ４出土遺物①
⑨上の原遺跡群３次ＳＫ４出土遺物②
⑩上の原遺跡群３次ＳＫ７完掘状況（北から）
⑪上の原遺跡群３次ＳＫ７・ピット出土遺物
⑫猫迫１号墳２次北トレンチ土層（北から）

図版３　猫迫１号墳２次
①猫迫１号墳２次南トレンチ土層（南から）
②猫迫１号墳２次南トレンチ土層接写（西から）
③猫迫１号墳２次東トレンチ土層（東から）
④猫迫１号墳２次東トレンチ土層接写（南から）
⑤猫迫１号墳２次石室掘方検出（西から）
⑥猫迫１号墳２次前庭部左側完掘状況（西から）
⑦猫迫１号墳裏道状況（北から）
⑧猫迫１号墳石室土層①（西から）
⑨猫迫１号墳石室土層②（北から）
⑩猫迫１号墳赤色顔料調査風景
⑪猫迫１号墳測量風景
⑫猫迫１号墳出土遺物

図版４　猫迫１号墳２次、上の原遺跡群４次
①猫迫１号墳オルソー図
②上の原遺跡群４次ＳＣ５完掘状況（東から）
③上の原遺跡群４次ＳＫ１堆積状況（東から）
④上の原遺跡群４次ＳＫ１遺物出土状況（西から）
⑤上の原遺跡群４次ＳＫ１出土遺物
⑥上の原遺跡群４次ＳＫ２完掘状況（東から）
⑦上の原遺跡群４次ＳＫ１・２出土遺物

図版５　上の原遺跡群４次
①上の原遺跡群ＳＫ３完掘状況（北から）
②上の原遺跡群４次ＳＫ３出土遺物①
③上の原遺跡群４次ＳＫ３出土遺物②
④上の原遺跡群４次ＳＫ８堆積状況
⑤上の原遺跡群４次ＳＫ８出土遺物
⑥上の原遺跡群ＳＫ11・12堆積状況（北から）
⑦上の原遺跡群ＳＫ11・12完掘状況（北から）
⑧上の原遺跡群４次ＳＫ10出土遺物①
⑨上の原遺跡群４次ＳＫ10出土遺物②
⑩上の原遺跡群４次ＳＫ10出土遺物③
⑪上の原遺跡群４次ＳＫ10出土遺物④
⑫上の原遺跡群４次ＳＫ11出土遺物

図版６　上の原遺跡群４次、番町遺跡、上の原遺跡群１次

①上の原遺跡群４次SK12出土遺物
②上の原遺跡群調査区南側完掘状況（南から）
③上の原遺跡群調査区南側完掘状況（北東から）
④番町遺跡SX１完掘状況（南から）
⑤番町遺跡SX２堆積状況（北から）
⑥番町遺跡SX３堆積状況（北から）
⑦番町遺跡調査区①完掘状況（南から）
⑧番町遺跡調査区②検出状況（西から）
⑨番町遺跡調査区③検出状況（北から）
⑩番町遺跡出土遺物
⑪上の原遺跡群１次Ｂ地点作業風景①
⑫上の原遺跡群１次Ｂ地点作業風景②

図版７　上の原遺跡群１次

①上の原遺跡群１次Ａ地点Ｐ１完掘状況
②上の原遺跡群１次Ａ地点出土遺物
③上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ１出土遺物①
④上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ１出土遺物②
⑤上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ２出土遺物
⑥上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ３出土遺物①
⑦上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ３出土遺物②
⑧上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ３出土遺物③
⑨上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ３出土遺物④
⑩上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ４完掘状況（西から）
⑪上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ４出土遺物①
⑫上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ４出土遺物②

図版８　上の原遺跡群１次、位登古墳

①上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ６・９出土遺物
②上の原遺跡群１次Ｂ地点Ｐ３・６・９出土遺物
③位登古墳主体部全景（北西から）
④位登古墳主体部完掘状況（南東から）
⑤位登古墳人骨確認状況（真上から）
⑥位登古墳出土遺物
⑦位登古墳全景（南西から）

図版９　位登古墳

位登古墳出土人骨　写真

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯（第２・３図、表１～９）

田川市の埋蔵文化財保護行政は、福岡県教育委員会の指導および筑豊文化財行政連絡協議会の筑豊地区埋蔵文化財事前審査運用マニュアルによる様式を用いた事前審査を積極的に対応してきた。その成果もあり開発を行う際、事前に周知の埋蔵文化財包蔵地の有無を照会することが定着しつつある。

近年の埋蔵文化財保護行政で高い割合を占めているのは、個人住宅建設に伴う調整業務である。また、県立高等学校舎改築事業や市公共事業を抱えながら、発掘調査および整理作業を進めている。

表１　平成28～令和元年度 埋蔵文化財保護調整一覧（件）

年　度	事前審査受理		計	至試掘調　査	至確認調　査	93条届出・94条通知数	調査内容				周知化
	民間	行政					慎重工事	工事立会	記録保存	至本調査	
平成28	188	42	230	3	3	19	5	12	2	2	1 域山域跡
平成29	252	56	308	3	4	18	2	13	3	3	0
平成30	272	12	284	6	6	16	4	10	2	1	0
平成31・令和元	266	14	280	5	7	17	9	6	2	3	2 本町遺跡 鎮西遺跡

第２節　調査組織

平成28年～平成31・令和元年度の試掘・確認調査、発掘調査、令和２年度の整理・報告に係る関係者は下記のとおりである。

田川市教育委員会文化生涯学習課

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31・令和元年度	令和2年度（整理作業）
教　育　長	吉柳　啓二	吉柳　啓二	吉柳　啓二	吉柳　啓二	吉柳　啓二
教育部長	和田　恵子	矢野　俊昭	矢野　俊昭	矢野　俊昭	戝津　嘉久
課　　長	山本　一人	本永　高弘	本永　高弘	立田　昌子	立田　昌子
企　画　官	森本　弘行	森本　弘行	森本　弘行		
課長補佐					進村　順次（令和3年1月22日まで）
課長補佐兼文化係長	野島　豊治	野島　豊治	野島　豊治	野島　豊治	進村　順次（令和3年1月22日から）
文化係長					奥　慎一（令和3年1月22日まで）
事務主査	原　俊英	原　俊英	原　俊英	原　俊英	原　俊英
		奥　慎一	奥　慎一	奥　慎一	福本　寛
主　　任	福本　寛	福本　寛	福本　寛	福本　寛	森本　弘行（再任用）
				森本　弘行（再任用）	
学　芸　員	藤本　和美	朝鳥　和美	朝鳥　和美	朝鳥　和美	朝鳥　和美
	中村　麻里	中村　麻里	中村　麻里	中村　麻里	中村　麻里
	江上　正高	江上　正高	江上　正高	江上　正高	江上　正高
嘱託職員			古賀　彩音	古賀　彩音	
会計年度任用職員					古賀　彩音

試掘・確認調査、発掘調査、整理・報告書作成については、多くの方々からご指導ご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

福岡県教育庁教育総務部文化財保護課　筑豊地区文化財行政担当者

井上 信隆　　宇野 慎敏　　辻田 淳一郎　　橋本 達也　　仲 和彦　　山口 裕平

第３節　地理的・歴史的環境

(1)　地理的環境

福岡県の北東部に位置する田川市の地形は、東側を貫山地、西側を金国山地、南側を英彦山地の三方を山地に囲まれる。市域の東側は福智山系に沿って彦山川、西側を金国山地に沿って中元寺川という二つの主要河川が北から南へ流れ、本市は盆地を呈する。中央には、田川中央丘陵帯ともいえる二条の丘陵が南北方向に走る。この丘陵は、古第三紀層を基盤としており、層中に豊富な石炭を埋蔵し、筑豊炭田の一部を形成する。古第三紀層の上層には更新世末期の阿蘇山の噴火によりもたらされた火山灰が堆積し、灰石台地が形成される。

本市は南北最長約14㎞、東西最長約９㎞、総面積約55㎢、標高約20～約60ｍに及ぶ。周辺地域とは古来より北東側を仲哀峠、西側を鳥尾峠、南西側に猪膝峠と水系を経た交通が営まれた。

(2)　歴史的環境（第１図）

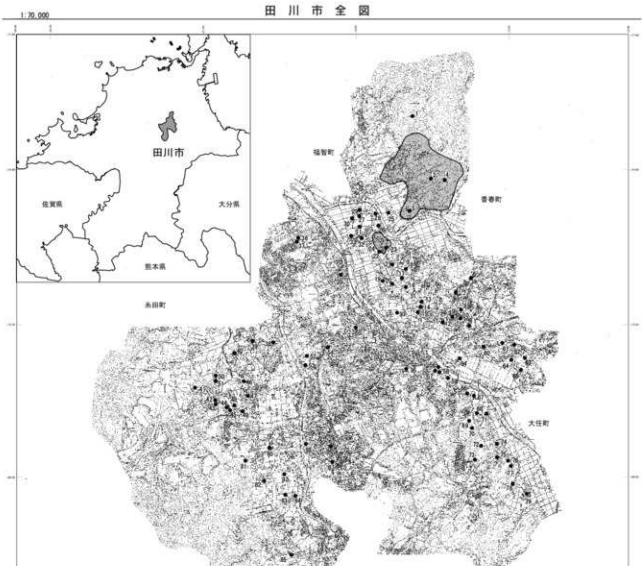
本市の遺跡の変遷を述べる。旧石器時代から縄文時代は、明確な遺構は確認されていない。出土事例が限られるが、AT降下以降の翼状剥片が猫迫１号墳墳丘土から、寺の上遺跡でナイフ形石器が出土する。縄文時代は、上本町遺跡より西平式土器やサヌカイト製石製品が確認されている。

弥生時代は前期後半頃から、彦山川や中元寺川流域の低丘陵地に上本町遺跡、倉ヶ原遺跡（下伊田遺跡群）、上の原遺跡群、長谷池遺跡、鎮西公園内遺跡等で集落跡が確認できる。中期後半以降は、確認される遺跡の数が減少する。墓制は中期前半頃から、箱式石棺・土壙墓を主体に構築される。寺の上遺跡の箱式石棺内出土の中細形銅剣は、北部九州の青銅器の受容と同様に捉えられる。この他に、福岡平野を中心とした甕棺葬は、中期後半に上本町遺跡を含め田川市郡で３事例が確認できる。分布域の東限を示しており、北部九州の新たな葬送を導入した事がうかがわれる。

古墳時代前期は、田川市郡で唯一の前方後円墳とされる位登古墳は現存長約52m、後円部径は約28ｍを測る。主体部の墓壙は略方形を呈し、その対角線上に朱塗りの箱式石棺を設置する。中期は猫迫１号墳、セスドノ古墳が挙げられる。猫迫１号墳は墳丘径約27ｍ、墳形が造り出しと周溝をもつ帆立貝式古墳と推定され、埋葬施設は竪穴系横口式石室を備える。出土遺物は石室内より甲冑片、周溝より日本最古級に位置付けられる馬具装着馬形埴輪と三角板革綴短甲装武人埴輪等が出土し、５世紀前半に位置づけられる。セスドノ古墳は直径約35ｍ、高さ約６ｍの大型円墳で、埋葬施設は竪穴系横口式石室を備える。出土遺物は馬具、横矧板鋲留短甲、陶質土器小壺、垂飾付耳飾等が出土し、未盗掘の古墳と捉えられ、５世紀後半頃に位置づけられる。集落は上本町遺跡で竈付竪穴式住居跡が確認できる。後・終末期の石室墳は、夏吉の丘陵に40数基で構成される夏吉古墳群がある。この古墳群は６世紀前半頃の９号墳から築造が開始され、７世紀まで脈々と続く。このうち１号墳は石棚を備え、21号墳は田川地域でも最大級の花崗岩の巨石を用いた石室で、石室全長8.2ｍを測り、複室構造である。遺物は三累環頭柄頭が出土する。両古墳は市指定史跡である。次に横穴墓は、田川地域に展開する古第三紀層を穿って築造されている。特徴的な横穴墓の事例として、墳丘を備える長谷池横穴墓群や装飾を備える経塚横穴墓群が挙げられる。出土遺物では馬具類・武具類を副葬した事例が多い。また、刻書須恵器、脚付長頸壺、角形把手付土器は識字層や朝鮮半島との関係やイモガイ製貝輪は南島との関係が深い遺物も多く確認できる。

古代に入ると本市は田河郡に属し、古代寺院跡の天台寺（上伊田廃寺）跡が築かれる。創建時は金堂と講堂が中軸線を合わす伽藍配置、その後、塔・金堂・講堂が揃う伽藍配置に変化する。出土した瓦は新羅系・百済系・高句麗系であり、創建時が７世紀後半、廃絶期が９世紀後半代と考えられる。倉ヶ原遺跡（下伊田遺跡群）は、12間×２間の掘立柱建物跡が確認され、８世紀前半頃と報告されている。延喜式の記録より、古代官道に付属する遺構と考えられる。

中世は弓削田荘との関係がうかがわれる遺跡として、角銅原遺跡、弓削田原Ａ遺跡や弓削田原Ｂ遺跡で遺構・遺物が確認されている。山城跡では平成28年度に田川郡川崎町と共同で、城山城跡を新規の周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図へ登載し、保護を図っている。



第１図　市内遺跡分布図（S＝1/70,000）（国土地理院「田川」「行橋」より）

近世は角銅原遺跡や上本町遺跡で遺構・遺物が確認されているが、いまだ不明確な点が多い。近代は石炭産業と関係が深くなる。国登録有形文化財の旧三井田川鉱業所伊田竪坑櫓・同第一・第二煙突が聳えたつ石炭記念公園一帯は、三井田川鉱業所伊田坑（斜坑・竪坑）として隆盛を極めた。炭坑閉山後、多くの関連施設が取り壊されていたが、地下部分の残存状況を把握する調査を平成23年度から行った結果、炭坑関連の遺構として良好に残存していることが明らかとなった。平成30年度に飯塚市・直方市とともに、筑豊炭田遺跡群三井田川鉱業所伊田坑跡として国指定史跡となる。

表２　平成28年度試掘・確認調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査結果	備　考
1	包蔵地外	田川市大字伊田1685-4	個人住宅	平成28年4月28日	遺構・遺物なし	
2	上の原遺跡群	田川市大字糒496-1,499,503	造　成	平成28年4月18日	遺構・遺物なし	
3	下伊田条里跡	田川市大字伊田4390	道　路	平成28年7月26日	遺構・遺物なし	慎重工事
4	包蔵地外	田川市桜町519-8,562-6	宅地造成	平成28年12月14日	遺構・遺物なし	都市計画法第32条協議
5	弓削田条里跡	田川市大字弓削田117-3	個人住宅	平成28年12月14日	遺構・遺物なし	慎重工事
6	包蔵地外	田川市大字伊加利2091-8,2100-7,2099-3	土地造成	平成29年2月27日	遺構・遺物なし	都市計画法第32条協議

表３　平成28年度工事立会等一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査結果	備　考
1	包蔵地外	田川市大字伊加利1933-15	浄化槽設置	平成28年4月18日	遺構・遺物なし	
2	旧三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2734-1	電気設置	平成28年5月26日 平成28年6月2日	遺構・遺物なし	
3	包蔵地外	田川市大字夏吉194-348	浄化槽設置	平成28年6月9日	遺構・遺物なし	
4	包蔵地外	田川市大字夏吉697-1・2,701-2	個人住宅	平成28年7月15日	遺構・遺物なし	
5	包蔵地外	田川市大字猪国3183・3184・3182	その他開発	平成28年7月22日	遺構・遺物なし	県：水源地上流砂防ダム建設
6	包蔵地外	田川市栄町5-9・16	住　宅	平成28年7月28日	遺構・遺物なし	
7	包蔵地外	田川市千代町2003-139	浄化槽設置	平成28年8月20日	遺構・遺物なし	
8	包蔵地外	田川市大字夏吉1366	個人住宅	平成28年8月22日	遺構・遺物なし	
9	伊加利条里跡	田川市大字伊加利694-8	住　宅	平成28年9月27日	遺構・遺物なし	
10	包蔵地外	田川市大字猪位金2064	個人住宅	平成28年10月4・10日	遺構・遺物なし	
11	包蔵地外	田川市大字位登1956	その他開発	平成28年10月14日	遺構・遺物なし	鉄塔建替
12	上の原遺跡群	田川市大字糒495-2・8、500-9	浄化槽設置	平成28年10月20 － 24日	遺構・遺物あり	記録保存対応、図版１
13	弓削田条里跡	田川市大字奈良231-1	個人住宅	平成28年11月11日	遺構・遺物なし	
14	包蔵地外	田川市大字夏吉1636-23,1367-5	浄化槽設置	平成28年11月14日	遺構・遺物なし	
15	包蔵地外	田川市大字夏吉	道　路	平成28年12月8日	遺構・遺物なし	県道197号歩道整備
16	包蔵地外	田川市大字猪国1159-5	－	平成29年1月17日	遺構あり	踏査、文化財包蔵地カードの追補（城山城跡）
17	包蔵地外	田川市平松町1797-208	個人住宅	平成29年1月31日	遺構・遺物なし	
18	旧三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2734-1	その他開発	平成29年3月1日	遺構・遺物なし	音響設備設置
19	包蔵地外	田川市大字弓削田1698-5, 1695-10, 1702-9	浄化槽設置	平成29年3月8日	遺構・遺物なし	
20	弓削田条里跡	田川市大字弓削田113-5	個人住宅	平成29年3月8日	遺構・遺物なし	
21	旧三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2734-1	その他開発	平成29年3月10日	遺構・遺物なし	誘導看板設置

表4　平成29年度試掘・確認調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査結果	備　考
1	包蔵地外	田川市大字川宮1717-5,1720-3・4・6・7,1728-4,1724・1725・1726-2・3・1729-1・1734-11・1744-2の一部	店　舗	平成29年5月23日	遺構・遺物なし	
2	弓削田条里跡	田川市大字奈良259-1	その他開発	平成29年7月11日	遺構・遺物なし	駐車場造成、慎重工事
3	弓削田原B遺跡	田川市大字弓削田482-11	個人住宅	平成29年7月13日	遺構・遺物なし	平成29年度本調査実施
4	上の原遺跡群	田川市大字糒485-2	個人住宅	平成29年8月31日	遺構あり・遺物なし	平成29年度本調査実施
5	包蔵地外	田川市大字奈良1587-158	道　路	平成29年8月31日	遺構・遺物なし	都市計画道路中央団地川宮線
6	包蔵地外	田川市大字伊田3824-4,3841-2,3839,3837	宅地造成	平成29年10月4日	遺構あり・遺物なし	文化財包蔵地カードの訂正（猫迫1号墳）
7	上本町遺跡	田川市上本町７-11	学校建設	平成29年12月26日	遺構・遺物なし	テニスコート造成、慎重工事

表5　平成29年度工事立会等一覧

番号	遺跡名	調　査　地	調査原因	工事立会日	調査結果	備　考
1	包蔵地外	田川市上本町6-3	浄化槽設置	平成29年4月21日	遺構・遺物なし	
2	上の原遺跡群	田川市大字糒497-2	浄化槽設置	平成29年4月19日	遺構・遺物あり	記録保存対応、図版1
3	包蔵地外	田川市大字伊田1232-2	個人住宅	平成29年4月24日	遺構・遺物なし	
4	包蔵地外	田川市大字伊田	道　路	平成29年4月24日	遺構・遺物なし	市道上伊田西1号線
5	包蔵地外	田川市大字伊田1232-2	個人住宅	平成29年4月24日	遺構・遺物なし	
6	包蔵地外	田川市大字伊田1196-5・13	個人住宅	平成29年5月16日	遺構・遺物なし	
7	包蔵地外	田川市大字伊加利2202-17	工　場	平成29年5月16日	遺構・遺物なし	
8	包蔵地外	田川市千代町11-32	浄化槽設置	平成29年5月29日	遺構・遺物なし	
9	包蔵地外	田川市白鳥町2106-27・28	住　宅 浄化槽設置	平成29年5月31日 平成29年8月24日 平成29年9月4日	遺構・遺物なし	
10	包蔵地外	田川市大字糒2119-2・3	浄化槽設置	平成29年6月12日	遺構・遺物なし	
11	包蔵地外	田川市大字夏吉3638	店　舗	平成29年7月11日	遺構・遺物なし	
12	包蔵地外	田川市日の出町3066-1	個人住宅	平成29年7月24日	遺構・遺物なし	
13	包蔵地外	田川市大字夏吉1258-110	店　舗	平成29年8月8日	遺構・遺物なし	
14	下伊田条里跡	田川市大字伊田4547-10	浄化槽設置	平成29年9月19日	遺構・遺物なし	
15	包蔵地外	田川市大字伊田1652-2,1653-2	個人住宅	平成29年9月19日	遺構・遺物なし	
16	包蔵地外	田川市桜町978-5	浄化槽設置	平成29年10月30日	遺構・遺物なし	
17	包蔵地外	田川市大字弓削田938-1	個人住宅・ 浄化槽設置	平成30年1月9・10日	遺構・遺物なし	
18	包蔵地外	田川市大字弓削田3099-3	個人住宅 浄化槽設置	平成30年1月29日 平成30年5月1日	遺構・遺物なし	
19	包蔵地外	田川市寿町6-58	個人住宅	平成29年12月20日	遺構・遺物なし	
20	弓削田条里跡	田川市大字奈良136-2	個人住宅 浄化槽設置	平成30年2月17日 平成30年6月14日	遺構・遺物なし	
22	包蔵地外	田川市魚町2148-1	その他建物	平成30年2月13日	遺構・遺物なし	消防分署建替
23	包蔵地外	田川市大字位登281-8他	個人住宅	平成30年2月24日	遺構・遺物なし	
24	包蔵地外	田川市大字伊田4479-2・6・7・8・9・10,4480-2,4481-2	浄化槽設置	平成30年3月6日	遺構・遺物なし	

表6　平成30年度試掘・確認調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査結果	備　考
1	弓削田条里跡	田川市大字弓削田175-20,23,29,30,31	個人住宅	平成30年9月4日	遺構・遺物なし	慎重工事
2	包蔵地外	田川市大字伊田4968-2,4972-2,4973-2	店　舗	平成30年5月10日	遺構・遺物なし	
3	桐ヶ丘遺跡	田川市大字夏吉197-13,14,61	学校建設	平成30年6月5・7日	遺構なし・遺物あり	確認等調査,工事立会
4	包蔵地外	田川市大字奈良1594-3の一部,1597-2の一部, 1597-3,1597-5,	道　路	平成30年8月24日	遺構・遺物なし	
5	弓削田条里跡	田川市大字奈良39-3,40-3,41-4	個人住宅	平成30年8月24日	遺構・遺物なし	慎重工事
6	包蔵地外	田川市大字奈良541-10	個人住宅	平成30年8月24日	遺構・遺物あり	
7	弓削田原C遺跡	田川市大字弓削田1052-3	個人住宅	平成30年9月4日	遺構・遺物なし	慎重工事
8	包蔵地外	田川市大字弓削田2838-49	その他建物	平成30年10月9日	遺構・遺物なし	特別養護老人ホーム建設
9	弓削田条里跡	田川市大字弓削田17・2・4	個人住宅	平成31年1月25日	遺構なし・遺物あり	工事立会
10	包蔵地外	田川市大字糒751-1・2・3・4	その他建物	平成31年1月25日	遺構・遺物なし	バイオマス発電所建設
11	包蔵地外	田川市大字弓削田3646-1,3649-1・2・3, 3653-1・2,3654-1・3・4, 3655-2,3657-1,3658-1,3804-2	店　舗	平成31年2月7日	遺構・遺物なし	遊技場建設
12	上の原遺跡群	田川市大字糒481-1,476-1,477-1	道　路	平成31年2月21日	遺構あり・遺物なし	令和元・2年度本調査、図版1

表7　平成30年度工事立会等一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	工事立会日	調査結果	備　考
1	包蔵地外	田川市大字伊田1477-4	浄化槽設置	平成30年4月7日	遺構・遺物なし	
2	包蔵地外	田川市大字伊田1597-8	個人住宅	平成30年4月17日	遺構・遺物なし	
3	蛍ヶ横穴群	田川市大字夏吉1258-31・354, 1261-2・77・78・88	個人住宅 浄化槽設置	平成30年4月20日	遺構・遺物なし	
4	包蔵地外	田川市寿町5-8	住　宅	平成30年4月25・26日	遺構・遺物なし	
5	包蔵地外	田川市大字弓削田3099-3	浄化槽設置	平成30年5月1日	遺構・遺物なし	
6	包蔵地外	田川市大字伊田1685-1	個人住宅	平成30年5月29日	遺構・遺物なし	
7	旦三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2734-1	その他開発	平成30年6月4日	遺構・遺物なし	地盤改良
8	弓削田条里跡	田川市大字奈良136-2	浄化槽設置	平成30年6月4日 平成30年8月6日	遺構・遺物なし	
9	弓削田条里跡	田川市大字弓削田233-19	浄化槽設置	平成30年6月7日	遺構・遺物なし	
10	包蔵地外	田川市大字位登251	浄化槽設置	平成30年6月18日	遺構・遺物なし	
11	包蔵地外	田川市大字糒2252-11	浄化槽設置	平成30年6月21日	遺構・遺物なし	
12	包蔵地外	田川市大字伊田1611-7	個人住宅 浄化槽設置	平成30年6月27日 平成30年10月25日	遺構・遺物なし	
13	下伊田条里跡	田川市大字伊田4390	水道・浄化槽設置	平成30年7月14日	遺構・遺物なし	
14	旦三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2734-1	その他開発	平成30年8月6日	遺構・遺物なし	石炭記念公園タイル補修
15	包蔵地外	田川市大字伊田4390	その他開発	平成30年8月6日	遺構・遺物なし	伊田小学校排水管改良
16	包蔵地外	田川市大字糒1628	個人住宅	平成30年8月28日	遺構・遺物なし	
17	包蔵地外	田川市大字糒1625-1	個人住宅	平成30年9月3日	遺構・遺物なし	
18	包蔵地外	田川市大字伊田2621-1	その他開発 ・浄化槽設置	平成30年9月18日・20日	遺構・遺物なし	伊田駅舎改築

19	包蔵地外	田川市大字奈良1797-315	個人住宅	平成30年10月3日	遺構・遺物なし	
20	包蔵地外	田川市大字猪国1516	個人住宅	平成30年10月3日	遺構・遺物なし	
21	弓削田条里跡	田川市大字奈良155-13	個人住宅 浄化槽設置	平成30年10月12日 平成31年1月24日	遺構・遺物なし	
22	包蔵地外	田川市日の出町5-6	浄化槽設置	平成30年10月22日	遺構・遺物なし	
23	包蔵地外	田川市大字夏吉266-1	個人住宅	平成30年10月22日	遺構・遺物なし	
24	包蔵地外	田川市大字伊田1688-5・12	個人住宅	平成30年11月3日	遺構・遺物なし	
25	包蔵地外	田川市大字伊田2286-40	個人住宅	平成30年11月8日	遺構・遺物なし	
26	包蔵地外	田川市大字伊田2621-1	造　　成	平成30年11月22日	遺構・遺物なし	
27	包蔵地外	田川市大字糒1619-6	浄化槽設置	平成30年11月27日	遺構・遺物なし	
28	包蔵地外	田川市大字伊田2550-1	その他開発	平成30年11月28日	遺構・遺物なし	エレベーター設置
29	包蔵地外	田川市大字位登1263-4	浄化槽設置	平成30年12月4日	遺構・遺物なし	
30	包蔵地外	田川市大字伊加利922-2・4	浄化槽設置	平成30年12月5日	遺構・遺物なし	
31	包蔵地外	田川市上本町6-14	個人住宅	平成30年12月13日 平成31年1月26日	遺構・遺物なし	
32	包蔵地外	田川市大字糒2258-2,2260-1・2・3,2261,2289,2290,2291	宅地造成	平成30年12月18日	遺構・遺物なし	踏査
33	包蔵地外	田川市大字糒2182	その他開発	平成30年12月21日	遺構・遺物なし	無線基地局新設
34	包蔵地外	田川市新町	道　　路	平成31年2月5日	遺構・遺物なし	市道桜町新町線
35	包蔵地外	田川市新町	水道管設置	平成31年2月7日	遺構・遺物なし	市道桜町新町線
36	包蔵地外	田川市大字川宮161-1付近	その他開発	平成31年2月7日	遺構・遺物なし	歩道橋設置
37	包蔵地外	田川市平松町1797-207	個人住宅	平成31年2月14日 平成31年3月22日	遺構・遺物なし	
38	蛍ヶ丘横穴群	田川市大字夏吉1258-352	個人住宅	平成31年3月11日	遺構・遺物なし	
39	包蔵地外	田川市大字夏吉329-18,330-8	個人住宅	平成31年3月18日	遺構・遺物なし	
40	弓削田原A遺跡	田川市大字弓削田688-2	個人住宅	平成31年3月19日	遺構・遺物なし	

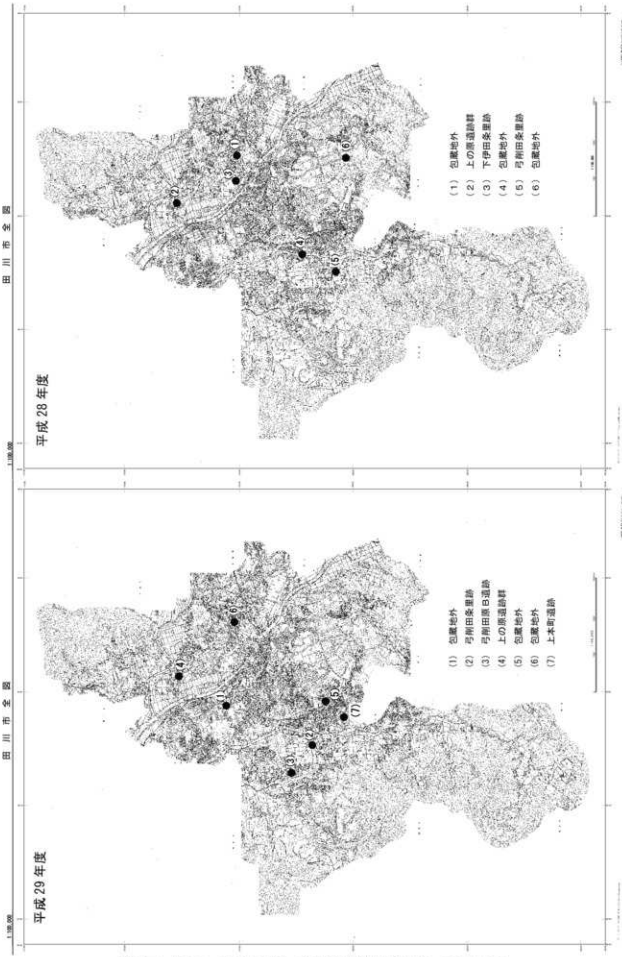
表8　平成31・令和元年度試掘・確認調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	調査原因	調査期間	調査結果	備　　考
1	上の原遺跡群	田川市大字490番1の一部	個人住宅	令和元年7月4日	遺構あり・遺物なし	令和元年度本調査
2	弓削田原C遺跡	田川市大字弓削田909番1・2	個人住宅	令和元年7月29日	遺構・遺物なし	慎重工事
3	包蔵地外	田川市本町940番8・9	個人住宅	令和元年10月8日	遺構・遺物あり	遺跡分布地図の追補（本町遺跡）、工事立会
4	番町散布地	田川市大字川宮137番5	個人住宅	令和元年10月29日	遺構・遺物あり	遺跡分布地図の訂正（番町遺跡）、令和元年度本調査
5	弓削田原C遺跡	田川市大字弓削田954-1の一部・957-3	個人住宅	令和元年10月29日	遺構あり・遺物なし	工事立会、図版1
6	弓削田条里跡	田川市大字奈良334-3の一部	住　　宅	令和元年10月29日	遺構・遺物なし	工事立会
7	上伊田条里跡	田川市大字伊田3741-2・3742	住　　宅	令和元年11月11日	遺構・遺物なし	慎重工事
8	包蔵地外	田川市大字糒224-1	住　　宅	令和元年11月11日	遺構・遺物なし	
9	横手木遺跡	田川市大字糒159	個人住宅	令和2年2月10日	遺構・遺物なし	工事立会

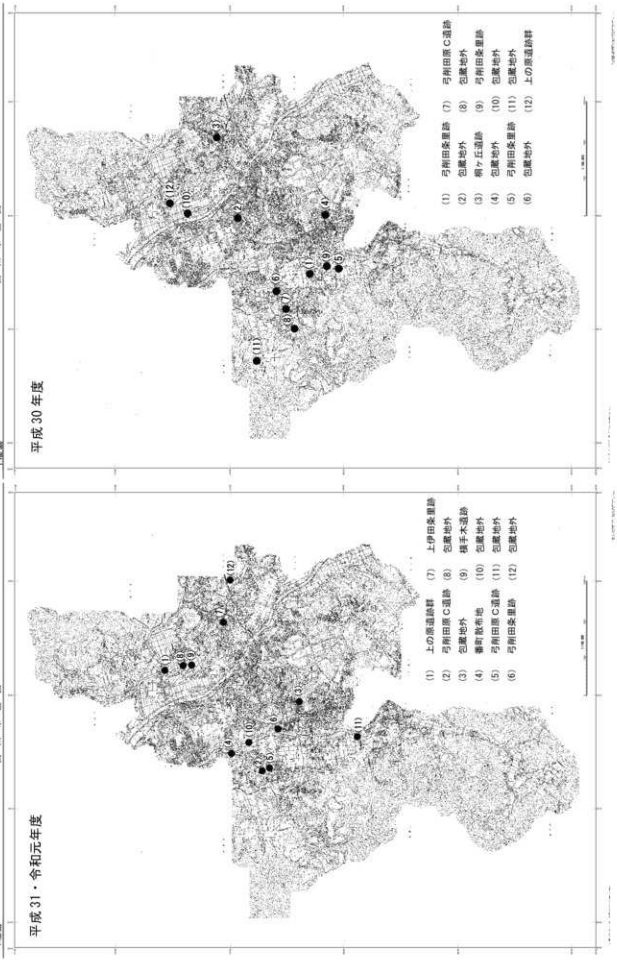
10	包蔵地外	田川市大字川宮367-13・20	個人住宅	令和2年2月10日	遺構・遺物なし	
11	包蔵地外	田川市大字位登1228-1・2	住　宅	令和2年3月29日	遺構・遺物なし	
12	包蔵地外	田川市大字伊田541-13	住　宅	令和2年3月29日	遺構・遺物あり	遺跡分布地図の追補（鎮西遺跡），令和2年度本調査

表9　平成31・令和元年度工事立会等一覧工事

番号	遺跡名	調査地	調査原因	工事立会日	調査結果	備　考
1	俵ヶ丘横穴群	田川市大字夏吉1258-31	個人住宅	平成31年4月20日	遺構・遺物なし	
2	包蔵地外	田川市大字川宮1478-8	個人住宅	令和元年5月15日	遺構・遺物なし	
3	包蔵地外	田川市大字夏吉330-8	個人住宅	令和元年5月22日	遺構・遺物なし	
4	包蔵地外	田川市大字伊田1609-9	個人住宅	令和元年6月4日	遺構・遺物なし	
5	包蔵地外	田川市桜町4-13	浄化槽設置	令和元年6月6日	遺構・遺物なし	
6	包蔵地外	田川市白鳥町13-2	個人住宅	令和元年6月21日	遺構・遺物なし	
7	包蔵地外	田川市大字糒2182	その他開発	令和元年7月4日	遺構・遺物なし	無線基地局建設
8	伊加利条里跡	田川市大字伊加利577-5	浄化槽設置	令和元年7月10日	遺構・遺物なし	
9	包蔵地外	田川市大字伊田428	住　宅	令和元年7月16日	遺構・遺物なし	
10	上の原遺跡群	田川市大字糒1771	排水管設置・電気埋設	令和元年7月31日～令和元年8月22日	遺構・遺物なし	金川小学校、図版1
11	包蔵地外	田川市栄町4-23	排水管設置	令和元年8月2日	遺構・遺物なし	田川小学校
12	包蔵地外	田川市宮尾町1-9	排水管設置	令和元年8月17日	遺構・遺物なし	後藤寺小学校
13	包蔵地外	田川市大字伊加利1933	個人住宅	令和元年9月13日	遺構・遺物なし	
14	包蔵地外	田川市大字伊田3746-1	住　宅	令和元年9月26日	遺構・遺物なし	
15	田三井田川鉱業所伊田坑跡	田川市大字伊田2724,2725	その他開発	令和元年10月10日	遺構・遺物なし	モニュメント設置
16	包蔵地外	田川市白鳥町2600-2	浄化槽設置	令和元年10月29日	遺構・遺物なし	
17	包蔵地外	田川市大字奈良1529-245	住　宅	令和元年11月7日	遺構・遺物なし	
18	弓削田条里跡	田川市大字弓削田112-3	住　宅	令和元年11月19日	遺構・遺物あり	
19	包蔵地外	田川市大字夏吉3046-1	住　宅	令和元年11月20日	遺構・遺物なし	
20	弓削田原C遺跡	田川市大字弓削田954-1の一部,957-3	個人住宅	令和元年11月20日	遺構・遺物なし	工事計画変更、図版1
21	弓削田原C遺跡	田川市大字弓削田930-1	住　宅	令和元年11月27日	遺構・遺物なし	
22	包蔵地外	田川市大字伊田2473-3	その他開発	令和元年11月29日	遺構・遺物なし	無線基地局建設
23	包蔵地外	田川市大字奈良1529-36	浄化槽設置	令和元年11月29日	遺構・遺物なし	
24	包蔵地外	田川市大字伊田1645-8	浄化槽設置	令和元年12月11日	遺構・遺物なし	
25	上の原遺跡群	田川市大字糒1771	その他開発	令和2年2月18日	遺構・遺物なし	金川小学校屋内運動場階段設置
26	包蔵地外	田川市大字夏吉1172-5	住　宅	令和2年3月2日	遺構・遺物なし	
27	包蔵地外	田川市大字川宮1430-20	浄化槽設置	令和2年3月11日	遺構・遺物なし	



第２図　平成28・29年度試掘・確認調査地点位置図（S＝1/100,000）



第3図　平成30・31・令和元年度試掘・確認調査地点位置図（S＝1/100,000）

第Ⅱ章　試掘・確認調査の記録

第１節　平成28年度試掘・確認調査の概要

（1）　包蔵地外（第４図）

調 査 地：田川市大字伊田1685番地４

調査概要：調査対象地は、市東部の南東から北西へ派生する台地下に立地する。標高は約24ｍに位置する。埋蔵文化財等事前審査を受け、周囲の地形や工事計画から判断して、試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計約7.7㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.1×4.8ｍを設けて、深度約２ｍまで掘削を行った。Ｔ２は1.1×5ｍを深度約2.6ｍまで掘削を行った。この調査の結果、Ｔ１・Ｔ２とも造成土を確認し、遺構・遺物は確認されなかった。

（2）　上の原遺跡群（第５図）

調 査 地：田川市大字糒496番地１、499番地、503番地

調査概要：本遺跡は、彦山川右岸と金辺川左岸に挟まれた枝状台地に立地する。標高は約39ｍに位置する。調査区（Ｔ）は１箇所設定し、重機を用いて、計6.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は約2×3.4ｍを設けて、深度約0.25ｍで地山と遺構を確認した。この調査結果を受けて、土地所有者等と協議した結果、開発行為等の計画変更を行った。

（3）　下伊田条里跡（第６図）

調 査 地：田川市大字伊田4390番地

調査概要：本遺跡は、彦山川右岸の谷底状平野に広がる条里跡でＮ－4°－Ｗと推定されている。標高は約24ｍに位置する。道路新設に伴う開発行為等の計画に基づいて、調査区（Ｔ）は１箇所設定し、重機を用いて、計約3.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は１×３ｍを設けて、深度約1.8ｍまで掘削を行った。土層は１層が造成土、２層はボタによる造成土を確認した。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

（4）　包蔵地外（第７図）

調 査 地：田川市桜町519番８、562番６

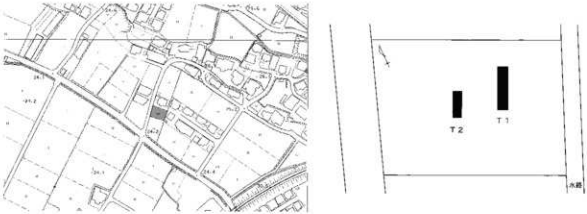
調査概要：調査対象地は中元寺川右岸に立地し、南北を台地に挟まれる。標高は約37ｍに位置する。埋蔵文化財等事前審査を受け、周囲の地形や工事計画から判断して、試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は５箇所設定し、重機を用いて、計約18.6㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.2×3.0ｍを設けて、深度約1.7ｍまで掘削を行った。Ｔ２は1.2×3.0ｍを深度約1.8ｍまで掘削を行った。Ｔ３は1.2×2.5ｍを設けて、深度約1.7ｍまで掘削を行った。Ｔ４は1.2×3.5ｍを設けて、深度約2.6ｍまで掘削を行った。Ｔ５は1.2×3.5ｍを設けて、深度約1.7ｍまで掘削を行った。この調査の結果、Ｔ１～３は石炭ガラを含む造成土、深度最下部に地山と考えられる黄褐色粘質土を確認した。Ｔ４・５は石炭ガラを含む造成土を確認した。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

（5）　弓削田条里跡（第８図）

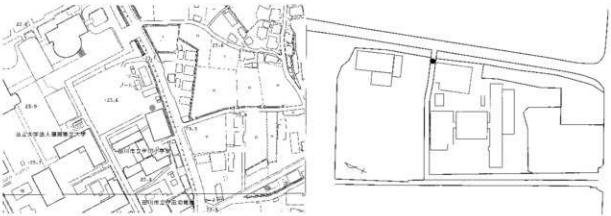
調 査 地：田川市大字弓削田117番地３

調査概要：本条里跡は、中元寺川左岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－4°－Ｗと推定されている。標高は約30ｍに位置する。調査区（Ｔ）は１箇所設定し、重機を用いて、計約4.5㎡実施した。

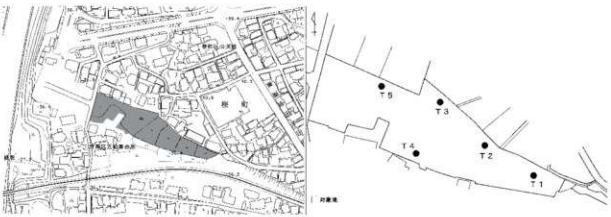


第４図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）

第５図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）



第６図　下伊田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）



第７図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）

調査結果：Ｔ１は1.2×3.8mを設けて、深度約２mまで掘削を行った。土層は１層が地表から1.4mまで石炭ガラを含む造成土、２層が地山と考えられる青灰色粘質土を呈し、砂層が混じる。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

(6)　包蔵地外（第９図）

調　査　地：田川市大字伊加利2091番地８、2100番地７、2099番地３

調査概要：調査対象地は、彦山川左岸の市内中心を南北に走る台地に立地する。標高は約61mである。都市計画法第32条を受けて、周囲の地形や工事計画から判断して、試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は３箇所設定し、重機を用いて、計約7.5㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は0.9×1.8mを設けて、深度約1.1mまで掘削を行った。堆積は地表から約0.4mまで表土、２層が造成土、３層が花崗岩風化土の地山である。Ｔ２は0.9×2.0mを深度約0.5mまで掘削を行った。堆積は表土から0.1mまで表土、２層が花崗岩風化土の地山である。３層は深度1.3mまで表土である。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

第２節　平成29年度試掘・確認調査の概要

(1)　包蔵地外（第10図）

調　査　地：田川市大字川宮1717番地５、1720番地３・４・５・６、1728番地４、1724番地・1725番地・1726番地２・３・1729番地１・1734番地11・1744番地２の一部

調査概要：調査対象地は、彦山川と中元寺川に挟まれた市内中心を南北に走る台地に立地する。標高は約40mである。埋蔵文化財等事前審査を受け、周囲の地形や工事計画から判断して、試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は重機を用いて、２箇所設定し、計約9.1㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は約1.1×4.2mを深度約2.9mまで掘削を行った。堆積は地表から約1.6mまで造成土、２層がボタの盛土、３層が黄褐色礫土の盛土である。Ｔ２は約1.1×4.0mを設けて、深度約2.9mまで掘削を行った。堆積は地表から約1.2mまで造成土、２層がボタの盛土である。この調査の結果、確認・遺物は確認されなかった。

(2)　弓削田条里跡（第11図）

調　査　地：田川市大字奈良259番地１

調査概要：本条里跡は、中元寺川右岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－4°－Ｗと推定されている。標高は約29mに位置する。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて計約13.0㎡実施した。

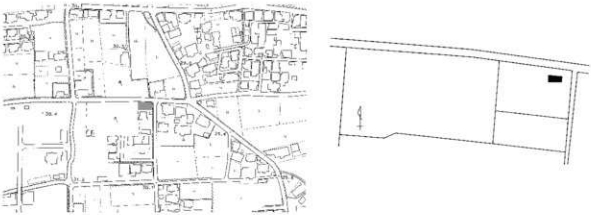
調査結果：Ｔ１は1.1×2.8mを設けて、深度2.8mまで掘削を行った。土層は地表から約0.3mまで耕作土、２層が盛土である。Ｔ２は1.1×3.2mを設けて、深度1.7mまで掘削を行った。堆積は地表から0.3mまで耕作土、２層が盛土である。この調査の結果、遺構は確認されなかったものの、Ｔ１の２層から遺物を確認した。

(3)　弓削田原Ｂ遺跡（第12図、図版１）

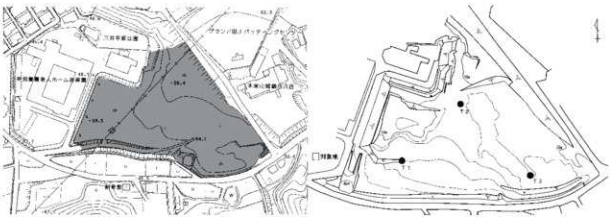
調　査　地：田川市大字弓削田482番地11

調査概要：本遺跡は、船尾山から北東へ派生する枝状台地に立地する。標高約38mに位置する。調査区（Ｔ）は３箇所設定し、重機を用いて、計約24.5㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.2×7.3mを設けて、深度約0.3mまで掘削を行った。Ｔ２は1.4×5.8mを設けて、深度約0.3mまで掘削を行った。Ｔ３は1.7×4.3mを設けて、深度約0.3mまで掘削を行った。この調査の結果、全て表土直下に遺構の展開を確認した。開発行為に伴う深度まで遺構の影響を受けるため、指示事項として記録保存による発掘調査とした。



第８図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）



(4)　上の原遺跡群（第13図、図版１）

調　査　地：田川市大字糒485番地２

調査概要：本遺跡は、彦山川右岸と金辺川左岸に挟まれた枝状台地に立地する。標高は約39mに位置する。調査区（Ｔ）は１箇所設定し、重機を用いて、計約5.5㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.0×5.5mを設けて、深度約0.3mまで確認した。この調査の結果、耕作土直下に遺構の展開を確認した。開発行為に伴う深度まで遺構の影響を受けるため、指示事項として記録保存による発掘調査とした。

(5)　包蔵地外（第14図）

調　査　地：田川市大字奈良1587番地158

調査概要：調査対象地は、大浦川左岸に立地する標高約51mに位置する。都市計画道路「中央団地川宮線」の新設であったため、田川県土整備事務所と協議の結果、事前に試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計約3.3㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は0.9×1.2mを設けて、深度約2.2mまで確認した。堆積は表土からボタによる盛土である。Ｔ２は0.9×2.5mを設けて、深度約2.5mまで掘削を行った。堆積は表土から約1.7mまでボタによる盛土、２層が白色粘質土である。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

(6)　包蔵地外（第15図、図版１）

調　査　地：田川市大字伊田3824番地４、23837番地、3839番地、3841番地

調査概要：調査対象地は、彦山川右岸の標高約46mの丘陵上に立地する。埋蔵文化財等事前審査を受け、猫迫１号墳が隣接地にあたるため、関係者との協議の結果、周囲の地形や開発計画および範囲確認調査の結果から判断して、試掘調査を実施した。調査区（Ｔ）は４箇所設定し、重機を用いて、計約35.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.1×7.0mを設けて、深度約0.45mまで確認した。土層は地表から0.2mが表土、２層が茶褐色粘質土、３層が黄褐色粘質土である。Ｔ２は1.1×9.0mを設けて、深度約0.18mまで掘削を行った。土層は表土から約0.18mまで表土、２層が黄褐色粘質土である。Ｔ１・２の３層で遺構が確認できた。Ｔ３は1.1×2.0mを設けて、深度約0.9mまで掘削を行った。土層は表土から造成土である。Ｔ４は1.1×4.6mを設けて、深度約0.52mまで掘削を行った。土層は表土から造成土である。この調査の結果、Ｔ１・２で遺構が認められたため、文化財包蔵地カードの訂正を行い、周知化を進めた。

(7)　上本町遺跡（第16図）

調　査　地：田川市上本町７番11

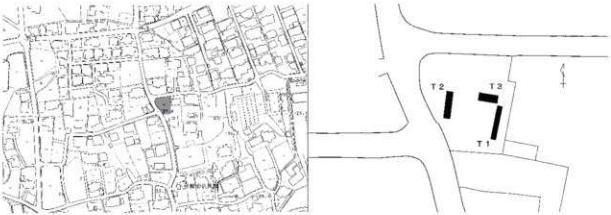
調査概要：本遺跡は、中元寺川右岸の標高約41～48mの丘陵上に立地する。文化財保護法第94条通知を受けて、福岡県教育庁教育企画部施設課と協議の結果、事前に確認調査を実施した。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計27.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.2×5.2mを設けて、深度約1.7mまで確認した。堆積状況は地表から約0.9mまで造成土、２層が旧水田層、３層が黄褐色粘質土の地山である。Ｔ２は1.2×1.6mを設けて、深度約3.5mまで確認した。堆積状況は地表から約３mまでボタを含む造成土、２層が砂利を含む造成土、３層が旧水田層であった。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったため、指示事項として慎重工事とした。

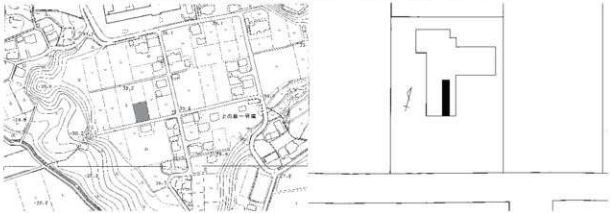
第３節　平成30年度試掘・確認調査の概要

(1)　弓削田条里跡（第17図）

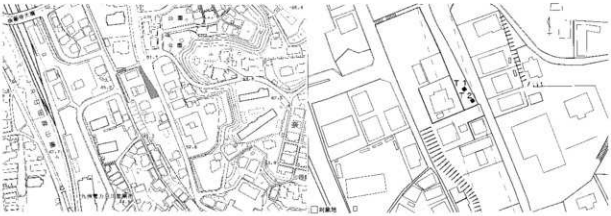
調　査　地：田川市大字弓削田175番地20・23・29・30・31



第12図　弓削田原Ｂ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）



第13図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/300）



第14図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）

第15図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）

調査概要：本条里跡は、中元寺川左岸の谷底状平野に広がる条里跡である。標高は約30mである。条里はN－4°－Eと推定されている。調査区（T）は1箇所設定し、重機を用いて、計約4.8㎡実施した。

調査結果：T1は1.1×4.2mを設けて、深度約2.8m、堆積状況は地表から0.7mが造成土、2層がボタ、3層が茶褐色粘質土の盛土である。この調査の結果、遺構・遺物は確認されなかったため、指示事項として慎重工事とした。

(2) 包蔵地外（第18図）

調 査 地：田川市大字伊田4968番地2、4972番地2、4973番地2

調査概要：埋蔵文化財等事前審査を受け、周囲の地形や開発計画から判断して関係者との協議の結果、試掘調査を実施した。標高は約48mである。調査区（T）は6箇所設定し、重機を用いて、計33.0㎡実施した。

調査結果：T1は1.5×3.8mを設けて、深度約0.5mで地山を確認した。調査区北から約1.9m付近に、地山を掘りこんだ旧建物の基礎が確認された。T2は1.5×3.3mを設けて、深度約0.5mで地山を確認した。T3は1.5×3.5mを設けて、深度約0.5mまで確認した。T4は1.5×3.5mを設けて、深度約0.5mまで確認した。T5は1.5×3.5mを設けて、深度約0.5mまで確認した。T6は1.5×4.2mを設けて、深度約0.5mまで確認した。北から約0.5mの範囲に地山を掘りこんで旧建物の基礎を確認した。全ての調査区の土層は、地表面直下は砂利とシャモットで、地表から深度約0.5mで黄褐色土の砂岩層である地山を確認した。この結果、遺構を確認できなかった。

(3) 桐ヶ丘遺跡（第19図）

調 査 地：田川市大字夏吉197番地13・14・61

調査概要：本遺跡は、市内中央を南北に走る丘陵上に立地する。標高は約42mである。調査区（T）は12箇所設定し、重機を用いて、計約72.0㎡実施した。

調査結果：T1は1.1×3.5mを設けて、深度約0.9mまで確認した。T2は1.1×6.9m、深度0.6mまで確認した。T3は1.1×6.9mを設けて、深度約0.9mまで確認した。T4は1.2×6.3m、深度0.5mまで確認した。T5は2.2×3.2mを設けて、深度約0.5mまで確認した。T6は1.2×8.1m、深度1.5mまで確認した。T7は1.2×3.8mを設けて、深度約0.4mまで確認した。T8は2.2×2.1m、深度0.5mまで確認した。T9は2.2×2.0mを設けて、深度約0.7mまで確認した。T10は1.1×4.1m、深度0.8mまで確認した。T11は1.1×5.8mを設けて、深度約0.8mまで確認した。T12は1.1×4.8m、深度0.8mまで確認した。土層は各Tともに表土を取り除くと、2層で黄褐色粘質土の地山を確認した。出土遺物はT2から黒曜石剥片、T3から土器片が出土した。

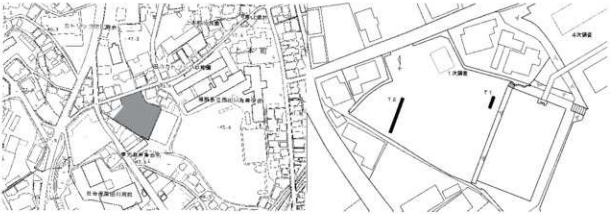
このため指示事項として、開発行為等の場合は慎重に実施し、埋蔵文化財を発見した場合は、部分的な発掘調査を実施するなどの協議を行うこととした。

(4) 包蔵地外（第20図）

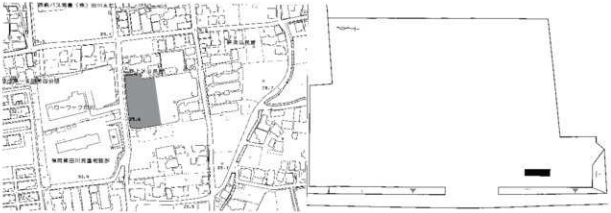
調 査 地：田川市大字奈良1594番地5、1597番地3、1594番地3の一部、1597番地2の一部

調査概要：調査対象地は、大浦川右岸に立地する標高約51mに位置する。都市計画道路「中央団地川宮線」の新設であったため、田川県土整備事務所と協議の結果、事前に試掘調査を実施した。調査区（T）は2箇所設定し、重機を用いて、計約16.0㎡実施した。

調査結果：T1は1.5×3.5mを設けて、深度約3.5mまで確認した。T2は0.7×4mを設けて、深度3.6mまで確認した。T1・2ともに表土を取り除くと、ボタの堆積が認められた。この結果、遺構・遺物は確認できなかった。

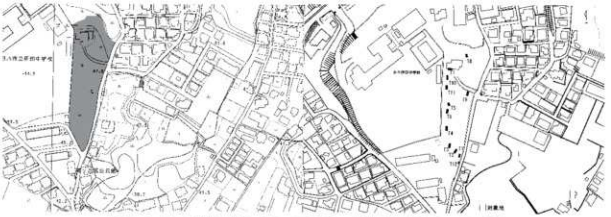


第16図　上本町遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）



第17図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）

第18図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）



第19図　桐ヶ丘遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/4,000）

(5) 弓削田条里跡（第21図）

調 査 地：田川市大字奈良39番地３

調査概要：本条里跡は、中元寺川左岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－４°－Ｅと推定されている。標高は約28.6ｍである。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計約7.8㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は約1.2×2.9ｍを設けて、深度約1.0ｍまで確認した。土層は２～４層が盛土、５層で礫層を確認した。Ｔ2は約1.2×3.4ｍを設けて、深度約1.8ｍまで確認した。土層は２層が盛土を確認した。この結果、遺構・遺物は確認できなかったため、指示事項として慎重工事とした。

(6) 包蔵地外（第22図）

調 査 地：田川市大字弓削田541番地10

調査概要：本調査対象地は、中元寺川右岸の標高約40ｍの丘陵上に立地する。埋蔵文化財等事前審査を受け、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を２箇所設定し、重機を用いて、計18.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.2×3.0ｍを設けて、深度約1.0ｍまで確認した。土層は１層が耕作土、２層が盛土、３層が礫層を確認した。Ｔ2は1.2×3.4ｍ、深度約1.8ｍまで確認した。土層は１層が耕作土、２層が盛土を確認した。この結果、遺構・遺物は確認できなかった。

(7) 弓削田原Ｃ遺跡（第23図）

調 査 地：田川市大字弓削田1052番地３

調査概要：本遺跡は、船尾山から東方向に枝状に延びる丘陵上に位置する。標高は約34ｍに立地する。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計17.7㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.1×10.4ｍを設けて、深度約0.6ｍまで確認した。土層は盛土・造成土であった。Ｔ２は1.8×3.2ｍを設けて、深度約1.1ｍまで確認した。土層は盛土・地山を確認した。この結果、遺構・遺物は確認できなかったため、指示事項として慎重工事とした。

(8) 包蔵地外（第24図）

調 査 地：田川市大字弓削田2838番地49

調査概要：調査対象地は、泌川右岸の独立した丘陵に位置する。標高は約47ｍに立地する。埋蔵文化財等事前審査を受け工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を４個所設定し、重機を用いて、計7.2㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.0×1.2ｍを設けて、深度約1.0ｍまで確認した。Ｔ２は1.0×2.0ｍを設けて、深度約0.7ｍまで確認した。Ｔ３は1.0×2.0ｍを設けて、深度約2.7ｍまで確認した。Ｔ４は1.0×2.0ｍを設けて、深度約0.7ｍまで確認した。Ｔ１～４まで造成土・盛土を確認した。この結果、遺構・遺物は確認できなかった。

(9) 弓削田条里跡（第25図）

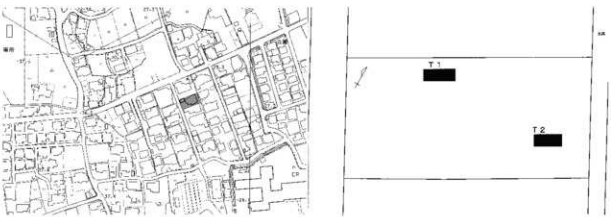
調 査 地：田川市大字奈良17番地２・４

調査概要：本条里跡は、中元寺川左岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－４°－Ｅと推定されている。標高は約29ｍである。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計8.8㎡実施した。

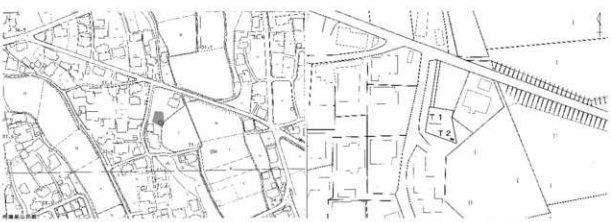
調査結果：Ｔ１は1.2×7.9ｍを設けて、深度約1.6ｍまで確認した。土層は１層が造成土、２層が耕作土、３層がにぶい黄褐色砂質土、４層が灰黄褐色砂質土、５層が褐灰色砂質土を確認した。Ｔ２は1.2×6ｍを設けて、深度1.5ｍまで確認した。堆積状況はＴ１の１～４層の土質である。出土遺物は、Ｔ１の２～３層で弥生土器を確認した。この結果、遺構は確認できなかっ

第20図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）

第21図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）



第22図　包蔵地外地調査位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）



第23図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）

たため、指示事項として工事立会とした。

（10） 包蔵地外（第26図）

調 査 地：田川市大字糒751番地１・２・３・４

調査概要：調査対象地は、彦山川右岸に位置する。標高は約21mに立地する。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断し、試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（T）を１箇所設定し、重機を用いて、計8.0㎡実施した。

調査結果：T１は1.0×2.0mを設けて、深度約0.4mまで確認した。土層は盛土を確認した。この結果、遺構・遺物は確認できなかった。

（11） 包蔵地外（第27図）

調 査 地：田川市大字弓削田3646番地１、3649番地１・２・３、3652番地１、3654番地１・３・４、3655番地２、3657番地１、3658番地１、3804番地２

調査概要：調査対象地は、田川市と糸田町の市町境から派生する泌川支流右岸の標高約33mの低丘陵上に位置する。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断し、試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（T）を６箇所設定し、重機を用いて、計30.6㎡実施した。

調査結果：T１は1.2×3.5mを設けて、深度約2.9mまで確認した。T２は1.2×3.5mを設けて、深度約1.8mまで確認した。T３は1.2×3.0mを設けて、深度約1.5mまで確認した。T４は1.2×3.0mを設けて、深度約1.5mまで確認した。T５は1.2×5.5mを設けて、深度約2.2mまで確認した。T６は1.2×7.0mを設けて、深度約1.5mまで確認した。全てトレンチの１層が造成土、２層が盛土、T１～３・５・６の３層で黄褐色・褐色・赤褐色粘質土の地山を確認した。この調査の結果、遺構は確認できなかった。

（12） 上の原遺跡群（第28図、図版１）

調 査 地：田川市大字糒481番地１、476番地１、477番地１

調査概要：本遺跡は、彦山川右岸と金辺川左岸に挟まれた枝状台地に立地する。標高は約39mに位置する。市道新設に伴い、市土木課と協議した結果、確認調査を実施した。調査区（T）は４箇所設定し、重機を用いて、計18.3㎡実施した。

調査結果：T１は1.0×5.0mを設けて、深度約0.5～0.6mまで確認した。T２は1.0×5.0mを設けて、深度約0.3mまで確認した。T３は1.0×4.3mを設けて、深度約0.3mまで確認した。T４は1.0×4.0mを設けて、深度約0.3～0.4mまで確認した。この調査の結果、遺構を確認したため、指示事項として記録保存による発掘調査とした。

第４節 平成31・令和元年度試掘・確認調査の概要

（1） 上の原遺跡群（第29図、図版１）

調 査 地：田川市大字糒490番地１の一部

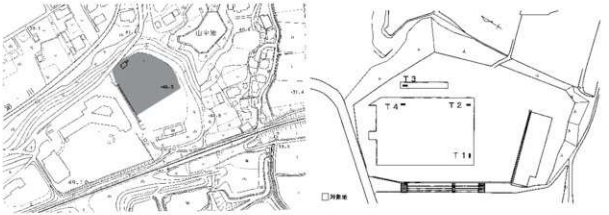
調査概要：本遺跡は、彦山川右岸と金辺川左岸に挟まれた枝状台地に立地する。標高は約39mに位置する。調査区（T）は１個所設定し、重機を用いて、計9.5㎡実施した。

調査結果：T１は約1.1×8.5mを設けて、深度約0.25mで地山を確認した。この調査の結果、遺構を確認したため、指示事項として記録保存による発掘調査とした。

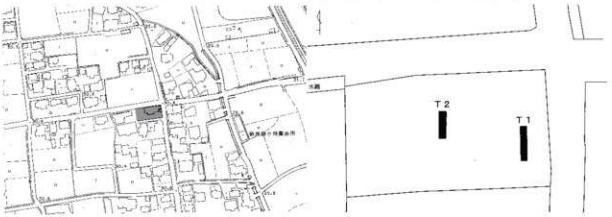
（2） 弓削田原Ｃ遺跡（第30図）

調 査 地：田川市大字弓削田909番地１・２

調査概要：本遺跡は、船尾山から東方向に枝状に延びる丘陵上である。標高は約34mである。調査区（T）を２箇所設定し、重機を用いて、計13.8㎡実施した。

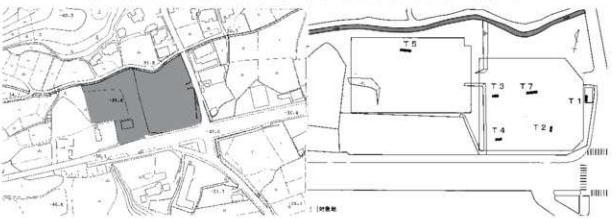


第24図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）



第25図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/400）

第26図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,200）



第27図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,400）

調査結果：Ｔ１は1.1×6.5mを設けて、深度約0.2mまで確認した。Ｔ２は1.1×6.1mを設けて、深度約0.2m、土層は耕作土直下に黄褐色粘質土の地山を確認した。この調査の結果、遺構は確認できなかったため、指示事項として慎重工事とした。

(3)　包蔵地外（第31図）

調　査　地：田川市本町940番８・９

調査概要：調査対象地は、中元寺川右岸の丘陵地に位置する。標高は約46mである。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を２箇所設定し、重機を用いて、計約17.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は2.3×1.0mを設けて、深度約0.3m、Ｔ２は2.0×5.0mを設けて、深度1.0m、Ｔ３は1.0×2mを設けて、深度0.8mまで確認した。土層は１層が造成土、２層がＴ１・２で黄褐色砂礫土、Ｔ３がレンガ構造物である。３層は地山を確認した。調査の結果、Ｔ２で遺構を確認したため、記録保存を行った。Ｔ３のレンガ構造物は建物床面と捉えられたが、壁面構造は認められなかった。このため、本町遺跡として遺跡分布地図の追補を行った。

(4)　番町散布地（第32図、図版１）

調　査　地：田川市大字川宮137番地５

調査概要：本遺跡は、船尾山から東方向に枝状に延びる標高約34mの丘陵上である。確認調査はトレンチを２箇所設定し、重機を用いて、計12.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は2.0×3.0mを設けて、深度約0.5mまで確認した。Ｔ２は2.0×3.0mを設けて、深度約0.5mまで確認した。土層は１層が造成土、２層が耕作土、３層が明赤褐色粘質土の地山と遺構を確認した。Ｔ２は１～３層が造成土、４層が茶褐色粘質土の地山を確認した。遺構及び出土遺物はＴ１の３層で確認した。このため関係者と協議の結果、計画の変更なしであったため、指示事項として記録保存による発掘調査とした。また、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を広げ、遺跡名を番町遺跡と文化財包蔵地カードの訂正を行った。

(5)　弓削田原Ｃ遺跡（第33図）

調　査　地：田川市大字弓削田954番地１、957番地３

調査概要：本遺跡は、船尾山から東方向に枝状に延びる標高約38mの丘陵上である。確認調査はトレンチを２箇所設定し、重機を用いて、計22.0㎡実施した。

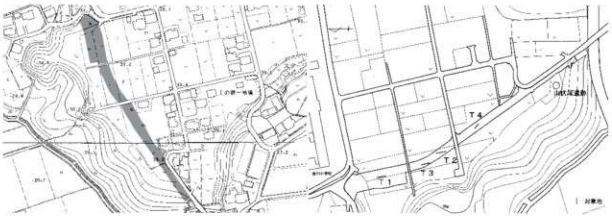
調査結果：Ｔ１は2.4×2.2mを設定し、深度約0.3m、Ｔ２は2.0×3.5mを設定し、深度約0.2mまで確認した。土層はＴ１の１層が整地層、２・３層はＴ１・２と同じで造成土・明茶褐色粘質土の地山と遺構を確認した。このため関係者と協議の結果、計画変更による保存対応が可能であったため、指示事項として工事立会とした。工事立会は建物基礎工事と浄化槽設置に実施し、土坑跡を確認したため、一部記録保存による調査を実施した。

(6)　弓削田条里跡（第34図、図版８）

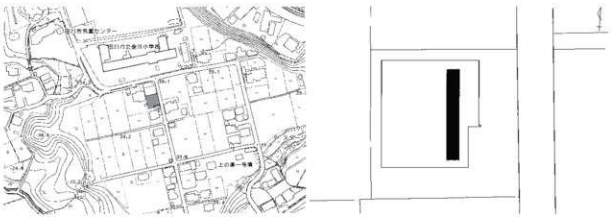
調　査　地：田川市大字奈良334番地３の一部

調査概要：本条里跡は、中元寺川左岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－4°－Ｅと推定されている。標高は約28mである。工事計画等から判断して確認調査を実施した。調査区（Ｔ）は２箇所設定し、重機を用いて、計6.0㎡実施した。

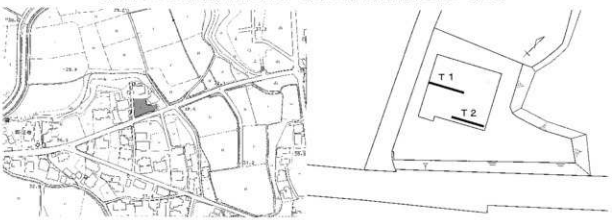
調査結果：Ｔ１・２は1.8×5.0mを設定し、深度約4.2mまで確認した。土層は１層が耕作土、２層が造成土、３層が礫層、４層が粘質土、５層が砂質土を確認した。この調査の結果、遺構・遺物は確認できなかったため、指示事項として慎重工事とした。



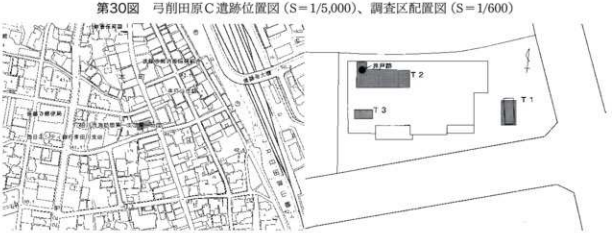
第28図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）



第29図　上の原遺跡群位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/300）



第30図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）



第31図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/200）

(7) 上伊田条里跡（第35図）

調 査 地：田川市大字伊田3741番地２、3742番地

調査概要：本条里跡は、彦山川右岸の谷底状平野に広がる条里跡である。条里はＮ－1°－Ｅと推定されている。標高は約7.8mである。調査区（Ｔ）は１箇所設定し、重機を用いて、計6.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は約1.2×6.5mを設けて、深度約2.1mまで確認した。土層は１層が整地層、２～４層が造成土である。この調査の結果、遺構・遺物は確認できなかったため、指示事項として慎重工事とした。

(8) 包蔵地外（第36図）

調 査 地：田川市大字糒224番地１

調査概要：調査対象地は、彦山川右岸の枝状台地下に位置する。標高は約24mである。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を１箇所設定し、重機を用いて、計約7.2㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は2.0×3.0m＋1.2×1.0mを設けて、深度約3.1mまで確認した。土層は１層が耕作土、２層が造成土、３層は旧耕作土、４層は暗黒色粘質土、５層は暗黒色粘質土に礫層を含む層を確認した。この調査の結果、遺構・遺物は確認できなかった。

(9) 横手木遺跡（第37図）

調 査 地：田川市大字糒159番地

調査概要：本遺跡は、彦山川右岸の標高約38mの丘陵地に位置する。調査区（Ｔ）は４箇所設定し、重機を用いて計約11.0㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.0×3.0mを設けて、深度約0.4～0.5mまで確認した。Ｔ２は1.0×3.0mを設けて、深度約0.7～0.8mまで確認した。Ｔ３は1.0×3.0mを設けて、深度約0.4～0.5mまで確認した。Ｔ４は1.0×2.0mを設けて、深度約0.4～0.5mまで確認した。土層は、表土直下が白色及び黄褐色粘土層の地山で、調査の結果、遺構・遺物が確認できなかったので、指示事項として工事立会とした。

(10) 包蔵地外（第38図）

調 査 地：田川市大字川宮367番地13・20

調査概要：調査対象地は、中元寺川左岸の標高約26mの低丘陵地に位置する。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を３箇所設定し、重機を用いて、計6.0㎡実施した。

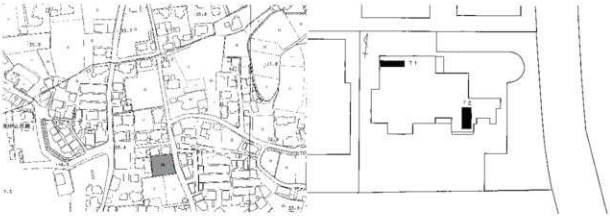
調査結果：Ｔ１は1.0×2.0mを設けて深度約1.0m、Ｔ２は1.0×2.0mを設けて深度1.7m、Ｔ３は1.0×2.0mを設けて深度1.4mまで確認した。土層は、表土直下がシャモットを含む造成土で、地表から深度約1.5mに地山と思われる岩盤を一部確認した。調査の結果、遺構・遺物を確認できなかった。

(11) 包蔵地外（第39図）

調 査 地：田川市大字位登1228番地１・２

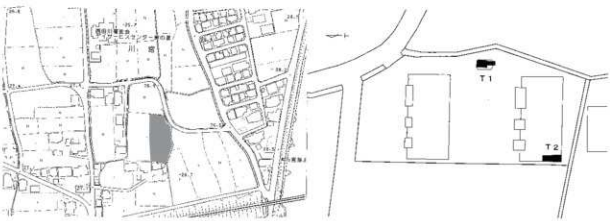
調査概要：調査対象地は、金国山から東へ派生する丘陵地に位置する。標高は約42mである。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（Ｔ）を１箇所設定し、重機を用いて、計約4.6㎡実施した。

調査結果：Ｔ１は1.1×3.8mを設けて、深度約2.6mまで確認した。土層は１層が表土、２層が盛土、３層が褐色礫土を確認した。この調査の結果、遺構・遺物を確認できなかった。



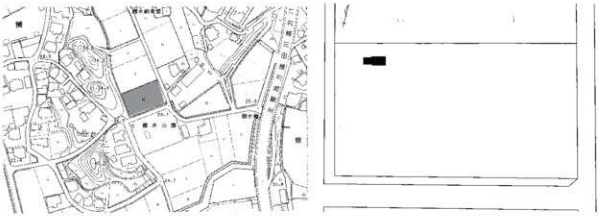
第32図　番町散布地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）

第33図　弓削田原Ｃ遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,800）



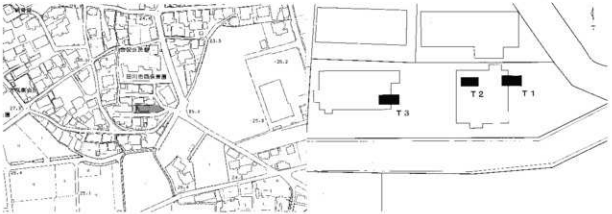
第34図　弓削田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,000）

第35図　上伊田条里跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）



第36図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）

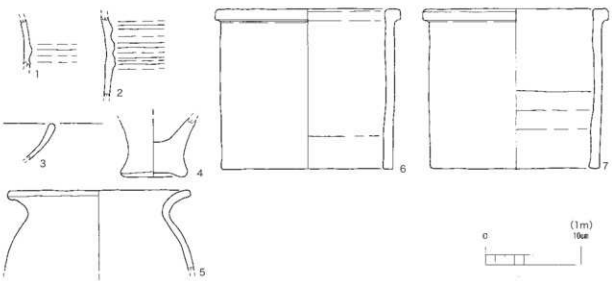
第37図　横手木遺跡位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/2,000）



第38図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/600）

第39図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/1,600）

第40図　包蔵地外調査地位置図（S＝1/5,000）、調査区配置図（S＝1/800）



第41図　確認調査・工事立会出土遺物（1～5はS＝1/4、6・7はS＝1/20）

（12）　包蔵地外（第40図）

調 査 地：田川市大字伊田541番地13

調査概要：調査対象地は、彦山川右岸の標高約43mの丘陵地に位置する。埋蔵文化財等事前審査を受けて、工事計画等から判断して試掘調査を実施した。試掘調査は調査区（T）を1箇所設定し、重機を用いて、計約9.8㎡実施した。

調査結果：T1は2.0×7.0mを設けて、深度約0.6mまで確認した。土層は1層が表土、2層が褐色粘質土、3層が黒色粘質土、4層は赤褐色粘質土の地山と遺構を確認した。出土遺物は3層で平瓦・土器を確認した。この調査の結果、遺構を確認したため、鎮西遺跡として遺跡分布地図の追補を行い、関係者と協議の結果、文化財保護法第93条届出を受け、指示事項として発掘調査とした。

第5節　確認調査・工事立会出土遺物（第41図、表13、図版1）

1は、平成29年度工事立会⑵で出土した壺胴部片である。2条の断面が三角形の突帯が巡る。2・4は、平成28年度工事立会⑿で出土した。2は壺胴部片で、3条の断面が台形の突帯が巡る。4は、甕の底部である。3は、平成31・令和元年度工事立会⒇で出土した鉢の口縁部である。5は、平成30年度確認調査⑼で出土した甕である。6・7は、平成31・令和元年度試掘調査⑶で出土した陶器製の井戸側である。口縁部は短く、断面が方形を呈する。外面は回転ヘラ削り、内面は口縁部が回転ヘラ削り、胴部が指押え後横位のヘラ削り、胴部下端がヘラ削りを施す。断面は、粘土の繋目による肥厚が認められる。

第Ⅲ章　市内遺跡発掘調査の記録

第１節　弓削田原Ｂ遺跡２次の調査

(1)　発掘調査の経緯と概要（第42～44図、表13、図版２）

周知の埋蔵文化財包蔵地である弓削田原Ｂ遺跡内での個人住宅建設にともなって、確認調査を実施した結果、遺構を確認した。平成29年７月18日付け田教文第164号の６にて文化財保護法第93条第１項による届出を受理し、平成29年７月19日付け29教文第１号の463にて県より発掘調査の指示があったため、工事施工者と協議の結果、遺構の保存に支障が生じる範囲について、田川市教育委員会埋蔵文化財取扱要綱により記録保存を目的とする発掘調査を田川市教育委員会が実施することとなった。調査区の面積は工事対象面積の66㎡で、調査期間は平成29年７月31日から８月10日まで実施した。

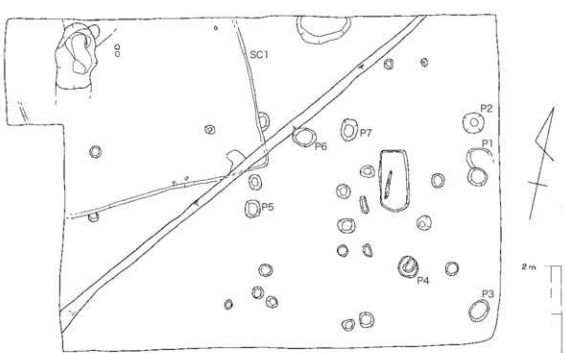
弓削田原Ｂ遺跡は、南西で船尾山を背にした標高約37～38ｍの微高地に立地する。今回の２次調査では、ピット・土坑が検出された他、方形プランの住居跡が１基確認された。当該遺跡はもともと弥生時代の散布地として周知されていたが、出土遺物から、主に古墳時代の遺構を確認した。

(2)　遺構と遺物

竪穴住居跡

SC１（第43図、図版２）

調査区北東隅に地表面から0.35ｍ付近で確認できた住居跡で、東西幅4.8ｍ、深度0.1ｍを測る。住居跡の西側は後世に攪乱を受けていた。北側は調査区外であるが、西側に約0.3ｍ長の立ち上がりが確認できたため、方形プランの住居跡と考えられる。床面南側に住居の柱穴と考えられるピットが２つ確認できた。住居の中央部分では、床面の窪みを補修した痕跡が確認された。住居床面の南東隅付近では、黄褐色の粘土が0.3～0.4ｍの範囲に厚さ0.1ｍほど堆積していたが、付近は後世のパイプで攪乱を受けていたため、性格は不明である。出土遺物は須恵器と砥石があり、形状から６世紀後半～末頃の住居と考えられる。

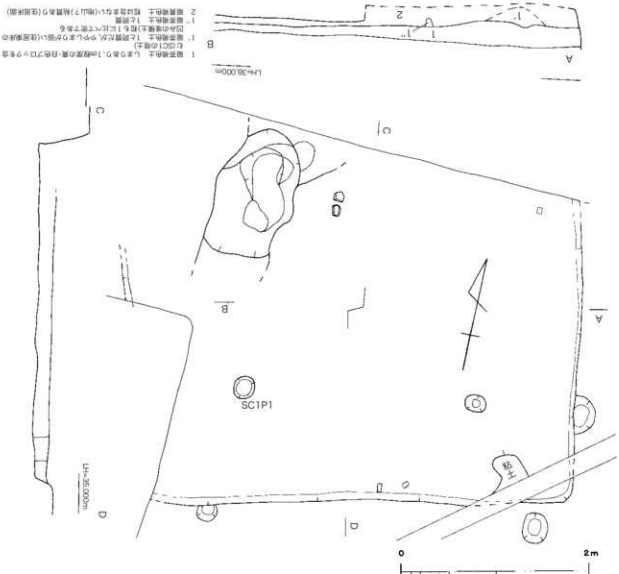


第42図　弓削田原Ｂ遺跡２次遺構配置図（S＝1/80）

出土遺物（第44図、表13、図版２）

土器

１～７はSC１出土、８・９は表採である。１～３は須恵器坏蓋で、１は復元口径15.8㎝、２・３は復元口径17.6㎝である。１～３とも口縁部内面に段を残し、２は内面にヘラ記号がみられる。４は須恵器坏身で、復元口径は16.8㎝で立ち上がり長は1.3㎝、先端を丸く収める。５はSC１検出時出土の土師器片である。６・７は砥石で、両者とも砂岩製で一部欠損している。６は略方形で両面に研磨痕があり、先端部にはいくつかの傷痕が残る。７は扇形で、片面のみ研磨痕が残る。８は須恵器口縁部片で、内面に一部自然釉が付着する。９は土師器甕である。口縁部はやや内湾気味に折れ曲がり、外面にはハケメの痕跡が部分的に残る。

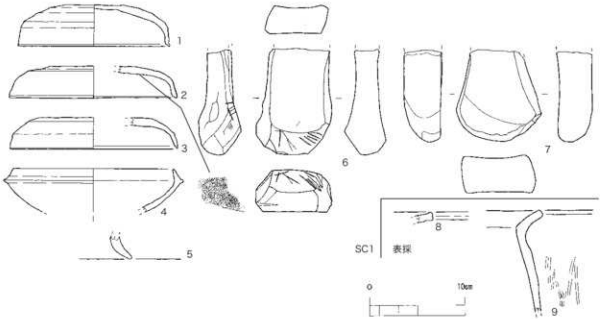


第43図　SC１実測図（S＝1/40）

第２節　上の原遺跡群３次の調査

(1)　発掘調査の経緯と概要（第45～50図、表13、図版２）

周知の埋蔵文化財包蔵地である上の原遺跡群での個人住宅建設にともない、確認調査を実施した結果、遺構を確認した。平成29年８月31日付け田教文第164号の９にて文化財保護法第93条第１項による届出を受理し、平成29年９月５日付け29教文第号の671にて県より発掘調査の指示があったため、工事施工者と協議の結果、遺構の保存に支障が生じる範囲について、田川市教育委員会埋蔵文化財取



第44図　出土遺物実測図（S＝1/4）

扱要綱により記録保存を目的とする発掘調査を田川市教育委員会が実施することとなった。調査区の面積は工事対象面積の102㎡で、調査期間は平成29年９月19日から10月６日まで実施した。

上の原遺跡群は、彦山川の支流である金辺川に北東で接する、標高約35～39mの上の原台地上に立地する。今回の３次調査地点は、平成元年度に発掘調査を実施した道路から西へ約150mに位置する。調査では、ピット・土坑（SK１～７）・溝が検出された他、方形及び円形プランの住居（SC１～４）が確認された。出土遺物は弥生土器がほとんどだが、方形プランの住居から土師器が出土しており、古墳時代の遺構も混在している。

(2)　遺構と遺物

住居跡

SC１・２（第46図、図版２）

調査区のほぼ中央付近で、SC１とSC２が重複して確認された。検出状況から、方形住居と思われるSC２を建て替えたものがSC１と考えられる。SC１は、東西幅5.8～5.6m、南北幅4.1～3.7mとやや東西に長い長方形プランの住居跡である。西辺には約0.16m高さのベッドが付属している。中央付近の0.7～0.6mのすり鉢状ピットは、焼土と炭化物が検出されたため、炉跡と考えられる。SC１からは土師器が出土しており、当該遺構の時期は古墳時代と考えられる。なお、SC１・２の北側には、隣接して方形プランと思われる住居跡（SC３）の南壁が確認されたが、大部分が調査区外であるため、詳細は不明である。

出土遺物（第47図、表13、図版２）

土器

１～３は、全てSC1出土の土師器である。１は壺で、胴部がやや球形となる。内外面にハケメの跡が残る。２は碗で、胴部から口縁部にかけては内湾気味である。内面にヨコ方向のミガキを施している。３は器台片だが、脚部の高さは２㎝と短脚である。

SC４（第48図）

SC４は調査区南側で確認された円形の住居跡である。調査では0.08～0.09mの北側立ち上がりのみ確認され、ほとんどが調査区外であるため全容は不明である。時期は弥生時代だが、後述するSK４・SK７以前の時期と考えられる。

出土遺物（第49図、表13）

土器

24は弥生土器壺と思われる口縁部片である。端部の幅1.8㎝が1.2㎝ほど肥厚している。

土坑跡

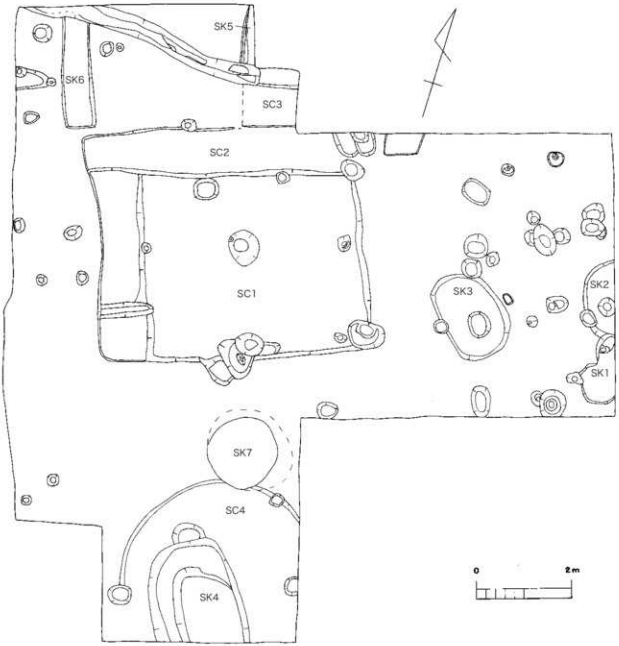
SK１・２（第48図、図版２）

調査区東端においてSK１がSK２を切る形で確認されたが、東側半分は調査区外であるため、全容は不明である。SK１は深さ0.1mほどだが、北側に深さ0.4mの掘り込みがみられる。中央部には弥生土器片が堆積するとともに、炭化物が検出された。SK２は深さ1.3mだが、SK１ほど遺物は出土しなかった。

出土遺物（第47図、表13、図版２）

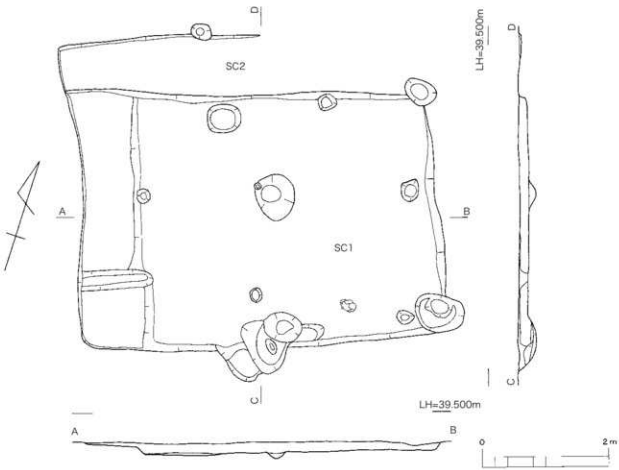
土器

４～７はSK１、８のみSK２出土で、全て弥生土器である。４は壺の底部で、0.3㎝程度の浅い凹

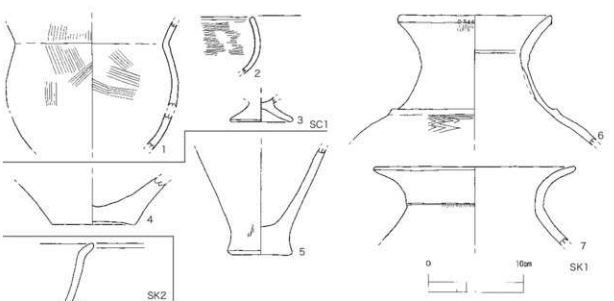


第45図　上の原遺跡群３次遺構配置図（S＝1/80）

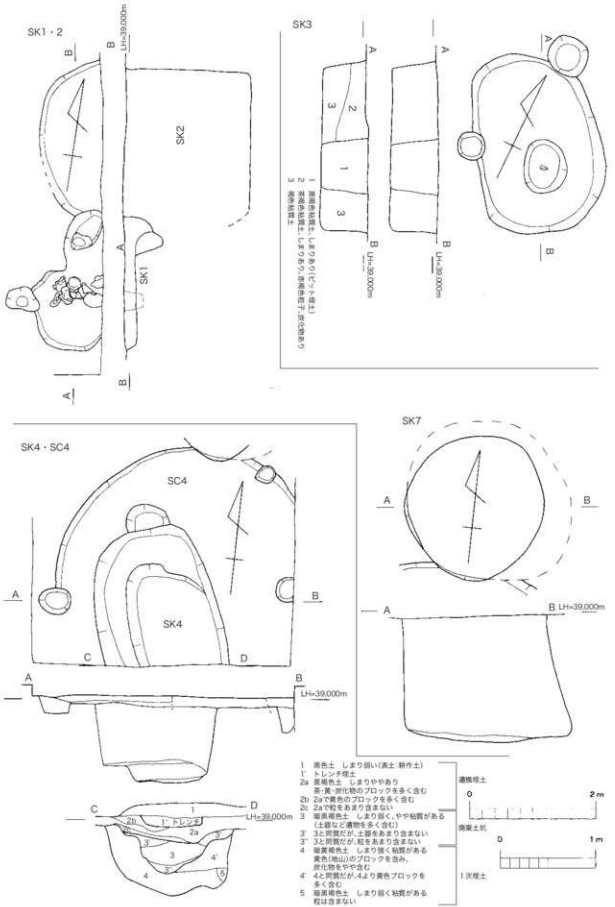
底である。5は甕の底部片で、外面にハケメの跡が一部残る。6は壺で、復元口径は16.0cmである。頸部は上方に向かって内傾しており、内面上方には1条の沈線、外面下部には三角形の突帯が1条巡り、その直下には羽状文が施されている。7も壺だが6に比べて頸部が短く、復元口径は21.0cmである。直立に近い頸部中程に段が1条めぐり、口縁部が外方へ大きく開く。8は甕口縁部片で、外面に若干ハケメの痕跡が残る。



第46図　SC 1・2実測図（S＝1/60）



第47図　SC 1、SK 1・2出土遺物実測図（S＝1/4）



第48図　SK１～４・７、SC４実測図（SK４・SC４はS＝1/60、その他はS＝1/40）

SK３（第48図）

調査区東側でSK１・SK２の西側で確認された。1.8×1.2mの楕円形で、深さ0.5mを測る。褐色粘質土の上に、厚さ0.17～0.36mの茶褐色粘質土が堆積していた。図示し得る遺物の出土はなかった。

SK４（第48図、図版２）

調査区南端で、SC４住居の廃絶後に作られた土坑で、廃棄土坑としての性格が考えられる。南側は調査区外であるため全容は不明だが、東西幅1.9mで南北に長い楕円形の土坑と想定される。SC４の床面から深さ１m付近にさらに幅1.3m、深さ0.26～0.34mの掘り込みがみられ、土層の堆積状況とあわせて、再度掘り返しを行ったと考えられる。出土遺物は多く、ほとんどが弥生土器片である。

出土遺物（第49図、表13、図版２）

土器

１～23は全て弥生土器である。１～14は甕で、１～７は口縁部である。１は逆Ｌ字状の口縁部で、外面に細かいハケメを残す。２も逆Ｌ字状の口縁部だが、胴部最大径が１に比べて上方にある。３も逆Ｌ字状の口縁部だが、内面側の口縁端部をややつまみ出している。外面は細かいハケメを施した後、頸部から５㎝ほど下に浅い沈線を１条巡らす。４は口縁部が逆Ｌ字の口縁がやや立ち上がっている。外面には縦位に細かいハケメを残す。５の口縁部はやや折れ曲がり、口縁部外面にはユビオサエの跡、胴部には縦位のハケメを残している。６と７の口縁部の形状はほぼ同じで端部が立ち上がっていくが、７の胴部は６に比べて内傾気味に底部へ続くと思われる。８～14は底部片である。８・９はほぼ同じ形状で、0.3㎝ほどの浅い凹底で、底部端部は外方へ広がっている。10もほぼ同じ形状だが、0.6㎝とやや深い凹底であり、外面のハケメが縦位に細かく残っている。11・12も同じく浅い凹底だが、８・９・10に比べて底部端部がそれほど外方へ広がらない。13は１㎝の明確なくぼみをもつ底部であり、底部につながる胴部の下部がそれほど広がらない細身の形状である。14は凹みのない平底であるため、壺底部の可能性もある。底部端部は広がらず、ほぼ直立している。15～23は壺で、15～17は口縁部である。15は口縁部内面を２㎝に肥厚させており、口唇部に丹塗の痕跡がある。16は頸部がやや外傾し口縁部も外方へ広がり、口縁部下方に2条の突帯を巡らしている。17の口縁部は外方へ大きく広がり、頸部が狭い形状である。内外面には横位のハケメの跡が残る。18は頸部で、口縁部側が外傾する。中程に2条のあまい沈線を巡らしている。19～23は底部片である。19は0.2㎝ほどの浅い凹底だが、その他は平底である。19・20は復元底径が6.0～6.2㎝でほぼ同じ形状だが、21は復元底径10㎝で胴部への立ち上がりが直線的に外方へ広がる、大型の壺と思われる。22は復元底径6.8㎝で、胴部への立ち上がりがやや丸みを帯びている。23は底部から胴部が残存しているが、胴部最大径が上方にあり、かつ、それほど広がらない形状と考えられる。

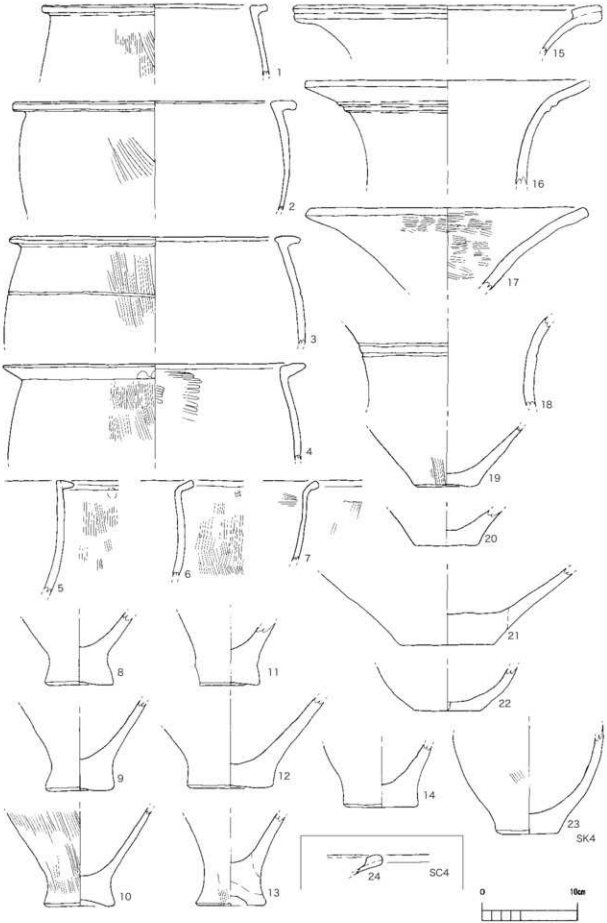
SK７（第48図、図版２）

調査区南側で、SC４の北側にSK７を確認した。遺構検出面では約1.5m径の円形プランで、深さ1.5mの床面は、約1.8m径と東寄りのフラスコ形である。貯蔵穴の形状であるが、出土遺物が弥生土器片である中、砥石や石戈の欠損品も含んでおり、廃棄土坑としての使用も想定される。

出土遺物（第50図、表13、図版２）

土器

１～16は全て弥生土器で、１～５は甕の口縁部である。１は復元口径27.2㎝で、口縁端部が下方にあまい段をもち、内面は横位にハケメを残す。２は復元口径33.2㎝、口縁部は内傾気味の逆Ｌ字状で端部内面に浅い凹みがある。３は復元口径31.2㎝で、口縁部はくの字にやや立ち上がり、口唇部に浅い凹みを巡らす。４は口縁から胴部まで続く。口縁部はくの字に立ち上がり、口唇部に浅い凹みがある。胴部には台形状の突帯を１条巡らす。５の口縁部はくの字に立ち上がり、外面には縦位のハケメを残す。６は甕の胴部で、三角形の突帯を１条巡らし、その下方に縦位のハケメを残している。７・８は壺の口縁部と思われる。７はやや外傾しながら直立する口縁である。８は外方へ湾曲気味の口縁



第49図　SK 4 ・SC 4 出土遺物実測図 (S＝1/4)

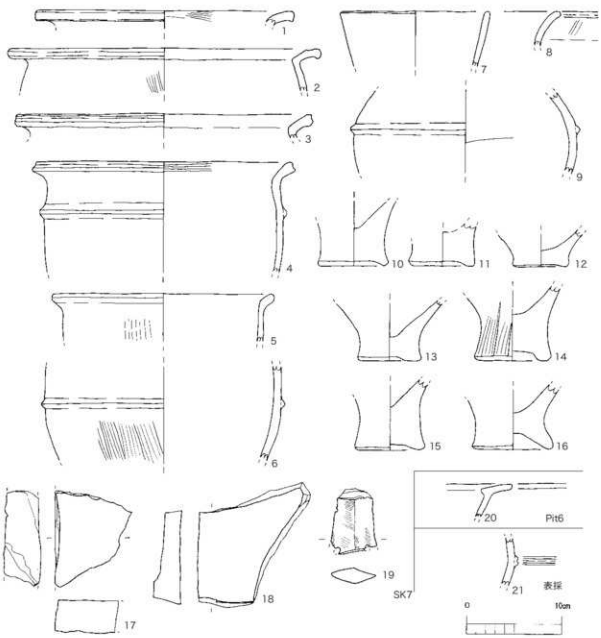
であり、内面に斜位のミガキの跡が残る。9は壺の胴部である。球形で中位に三角形の突帯を1条巡らしている。10～16は底部で、12は壺、その他は甕の底部と思われる。10は0.5㎝ほど凹んだ底部で、外面には縦位のハケメを残す。11も同様の浅い凹底である。12は胴部が開くことから、壺の底部と思われる。0.2㎝ほどの浅い凹底である。13は径3㎝、深さ0.5㎝の円形の凹みがある底部である。14は深さ1㎝の比較的深い凹みをもつ底部で、外面は縦位のハケメを残す。15も0.6㎝ほどの凹みがある底部である。16は底部中心が1.7㎝と深い凹みをもち、やや裾が広がる形状である。

石器

17～19は石製品である。17は砂岩製の砥石で、厚さ3.5㎝を測り、片面に研磨の痕跡が見られた。18も砂岩製の砥石で、厚さ2.9㎝を測り、片面に研磨の跡が残されていた。19は石戈であり、全体の形状は不明で、残存長6.7㎝、残存幅4.7㎝である。両面に鏑が表現された断面菱形であり、径0.5㎝ほどの孔が2つ穿たれていた。

その他の出土遺物（第50図、表13、図版2）

20はピットから出土した弥生土器の口縁部片である。口縁部は内面につまみ出されており、外面



第50図　SK 7・ピット・表採出土遺物実測図（S＝1/4）

には一部丹塗の痕跡がみられた。21は表採で、弥生土器の胴部片である。M字状の突帯を１条巡らせている。

第３節　猫迫１号墳２次の調査

(1)　発掘調査の経緯と概要（第51～56図、表13、図版２～４）

本古墳は、1999（平成11）年に国庫補助事業による範囲確認調査を実施した。その後、開発等の計画は無かったが、平成29年度に宅地造成の計画を受けて、所有者等と保存の協議を行った。計画は古墳周辺の地番も含まれていたため、平成29年９月26日付け田教文第148号の６による確認調査依頼を受け確認調査を実施した。その結果、遺構を確認したため土地所有者と協議の結果、周知の埋蔵文化財包蔵地を修正したうえで、範囲を拡幅した。また、市文化生涯学習課は現地保存を視野に入れた古墳の保存が可能か、県文化財保護課を通じ文化庁と協議を進めるとともに、市教育委員会で現地保存や石室の移築復元等の検討を重ねた。しかしながら、指定及び現地保存は適わなかった。再度、土地所有者等と協議した結果、造成計画に変更がなかったため、平成30年11月29日付け田教文第168号の11にて文化財保護法第93条第1項届出を受理し、平成30年12月17日付け30教文第１号の1233にて県より発掘調査の指示があった。これを受けて、田川市教育委員会埋蔵文化財取扱要綱に則った記録保存を目的とする発掘調査を実施した。発掘調査は、範囲確認調査で本古墳の主要な部分を記録保存していたため、①北・南トレンチを石室側壁まで設定と、新たに東トレンチを設定し、石室構築技法を把握する。②墳丘及び石室について、写真測量を用いて３次元による記録保存を実施する。③自然科学分析を実施する３点に絞って平成30年３月５日から３月28日まで実施した。

(2)　遺構

①　**墳丘**（第51～53図、図版２～４）

北トレンチは墳丘土の残存状況が良好ではなく、地山まで削平の影響を受ける。石室側石まで入れたトレンチから、墳丘土の残存が側壁部分に認められた。この墳丘土は、石室より約1.0mより離れた箇所より石室側へ斜位に掘削した掘方が認められる。深度は、現地表面より約1.0mを測る。掘削後、側石の石材と褐色土・橙色土と少量の小礫を相互に充填し、墳丘土と側壁を構築する。

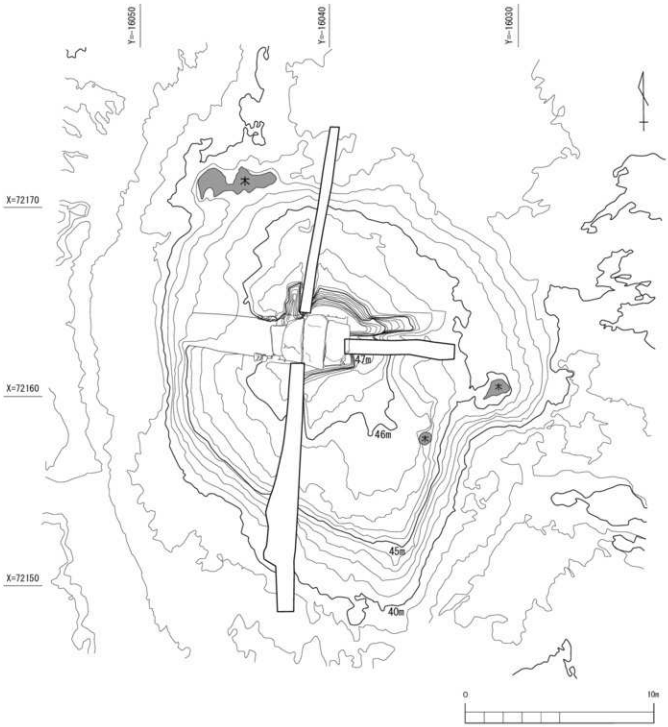
南トレンチは、範囲確認調査で墳丘土が確認されていた。土層観察の結果、黒色粘質土帯が認められ、これを整地後、褐色および黒色土を約0.5mの楕円形の土塊を互層に積むことを確認した。しかしながら、石室から４～５m離れると、土塊はみられなくなる。墳丘土は地山より0.3～0.4mの高さまで構築後、石室より約1.5m離れた箇所より、石室側へ斜位に掘削した掘方が認められる。深度は、現地表面より約1.0mを測る。側壁は褐色土・橙色土を充填し、墳丘土と側壁を構築する。

東トレンチは、玄門－奥壁の軸上より南側に設けた。土層観察の結果、墳丘土は地山を整地後、褐色粘質土で盛土する。また、南トレンチで確認した黒色粘質土が含まれる。墳丘土は奥壁より約４m まで残存するが、墳丘端部に従い削平の影響を受けて僅かに残存する。また、奥壁より約1.2m離れた箇所より、地山を石室側へ斜位に掘削した掘方が認められる。深度は、現地表面より約0.7mを測る。墓壙底部は凹状に段掘りし、根石を据え置き、その上に腰石を据える。奥壁の構築石材は、腰石より上部約0.6mは平らで長い片岩を積み、さらにその上部は、平らで小さな片岩や花崗岩を積む。

墳丘北側は削平の影響を甚大に受けており、左袖石付近も認められた。このため、左袖石の後世の盛土を除去したところ、北トレンチから続く掘方を確認した。墓壙は隅丸の角を呈する。また、石室から前庭部へ約0.9m離れて、石室に平行する掘方も確認した。

②　**玄室**（第54・55図、図版３）

床面の床面は盗掘の影響を受けていたが、堆積状況を把握するため床面を十字にⅣ分割し、Ⅱ・Ⅲを地山まで掘削を行った。石室床面の中央付近より奥壁側に赤色顔料が認められたが、中央より玄門側は認められない。赤色顔料の堆積は、0.1～0.2mを測る。また、Ⅲ・Ⅳより長軸1.5m×短軸1.1mの不定形の土坑を確認した。攪乱と捉えられ、１層より第56図16の須恵器片が出土した。



第51図　猫迫１号墳測量図（S＝1/200）

③　その他の遺構（第53図）

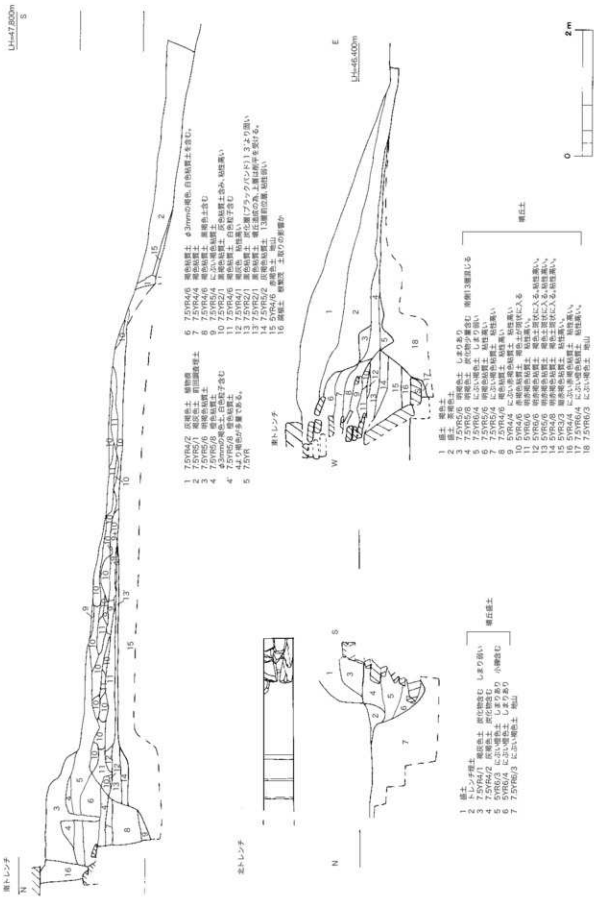
左袖石付近で、柱穴跡を19基確認した。径は0.3～0.5m、深度0.3～0.8mを測る。Ｐ１・２より弥生土器片が出土したものの、図示可能ではなかった。

(3)　出土遺物（第56図、表13、図版３）

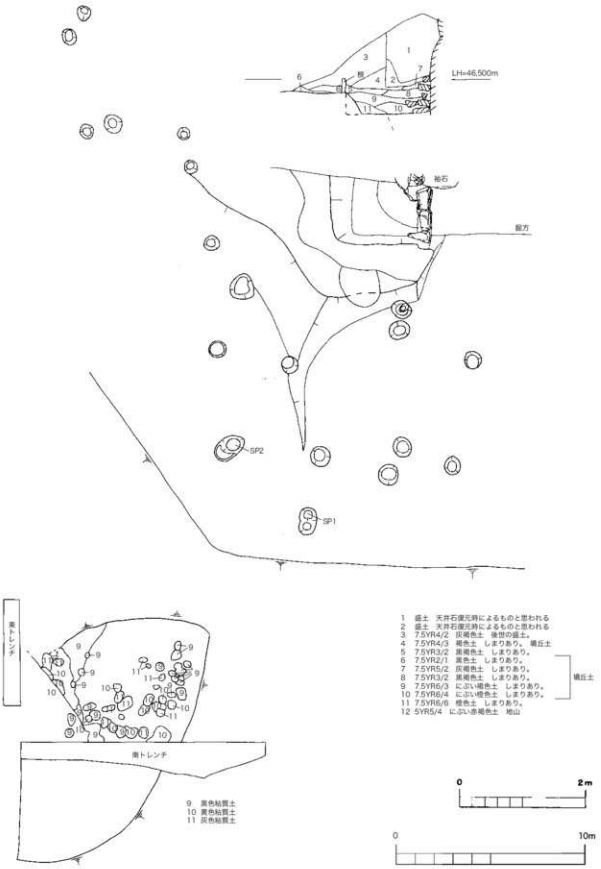
出土遺物の大半は、後世の墳丘土から出土したものである。

円筒埴輪

１は外面に斜位の沈線後、横位の沈線で区画される。２～８は台形の突帯を巡らす胴部で、８は円形の透かしが認められる。９・10は端部である。色調は４・９が赤色、それ以外は黄色を呈する。



第52図　南・北・東トレンチ平面図・土層図（S＝1/60）



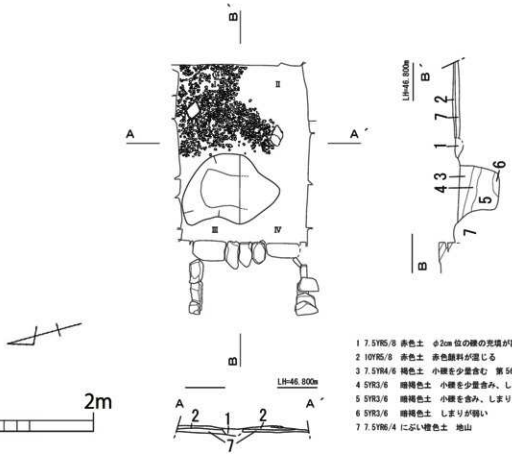
第53図 前庭部左側土層図・平面図（S＝1/60）、墳丘南側盛土平面図（S＝1/200）

閲覧用 3D データ
※通信料が発生することがあります

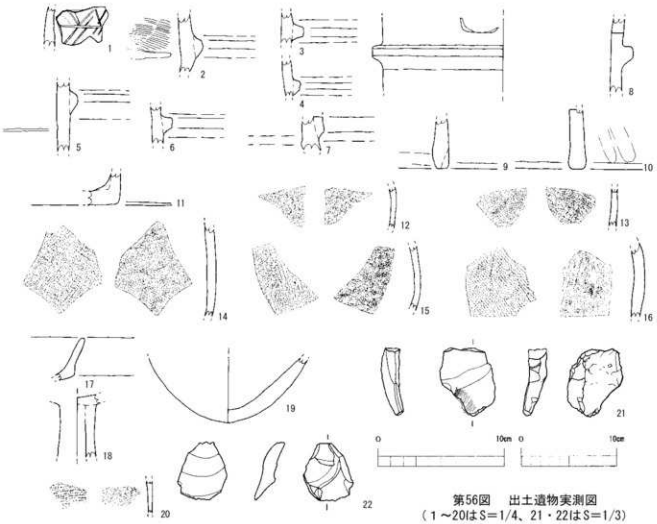
https://skfb.ly/6YNQo
墳丘と石室

https://skfb.ly/6YNUt
石室詳細

第54図　石室写真測量図（S＝1/60）



第55図 石室実測図（S＝1/60）



第56図 出土遺物実測図
（1～20はS＝1/4、21・22はS＝1/3）

形象埴輪
11は底部から胴部片で、屈曲し立ち上がる。
須恵器
12～16は胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円文当て具痕が認められる。
土師器
17は口縁部、18は高坏脚部である。19は甕底部である。
縄文土器
20は南トレンチから出土した。外面は条痕が認められる。
石器
21・22は、墳丘南側から出土した剥片である。石材は21がサヌカイト製、22がメノウ製である。

第４節　上の原遺跡群４次の調査

(1)　発掘調査の経緯と概要（第57～66図、表13、図版４～６）

周知の埋蔵文化財包蔵地である上の原遺跡群で、個人住宅建設に伴い令和元年５月27日付け田教文第289号にて確認調査依頼を受け確認調査を実施した。その結果、遺構を確認した。令和元年７月４日付け田教文第134号の３にて文化財保護法第93条第1項届出を受理し、令和元年７月８日付け１教文第350号の307にて県より発掘調査の指示があった。土地所有者と協議の結果、開発計画に変更がなかったため、遺構の保存に支障が生じる範囲を、田川市教育委員会埋蔵文化財取扱要綱に則った記録保存を目的とする発掘調査を実施した。

対象地は上の原遺跡群の中央付近に位置し、標高約38～39mの低丘陵に位置する。調査期間は令和元年７月17日から８月５日まで実施した。調査面積は、約113mである。調査区の関係上、排土処理を対象地内で反転する調査を実施した。確認できた遺構は、弥生時代の竪穴遺構１基、土壙墓１基、土坑跡３基、柱穴跡40基を確認した。

(2)　層序（第58図）

対象地は南位から北位へ下る地形を呈する。南と北の遺構検出面の比高差は約0.8㎝を測る。遺構検出面上面には、灰褐色粘質土の遺物包含層（Ｓ４）が確認された。

(3) 遺構と遺物

竪穴遺構

SC５（第58図、図版４）

調査区西側で検出した遺構で、壁溝を巡らし、角を確認したため方形の竪穴住居と捉えられる。深度は約0.3m、壁溝幅約0.8m、壁溝深度は0.03mを測る。床面は橙色粘質土の貼床が認められた。

出土遺物（第59図、表13）

土器

７は内底が逆「Ｕ」字形で、外底は低い上げ底を呈する。８はＰ１から出土した甕口縁部である。口縁部はナデにより内反りを呈し、頸部に断面が三角形の突帯を一条巡らす。

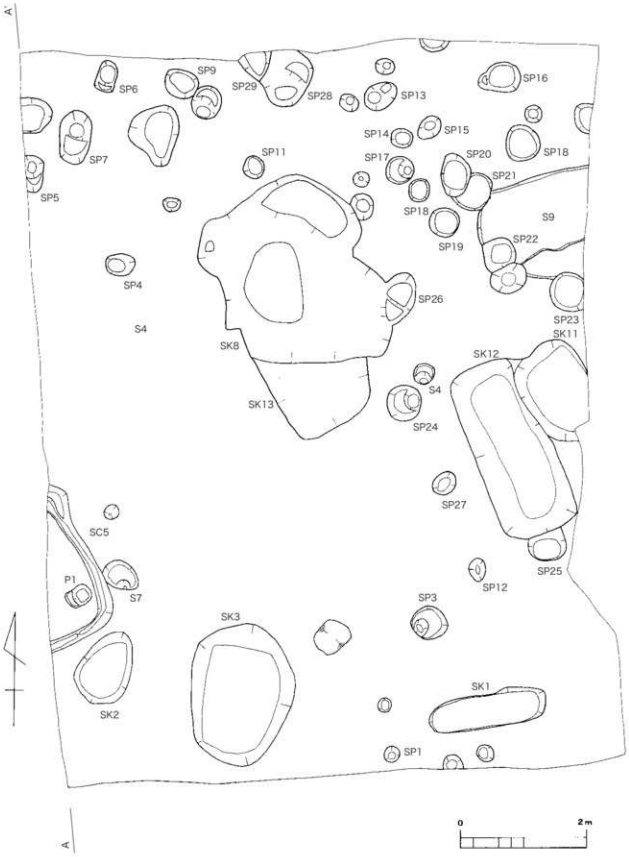
土壙墓

SK１（第58図、図版４）

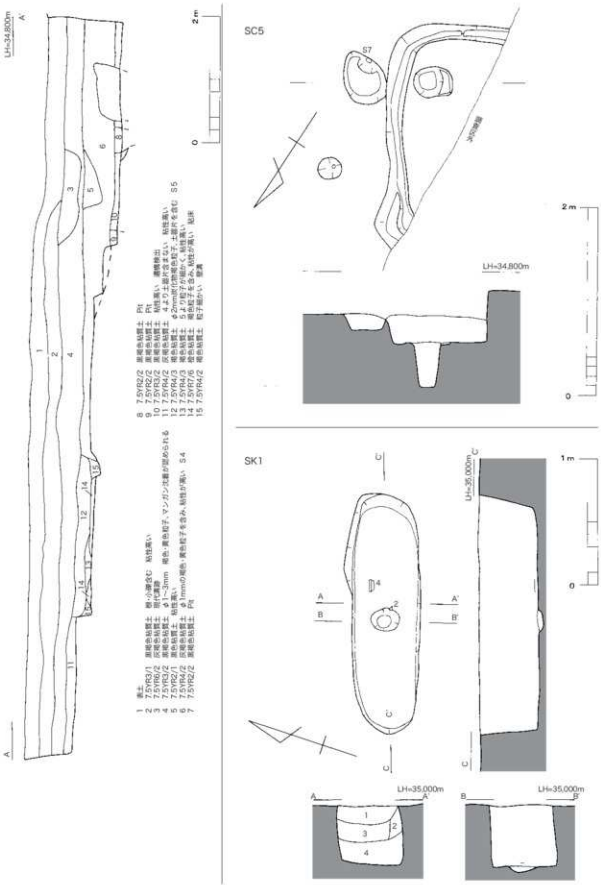
遺構の規模は上端が長軸1.90m、短軸0.52m、下端は長軸1.75m、短軸0.49mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.47mを測る。床面直上で石器２・４を、また４層で石器１・３を確認した。２は床面に対し水平に、４は床面に対し刃部を水平に、１は斜角で出土した。

出土遺物（第61図、表13、図版４）

土器



第57図　上の原遺跡群４次調査区平面図（S＝1/60）



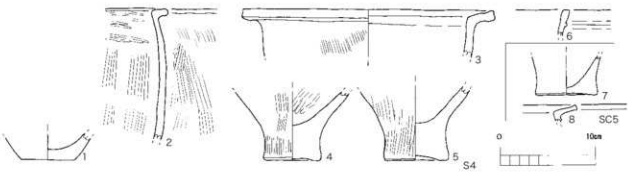
第58図　調査区西壁土層図（S＝1/60）、SC 5 、SK 1 実測図（S＝1/40、1/30）

4は1層から出土した甕底部である。外底は低い上げ底を呈する。

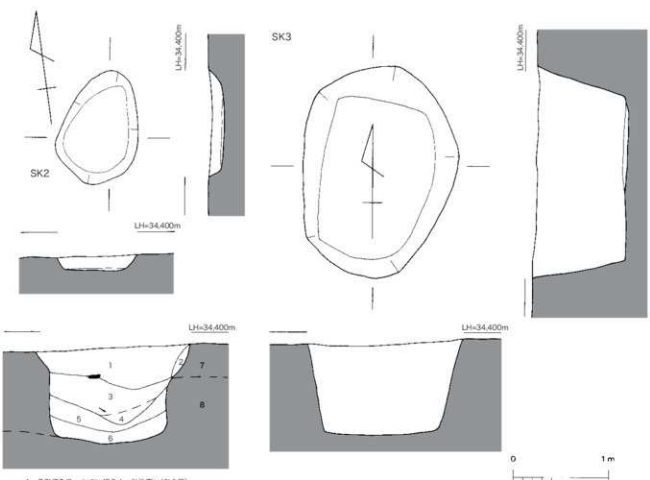
石器

1は凝灰岩製の石剣である。断面は菱形を呈し、刃部を一部欠損する。2は凝灰岩製の切先である。断面は菱形を呈する。3は砂岩製の石剣である。断面は菱形を呈する。4は凝灰岩製の刃部で、一部欠損が認められる。断面は菱形を呈する。1・3は床面に平行、3は掘削中に斜角に出土した。

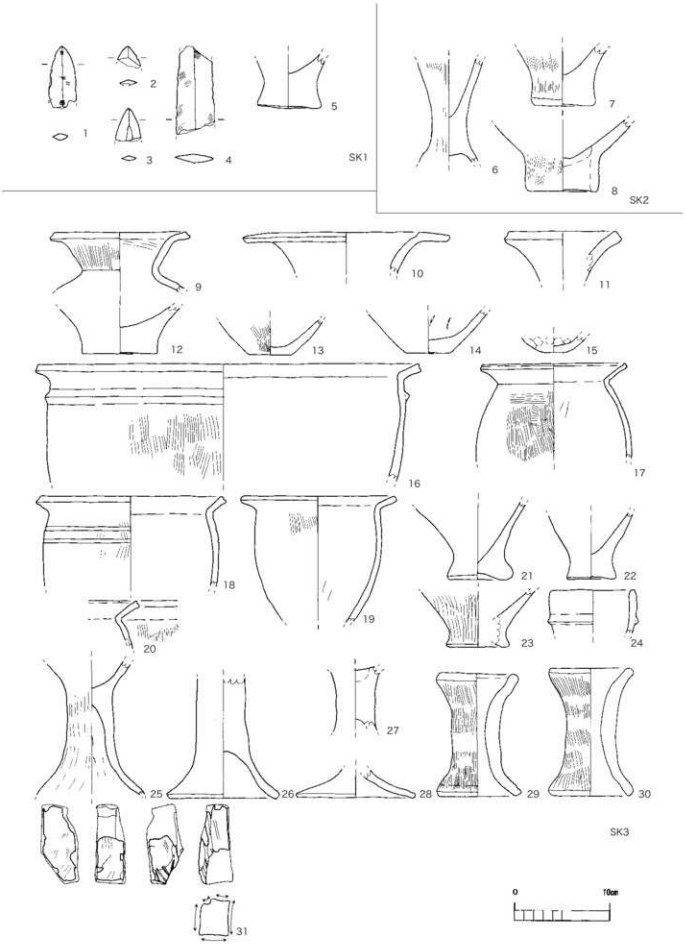
土坑跡



第59図　S4・SC5出土遺物実測図（S＝1/4）



第60図　SK2・3実測図（S＝1/40）



第61図　SK１～３出土遺物実測図（S＝1/4）

SK２（第60図、図版４）

遺構の規模は上端が1.22m×0.97m、下端は0.98m×0.68mの楕円形を呈する。断面は逆台形状を呈し、深度は0.14mを測る。

出土遺物（第61図、表13、図版４）

土器

６～８は甕底部である。６の底部は細く、脚付を呈する。７・８の外底は、低い上げ底を呈する。

SK３（第60図、図版５）

遺構の規模は上端が2.24m×1.69m、下端は1.64m×1.20mの隅丸長方形を呈する。断面は逆台形状を呈し、深度は0.94mを測る。

出土遺物（第61図、表13、図版５）

土器

９～15は壺である。９は口縁部から肩部まで残存し、口唇部は跳ね上げを呈する。10は口縁部が垂下する。12～15は底部である。12・14の外底は低い上げ底を呈し、12は肥厚である。13は平底を呈する。15は小形で、底部から体部が丸みをもって立ち上がる。16～23は甕である。16は口縁部から体部半ばまで残存する。口唇部はナデにより凹み、胴部上半に角形の突帯を一条巡らす。17は口縁部から胴部半ばまで残存する。口唇部は断面が三角形の跳ね上げを呈する。胴部は横位から縦位のハケが施される。18は口縁部から胴部半ばまで残存する。口唇部はナデにより凹み、胴部上半に二条の沈線が施される。19は口縁部から胴部下半まで残存する。口縁部内面はナデにより凹む。12は口縁部から胴部上半まで残存する。口唇部は断面が三角形の跳ね上げを呈する。21～23は底部で、外底は半円の上げ底を呈する。24は口縁部から体部半ばまで残存する鉢である。体部には断面が三角形の突帯を一条巡らす。25～28は高坏である。25は脚部内面を工具ナデが施され、26と同様に裾部が残存し、「ハ」字形を呈する。26・27は脚部が残存する。29・30は口縁部から底部まで残存する器台である。口縁部内面は、ナデにより内反りを呈する。胴部は肥厚で、裾部の開きは弱い。外面は縦位のハケが施される。

石器

31は砂岩製の砥石である。砥面は４面認められ、形状より運搬が可能と考えられる。

SK８・13（第62図、図版５）

調査区中央より北側で検出した土坑跡である。平面の形状から数基の土坑跡の存在を確認したものの、掴め切れてはいない。SK８の遺構の規模は上端が5.8m×5.3m、下端は1.3m×0.9mの形状を呈する。断面は逆台形状を呈し、深度は約1.6mを測る。SK13はSK８の南側に位置し、時期はSK13が古い。遺構の規模は上端が3.20m×2.15mを測る。SK13は新旧関係を把握できたものの、排土処理を反転した調査手法を採用したことと、調査期間の関係で人力掘削による完掘が行えなかった。

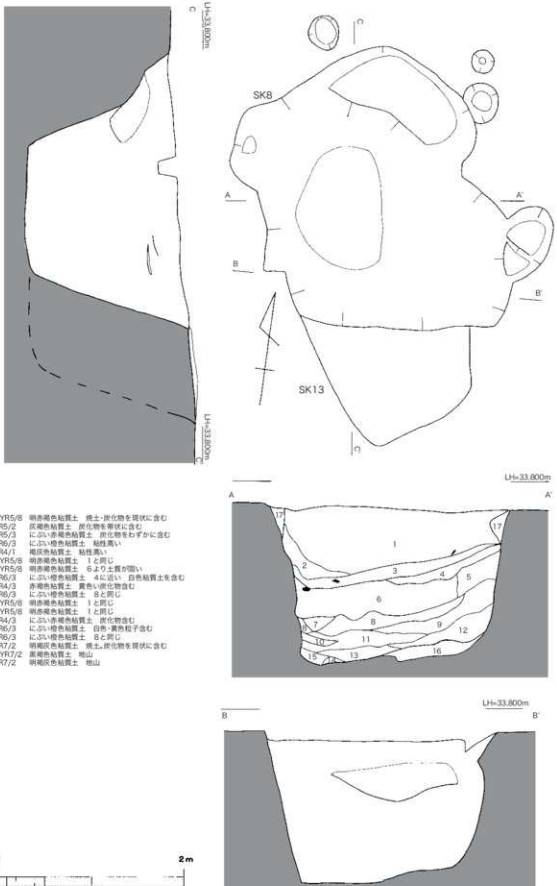
出土遺物（第63図、表13、図版５）

土器

１～３は壺口縁部である。１・２は口縁部が肥厚する。３は口唇部が凹む。４・５は壺底部で、外底は緩い上げ底を呈する。６～９は甕で、６は口縁部から胴部下半まで残存する。７は口縁部が肥厚する。８は口縁部に断面が三角の粘土帯を貼付け、巡らす。９は頸部外面に、指頭圧痕が明瞭に残る。10～18は甕底部である。外底は15が平底、それ以外は上げ底を呈する。上げ底は10・13・17が緩い。14の外底は明瞭な上げ底で、中央部を刳り貫き、ナデが施される。

SK10（第64図、図版５）

調査区東側で検出した土坑跡である。調査当初、SK10として土層観察を行う目的とした調査を始めたが、下層で２基分かれることが判明したので、SK11・12として調査を実施した。



第62図　SK 8・13実測図（S＝1/40）

出土遺物（第64図、表13、図版５）

土器

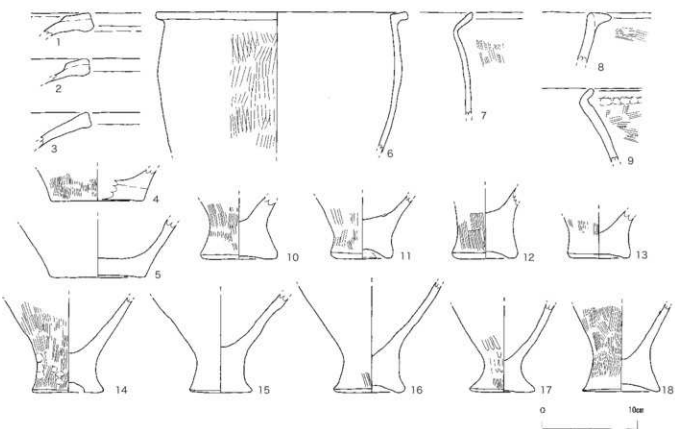
１から９は壺である。１は口縁部から肩部まで残存する。口縁部下に、断面が台形の突帯を一条巡らす。外面は縦位、内面は縦位後、横位のミガキが施される。２は広口壺の口縁部である。３は口縁部の開きが短い。４は胴部上半が残存し、断面が台形の突帯を二条巡らす。５～７は底部で、外底は５の断面が球状、６・８は平底、７は低い上げ底を呈する。９は頸部から底部まで残存する。胴部半ばは「く」字形、外底は平底を呈する。10～17・19は甕である。10・11は口縁部から胴部半ばまで残存する。12・13は口縁部が外方へ開き、胴部上半に断面が三角形の突帯を１条巡らす。14・19は胴部から口縁部が、内傾気味に直線的に立ち上がる。口縁部下には、断面が三角形の突帯を一条巡らす。19は外面の胴部下半で、器面剥離が認められる。15～17は底部である。外底は、15・17の断面は球状の上げ底、16は低い上げ底を呈する。18は鉢である。口縁部は外方への少し開き、体部から脚部まで直線的で、脚部裾で外方へ張り出す。外面は縦位のハケが施される。20・21は高坏脚部で、20は棒状、21は筒状を呈する。21は坏部と脚部境に、断面が三角形の突帯を一条巡らす。22は蓋と考えられる。

石器

23は片岩製の石庖丁で、刃部は両刃である。24は蛇紋岩製で、抉り込みより石錘と考えられる。一部、ススの付着が認められる。25は砂岩製の砥石である。砥面は１面認められる。

SK11（第65図、図版５）

遺構の規模は上端が長軸1.60m、短軸1.10mの長方形を呈し、下端は長軸1.20m、短軸0.92mを測る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深度は0.40mを測る。床面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土である。SK12と前後関係は土層断面の観察の結果、SK12が新しい。



第63図　SK８出土遺物実測図（S＝1/4）

出土遺物（第66図、表13、図版５）

土器

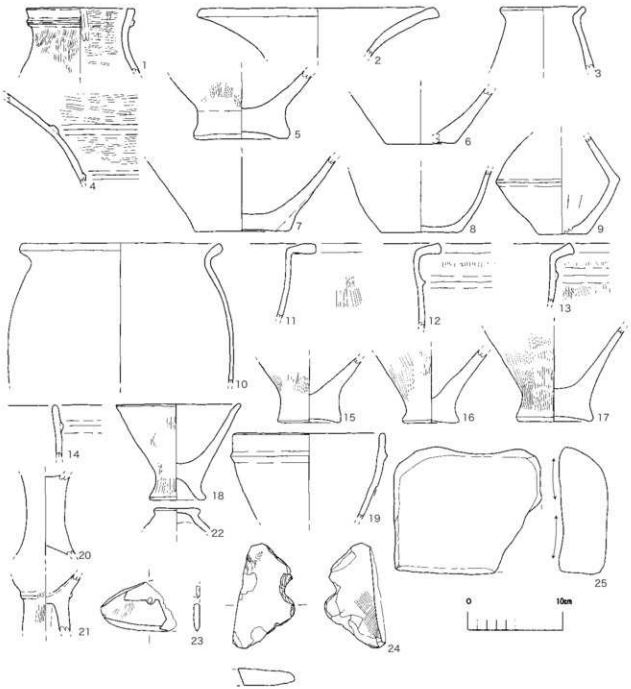
21・22は壺である。21は口縁部が残存する広口壺である。22は底部で、外底は中央が低い上げ底を呈する。23・24は甕である。３は口縁部から胴部上半し、口縁部は頸部から屈曲する。４は外底の断面が球状を呈する。

石器

25は赤紫色泥岩製の石剣である。刃部が残存する。

SK12（第65図、図版６）

遺構の規模は上端が長軸2.28m、短軸2.35mの長方形を呈し、下端は長軸1.20m、短軸0.77mを測



第64図　SK10出土遺物実測図（S＝1/4）

る。壁面は逆「ハ」字形で立ち上がり、深度は0.58mを測る。床面は平坦である。埋土は暗褐色・灰褐色粘質土を呈する。

出土遺物（第66図、表13、図版６）

土器

１は壺底部で、外底は平底を呈する。２～13は甕である。２は口縁部から胴部下半まで残存する。胴部から口縁部へ直線的に立ち上がり、口縁部下に断面が三角形の突帯を一条巡らす。３～７は口縁部から胴部上半まで残存する。６は胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。10～13は底部である。外底は10～12の断面が球状、13が低い上げ底を呈する。14は蓋と考えられる。天井部は凹み、天井端部はナデにより張り出す。15は器台である。外面は縦位のハケ施される。

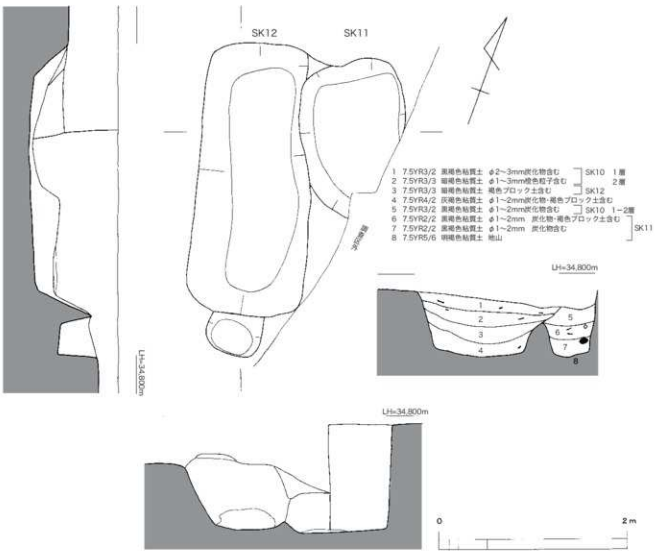
石器

16は赤紫色泥岩製の石庖丁で、刃部は片刃である。17は蛇紋岩製品で、断面が弧を描くことから石斧と考えられる。18は凝灰岩製の石剣である。断面は杏形を呈する。19は凝灰岩製の石鎌で、円形の穿孔が１箇所認められる。20は珪質岩製の砥石で砥面は２面認められ、一部敲打痕が認められる。

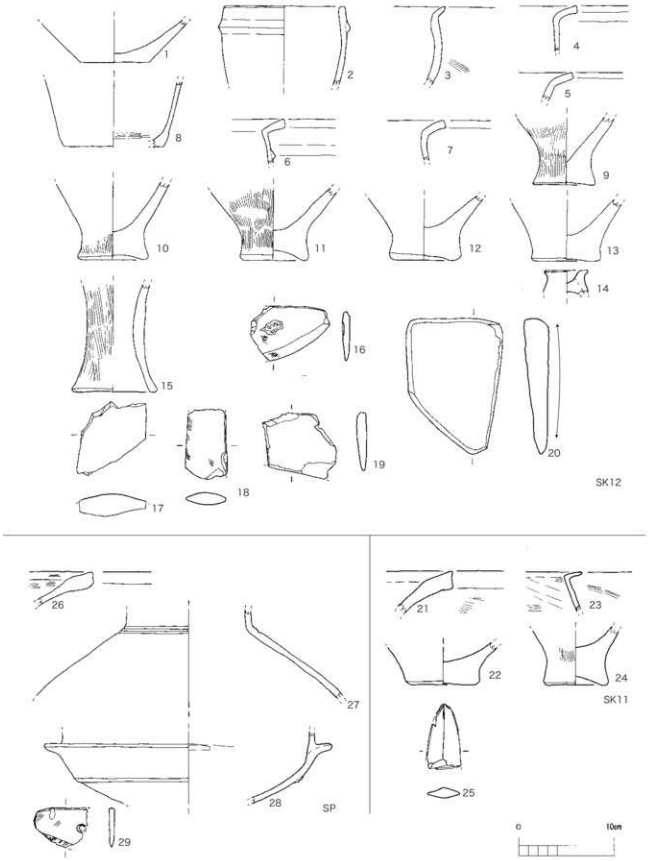
柱穴跡

土器（第66図、表13）

１はSP７出土の壺口縁部である。口縁部は肥厚する。２はSP12出土の壺で、頸部から胴部上半ま



第65図　SK11・12実測図（S＝1/40）



第66図　SK11・12、柱穴跡出土遺物実測図（S＝1/4）

で残存する。頸部に二条の沈線が巡る。３はSP25出土の器台で、胴部半ばから下半まで残存する。胴部下半に「M」字突帯を一条巡らす。

石器

５はSP27出土の石剣で、凝灰岩製である。刃部に欠損が認められ、断面は杏形を呈する。

遺物包含層（第58図）

調査区全域に展開する遺物包含層（Ｓ４）である。地形より南位→北位へ下る傾斜地し、約0.07～0.5ｍ堆積する。

出土遺物（第59図、表13）

土器

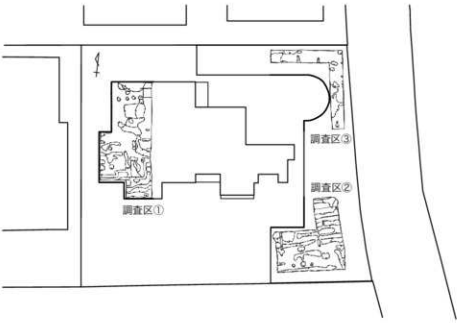
１は壺の底部で、平底を呈する。２～５は甕である。２・３は口縁部から胴部まで残存する。２の口縁部の断面は方形、３の口縁部はナデにより内反りを呈する。４・５は底部で、肥厚である。外底は４が低い上げ底、５は球状の上げ底を呈する。６は鉢の口縁部である。外面の体部には、断面が三角形の突帯を一条巡らす。

第５節　番町遺跡の調査

（1）　発掘調査の経緯と概要（第67～70図、表13、図版６）

周知の埋蔵文化財包蔵地である番町散布地内で、個人住宅建設に伴い令和元年９月20日付け田教文第289号の４にて確認調査依頼を受け確認調査を実施した。その結果、遺構を確認するとともに、遺跡名の変更と包蔵地の範囲の修正を行った。令和元年10月10日付け田教文第134号の９による文化財保護法第93条第１項届出を受理し、県より令和元年10月11日付け１教文第350号の755にて発掘調査の指示があった。土地所有者と協議の結果、遺構の保存に支障が生じる範囲を、田川市教育委員会埋蔵文化財取扱要綱に則った記録保存を目的とする発掘調査を実施した。発掘調査の期間は、令和元年10月30日から11月15日の間に実施した。

本遺跡は船尾山より北東へ枝状に派生する、標高約38ｍの低丘陵に立地する。調査区の面積は約785㎡である。協議の結果、現地保存が困難な面積約133㎡について記録保存を行った。確認できたのは弥生時代の性格不明遺構３基と時期不明の柱穴跡３基であるが、大半は昭和時代のブドウ畑の根跡であった。



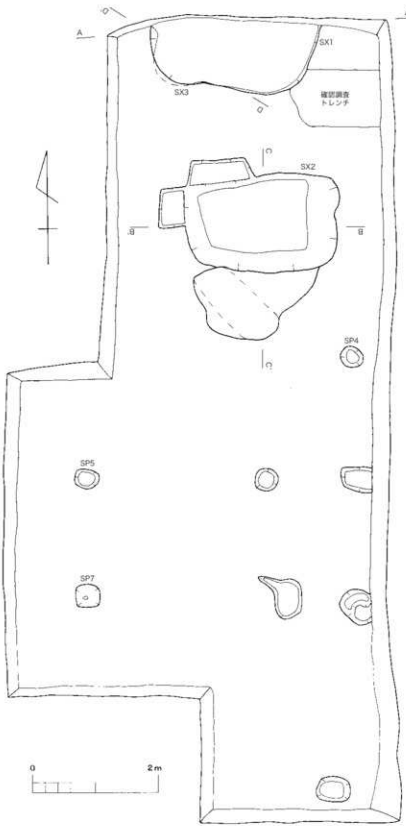
第67図　番町遺跡調査区平面図（S＝1/400）

(2) 遺構と遺物

性格不明遺構（第69・70図、図版６）

SX１（第69図、図版６）

調査区①の北側に位置し、北側は調査区外へ延びる。遺構の規模は上端が長軸2.70m、短軸1.18m、下端は長軸2.50m、短軸1.14mの隅丸長方形を呈する。深度は0.74mを測る。



第68図　調査区①平面図（S＝1/60）

SX２（第69図、図版６）

調査区①の北側に位置する。遺構の規模は上端が長軸2.80m、短軸1.80m、下端は長軸1.74m、短軸1.10mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.20mを測る。埋土は２層に分層が可能で、出土遺物は黒色粘質土の遺構の東側に集中していた

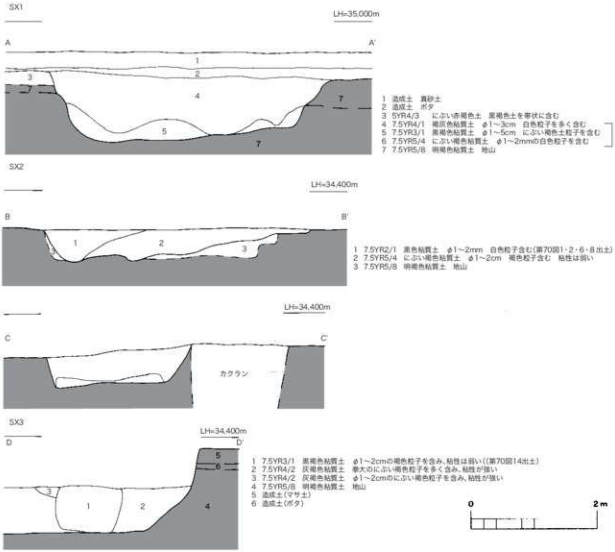
SX３（第69図、図版６）

SX１の南西側に位置し、SX１が新しい。遺構の規模は上端が0.65m、深度は0.49mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

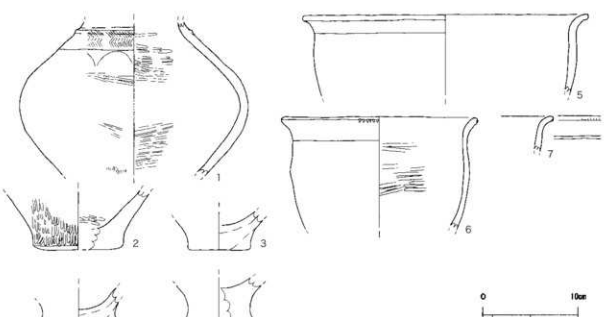
出土遺物

（第70図、表13、図版17）

SX１～３から出土した遺物を述べる。１は頸部から胴部下半まで残存する壺で、外面はミガキ後、頸部には断面が三角形の突帯を一条巡らす。頸部下は矢羽根をキザミ、一条の浅い沈線、半円を描く。内面は頸部から胴部上半は横位、胴部下半が斜位のミガキが施される。２～４は壺底部である。外底は平底を呈する。５は口縁部から胴部半ばまで残存する甕で、頸部下に一条の沈線を巡らす。６は口縁部から胴部半ばまで残存し、頸部下に１条の沈線を巡らす。口唇部にキザミが施される。７は頸部下に二条の沈線を巡らす。８は甕底部で、外底は平底を呈する。



第69図　SX１～３土層図・断面見通図 (S＝1/60)



第70図　SX１～３出土遺物実測図 (S＝1/4)

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　猫迫１号墳自然科学分析

株式会社　古環境研究所

(1)　自然科学分析の概要

猫迫１号墳は、田川市伊田の彦山川右岸の丘陵上に立地する。発掘調査において、古墳築造前の堆積土に黒色粘質土（ブラックバンド）が確認された。そこで、当時の調査地および周辺の植生や環境を推定する目的で、花粉分析と植物珪酸体分析を実施することになった。

分析試料は、南トレンチ13層より調査担当者により採取された堆積物試料１点である。試料の層相は、10YR 2/2 黒褐色腐植質粘土質シルトからなる土壌である。粒団構造が発達し、土壌層位Ａ層に相当するとみられる。

(2)　花粉分析（表1、分析図版1）

①　方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行う。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行う。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入する。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に産出する全ての種類について同定・計数する。結果は同定・計数結果の一覧表として示す。なお、複数の種類（分類群）をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものである。

②　結果

花粉分析結果を第１表、産出した花粉化石とプレパラート状況写真を図版１に示す。花粉化石は著しく少なく、わずかに産出する花粉化石は保存状態が著しく悪い。図版に示したように産出花粉の花粉外膜は溶解・破損しており、種類同定が困難なものが主体をなす。

表１　花粉分析結果

種類（分類群）	Taxon	13層
木本花粉	Arboreal pollen	
コナラ亜属近似種	cf. *Lepidobalanus*	1
草本花粉	NonArboreal pollen	
イネ科	Gramineae	3
ヨモギ属近似種	cf. *Artemisia*	1
不明花粉	Unknown	
同定不能花粉	Unknown	8

③　考察

花粉化石は、風化作用が進行するような場所では、物理・化学・生物的な要因により分解消失することが知られている（中村，1967など）。花粉・胞子の風化作用に対する抵抗力は、花粉・胞子中の外壁中に含まれているスポロポレニンの量にほぼ一致するとされる（Havinga、1964）。そのため、花粉に比較して、スポロポレニンの量が多いとされるシダ類胞子や外膜が厚い針葉樹花粉は風化作用の影響を受けても化石として残りやすい（Brooks ＆ Shaw, 1971、Stanley&Linskens, 1974；徳永・山内、1971など）。

今回調査を行った南トレンチ13層では、形態が特徴的で風化が進行しても同定可能なイネ科と種類同定困難な保存状態が悪い花粉化石が僅かに産出するのみであった。13層は土壌生成が進行した堆積物からなり、堆積物に取り込まれた花粉化石は堆積時・後に風化作用の影響を受け分解消失していることが推定される。土壌の花粉分析結果は、しばしば今回のような産状を示し、植生復元を困難にしているが、湖・池沼・湿地の堆積物に比較して、花粉の供給原から堆積物に取り込まれるまでの過程が単純で距離が短い場合が多く、調査地点近辺に生育している局地的な植生復元において有効な場合もある（三浦、1990、三宅・中越、1998など）。今回の場合、植生の全貌は不明であるが、僅かに確認された種類が調査地点の植生を構成する要素であった可能性がある。当該期の古植生について

は、古墳が位置する丘陵の開析谷など還元状態の堆積物が累重している地点で古植物学的調査を行うことで明らかにされるものと思われる。

(3) 植物珪酸体（プラント・オパール）分析（表２、分析図版２・３）

① 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）により脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により土壌を分散
5）沈底法により20μm以下の微粒子を除去
6）乾燥後、封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

検鏡は、400倍の偏光顕微鏡下で行う。同定は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象とする。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行う。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料1g中の植物珪酸体個数は、試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率を乗じて算出する。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。

② 結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表２および分析図版２に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を分析図版３に示す。

〔イネ科〕
ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族型（ウシクサ属、チガヤ属など）
〔イネ科－タケ亜科〕
ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他タケ亜科
〔イネ科－その他〕
未分類等
〔木本起源〕
クスノキ科

表２ 植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	南トレンチ 13層
イネ科	Gramineae	
ススキ属型	*Miscanthus type*	53
ウシクサ族型	*Andropogoneaesc* type	24
タケ亜科	Bambusoideae	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	208
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Nipponoca lamus*	130
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	59
その他	Others	59
その他のイネ科	Others	
未分類等	Unknown	113
木本（海綿骨針）クスノキ科	Arboreal Lauraceae	18
植物珪酸体総数	Total	664

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

ススキ属型	*Miscanthus type*	0.66
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	1.00
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Nipponoca lamus*	1.51
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.18

(4) 考察

植物珪酸体の検出量（表２の上部）をみると、タケ亜科が優占しており、特にネザサ節型が非常に高い密度である。次いでメダケ節型、ミヤコザサ節型が高い密度である。他にはススキ属型も高い密度であり、ウシクサ族型と木本のクスノキ科が少量認められる。属・節レベルでの植物珪酸体組成を推定生産量に換算（表２の下部）してみると、メダケ節型が優勢であり、続いてネザサ節型、ススキ属型が多い。こうしたことから、13層堆積時の調査地付近は乾燥した堆積環境が示唆される。調査地ではササ類が群落を形成し、ススキ等も生育していたと推定される。特にメダケ節型の卓越から竹藪のような状態が想定される。また、周辺にはクスノキ科などの樹木もみられたと思われる。

花粉分析の結果によると、花粉化石は堆積時・後に風化作用の影響を受けて分解消失したことが推定されている。風化作用は、乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境下で進行することから、花粉分析と植物珪酸体分析の結果は概ね整合的である。

(5) まとめ

猫迫1号墳の南トレンチ13層で確認された黒色粘質土（ブラックバンド）について花粉分析と植物珪酸体分析を実施し、当時の調査地および周辺の植生や環境を検討した。その結果、花粉化石は風化作用をうけ分解消失していたが、植物珪酸体はタケ亜科が多産し、ススキ属型が多いことなどから、乾燥した堆積環境が示唆された。調査地はササ類が群落を形成し、ススキなどが生育しており、竹藪のような状態が想定された。また、周辺にはクスノキ科などの樹木も生育していたと推定された。

参考文献

(花粉分析)

Brooks, J.&Shaw, G.（1971）Recent developments in the chemistry, biochemistoru, geochemistry and post-tetrad ontogeny of sporopolleninns derived from pollen and spore exines. "Pollen:Development and Physiology"

Habinga, A.J.（1964）Investigation into the differential corrosion susceptibility of pollen and spores. Pollen et Spores, 6：621-635.

国土地理院（2010）治水地形分類図「新津」(http://www1.gsi.go.jp/geowww/lcm fc/images/84/84402_03_b.png)

三浦　修（1990）森林土壌の花粉分析－方法論的問題と森林群落の動態研究への適用．植生史研究，5, 3-18.

三宅　尚・中越信和（1998）森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6, 1, 15-30.

中村　純（1967）花粉分析.古今書院，232p.

Stanley Robert&Linskens Hans（1974）Pollen:biology, biochemistry, management, Springer-Verlag Berlin Heidelberg New York, 307p.

徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.

(植物珪酸体分析)

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17, p.73-85.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19, p.69-84.

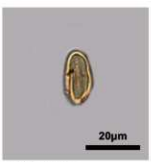
分析図版

コナラ亜属近似種

イネ科

ヨモギ属近似種

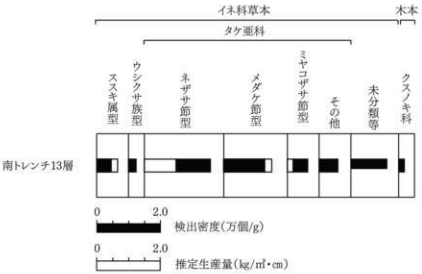
同定不能花粉



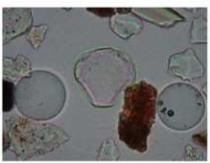
同定不能花粉

プレパラート状況写真

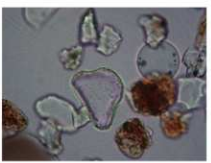
分析図版1　花粉化石・プレパラート状況写真



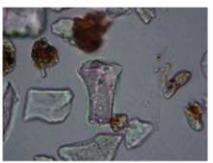
分析図版２　植物珪酸体（プラント・オパール分析）のダイヤグラム



ススキ属型

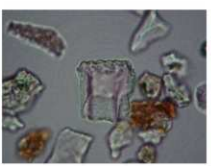


ススキ属型

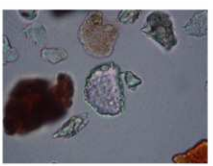


ウシクサ族型

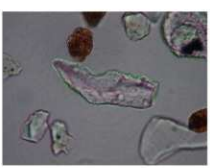
ネザサ節型



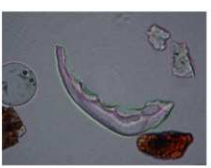
メダケ節型



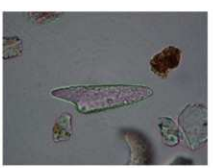
ミヤコザサ節型



クスノキ科



クスノキ科



表皮毛起源

50μm

分析図版３　植物珪酸体（プラント・オパール）

第２節　猫迫１号墳及び周辺遺跡から出土した赤色顔料について

九州国立博物館　志賀　智史

(1)　はじめに

福岡県田川市伊田にある猫迫１号墳及び周辺遺跡から出土した赤色顔料について分析調査を行った。

考古学では、赤色は祭祀や儀礼と密接に関わる色と考えられている。この赤色は、赤色鉱物の粉末によるもので、考古資料としては赤色顔料と呼ばれる。古墳時代以前の赤色顔料は、これまでの調査によって水銀を主成分とする朱（化学組成はHgS，鉱物名称は辰砂（Cinnabar））と、赤色の酸化鉄を主成分とするベンガラ（化学組成はα-Fe_2O_3，鉱物名は赤鉄鉱（Hematite）等）の二種類が知られている。

(2)　調査資料

調査資料は、猫迫１号古墳の他、桐ヶ丘遺跡箱式石棺、経塚３号古墳第１主体部、セスドノ古墳の弥生時代終末期～古墳時代中期の墳墓５基から出土した計74点の赤色物である。埋葬主体部の石室石材、白色粘土、覆土、人骨、埴輪等に認められるものを分析資料とした。調査資料一覧を表３に示す。

(3)　調査方法

赤色顔料か否かは、実体顕微鏡観察、生物顕微鏡観察および蛍光Ｘ線分析の結果から判断した。より詳細な調査として、Ｘ線回折とラマン分光分析を行った。

①　顕微鏡観察

顕微鏡観察は赤色物の有無、付着状況、二種類の赤色顔料や遺跡土壌の混在状況、粒子形態、有機物の有無等を知るために行った。調査前に資料を自然乾燥させた。

実体顕微鏡（７-100倍）では、白色光に近い光で資料を直接観察した。赤色顔料が塊状に遺存する場合、朱はショッキングピンク色～オレンジ色に、ベンガラは暗赤色等に見える。

生物顕微鏡（50-1000倍）では、サンプリングして合成樹脂オイキットを用いてプレパラートに封入した資料を、側射光及び透過光を用いて観察した。側射光では朱はルビー色の樹脂状光沢を持つ透き通った粒子に、ベンガラは暗赤色等の微粒子で、直径約１㎛のパイプ状、螺旋状、不定形等の粒子が観察される。

②　蛍光Ｘ線分析（XRF）

主成分元素を知るために行った。朱はHg（水銀）が、ベンガラはFe（鉄）が検出される。測定は、資料調整を行わずに行ったため、土壌や土器に含まれるFeも検出されている可能性がある。測定には、据置型のHORIBA XGT-5200（Rh，50kv，100s，SDD，測定径約100㎛，検出器付近真空，検出元素Na-U）を用いた。

③　Ｘ線回折（XRD）・ラマン分光分析

Ｘ線回折では結晶構造を、ラマン分光では分子構造を知るために行った。朱は辰砂（Cinnabar，HgS）が、ベンガラは赤鉄鉱（Hematite，α-Fe_2O_3）他が同定される。測定は、Ｘ線回折では資料調整を行わずに行ったため、土壌や土器に含まれる鉱物も検出されている可能性がある。ラマン分光では、生物顕微鏡観察用にプレパラートに封入した資料を測定した。Ｘ線回折はRIGAKU RINT Ultima Ⅲ（Cu，40kV，40mA，平行法）、ラマン分光はBruker Optics社SENTERRA（785nm，１mW，５s，測定径２㎛，測定波数70-1500cm^{-1}、波数分解能３-５cm^{-1}）を用いた。

(4)　調査結果のまとめと考察

調査結果を表３に示す。特徴的な写真とスペクトルを第１～４図（第１図は、冊子版はモノクロ、電子版はカラー）に示す。

①　赤色顔料の種類

分析資料全74点の赤色物は、実体顕微鏡観察で土壌や土器器面よりも明確に赤く、明らかに赤色

顔料と判断できるものであった。

赤色顔料の種類としては、資料１（桐ヶ丘遺跡箱式石棺）、資料２（位登古墳）、資料３（経塚３号墳第１主体部）、資料４～73（猫迫１号古墳）で朱とベンガラが検出された。資料74（セスドノ古墳）では、ベンガラのみが検出された。

量的には、ほとんどがベンガラで、朱は微量であった。特に桐ヶ丘遺跡では、実体顕微鏡観察で朱の凝集塊を発見できず、蛍光Ｘ線分析でも水銀は検出できなかったが、生物顕微鏡観察でプレパラートの１枚にベンガラに混じって１粒の朱粒子を認めた。この粒子のラマン分光から、朱の構成鉱物である辰砂に特有のスペクトルを得た（第４図）。

朱は産地が限られており、ベンガラに比べ入手が困難な赤色顔料である。国内の著名な産地は、北海道、三重、奈良、徳島等にあるものの、粒子形態や元素鉱物組成による細分が難しい。近年、硫黄同位体分析により朱の産地同定が試みられており、日本列島においては国産朱の採用を基本としながら弥生時代～古墳時代の北部九州や日本海側においては中国産朱が採用されていることが明らかになりつつある（南ほか2013、志賀2017など）。今回は、時間の関係でこの調査は行っていない。

ベンガラについては後述する。

一部資料のＸ線回折やラマン分光分析では、朱からは辰砂を、ベンガラから赤鉄鉱を同定している（第３・４図）。

②　ベンガラの細分

今回検出したベンガラについては、ベンガラ粒子の形態からベンガラ（P）とベンガラ（不定形）の２種類に分類した。

ベンガラ（P）は、直径約１㎛のパイプ状粒子を含むものである。パイプ状粒子は湖沼等に棲む鉄細菌*Leptothrix*に由来するものと考えられており（岡田1997）、湖沼等からこれらを含む黄褐色の沈殿物を採取、焼成、赤化したものがベンガラとして使用されたと想定される。日本列島ではこのベンガラ（P）の採用が特徴的で、縄文時代草創期から認められる。今回は、資料２のみで認められた。

一方、ベンガラ（不定形）は、特徴的な元素を含まず、不定形粒子だけで構成されるものである。直径数ミリの完全に粉になっていないベンガラ小塊が含まれることが多く、その小塊は暗赤色を中心に、紫色、赤黒色、橙色など多様な赤色系統色を呈する。このベンガラ（不定形）は、鉱山から採掘された鉄鉱石（褐鉄鉱、赤鉄鉱、磁赤鉄鉱、磁鉄鉱等）が原料となったと推定され、これをそのままもしくは焼成して赤化したものが使用されたと想定される。日本列島では、ベンガラ（P）の採用が特徴的であるものの、時期や地域によってはベンガラ（不定形）が採用されることがある。今回は、全ての資料でベンガラ（不定形）が認められた。

資料１～３では、ベンガラ（不定形）の中に直径数十㎛もの巨大なパイプ状のベンガラ粒子が含まれていた（第１図１・２・４）。この粒子は一般的なベンガラ（P）に含まれるパイプ状粒子よりも10倍以上大きい。大形でベンガラ小塊の中に偏在していることから、実体顕微鏡観察でベンガラ小塊を見逃すと発見が困難である。同様なベンガラは九州北部の遺跡のみで見つかっており（志賀2006, 2007, 2010, 2016）、特に阿蘇の褐鉄鉱原産地上に営まれている宮山遺跡では、このベンガラが焼成途中の状態で出土している（志賀2014）。

これまでの調査により、九州北部はベンガラ（不定形）を顕著に使用する地域と考えていたが、田川市内では調査を行っておらず、その状況は不明であった。今回の調査により、弥生時代終末期～古墳時代中期の当地においても、九州北部と同様な状況であることが明らかとなった。

③　赤色顔料の遺存状態と使用状況

弥生時代後期～古墳時代の墳墓出土赤色顔料は、遺骸頭胸部に朱、埋葬施設にベンガラを塗布散布するというように、朱とベンガラが使い分けられることが一般的と言われている（本田1988・1995）。今回の調査でも、そのことが追認された。

資料１（桐ヶ丘遺跡箱式石棺）：弥生時代終末期。発掘調査により石棺内に赤色顔料が塗布されていたことが明らかになっている（上野1988）。床面土壌一括資料を分析した。分析資料にはベンガラ

に混じって極々微量の朱が認められたため、朱とベンガラが使い分けられていたものと考えられる。ベンガラの種類は、ベンガラ（不定形）であり、直径３㎜前後のベンガラ小塊が認められた。その中には直径30μm前後の巨大なパイプ状粒子を含むものがあった（第１図１）。

資料２（位登古墳）：古墳時代前期。発掘調査により、人骨が赤色顔料に埋まって出土したと言われ（青木1934）、平成13年度の主体部の発掘調査では、赤色顔料が塗布された箱式石棺が出土している（福本編2002）。石棺の目張り用と推定される白色粘土や人骨片に付着しているものを分析した。白色粘土からはベンガラを主体、人骨片からは朱を主体に検出されており、朱とベンガラが使い分けられていたものと考えられる。ベンガラの種類は、ベンガラ（不定形）であり、直径３㎜前後のベンガラ小塊が認められた。その中には直径25μm前後の巨大なパイプ状粒子を含むものがあった（第１図２）。また、非常に微量であるもののベンガラ（P）も部分的に認められた（第１図３右）。

本遺跡と同様に１遺構で、朱、ベンガラ（P）、ベンガラ（不定形）の３種類を使用したと考えられる例は極めて少ないものの、類例は、福岡県小郡市の津古永前遺跡第３主体部（坂井・山崎編2013）で知られている。弥生時代終末期の甕棺墓の甕棺内面にベンガラ（不定形）が面的に付着し、棺内からは朱とベンガラ（P）が混在して検出されており、甕棺内にベンガラ（不定形）を塗布し、遺骸に朱とベンガラ（P）を混ぜたものが散布されていたと考えた（志賀2013）。津古永前遺跡の例は、甕棺という腐朽しない棺に赤色顔料が塗布されており、また主体部内の赤色顔料が土壌と共に取り上げられていたことにより、二種類のベンガラが分離できた幸運な事例であった。今後、墳墓を注意深く調査していくとこのような使い分けの事例は増えていく可能性はある。

資料３（経塚３号墳第１主体部）：古墳時代前期後半。発掘調査により、木棺と思われる部分全面から赤色顔料が出土している（田代編1999）。棺内土壌一括資料の中に含まれているものを分析した。分析資料にはベンガラに混じって少量の朱が検出されたため、朱とベンガラが使い分けられていたものと考えられる。ベンガラの種類は、ベンガラ（不定形）であり、直径３㎜前後のベンガラ小塊が認められた。その中には直径30μm前後の巨大なパイプ状粒子を含むものがあった（第１図４）。

資料４～73（猫迫１号墳）：古墳時代中期前半。発掘調査により、横穴式石室内面全面と墳輪外面に赤色顔料が塗布されていることが判明している（福本編2004）。石室は発掘現場で、墳輪は資料館でそれぞれ筆者が直接採取した資料を分析した。既報告の通り赤色顔料は、横穴式石室の内面全面および墳輪の外面に認められた。石室内では、天井石、壁面、床面の全からベンガラが検出された。全面に面的に認められるため、塗布されたものと考えられる。床面からはベンガラだけでなく朱も検出された。この朱は、局所的で朱だけで凝集しており、遺骸や副葬品に散布されたものと考えられる。朱とベンガラが使い分けられていたのであろう。ベンガラは、ベンガラ（不定形）であった。ベンガラの色調が均一であったため、ベンガラ小塊は確認しづらかった。

墳輪からは外面を中心にベンガラだけが認められた。墳輪は長期間古墳上で露出していたものと考えられ、乾燥や凍結により劣化が進行したものが多い。比較的状態の良いものは、ベンガラ層が墳輪表面にしっかり付着しており、墳輪焼成前にベンガラを塗布し、墳輪焼成時の熱でベンガラを固着させた、いわゆる焼成前塗彩のものと考えられる。ベンガラは、ベンガラ（不定形）であった。

資料74（セスドノ古墳）：古墳時代中期後半。発掘調査により横穴式石室内面全面に赤色顔料が塗布されていることが判明している（佐田編1984）。横穴式石室の構成材と思われる板石１枚に付着しているものを分析し、ベンガラ（不定形）が検出された。

〈謝辞〉

本研究には、科学研究費助成事業・基盤研究（A）20H00039を使用しました。研究を行うにあたり、田川市教育委員会ならびに同所属の江上正高氏と福本寛氏には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

青木庄一郎1934『豊前猪位金村位登古墳』『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第9輯、福岡県教育委員会

上野智裕1988「桐ヶ丘遺跡緊急調査報告」『郷土田川』31、田川郷土研究会

岡田文男1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

坂井貴志・山崎頼人編2013『津古永前遺跡』小郡市教育委員会

佐田　茂編1984『セスドノ古墳』田川市教育委員会

志賀智史2006「古坊遺跡出土の赤色顔料」『古坊遺跡　高野ムカエ遺跡』福岡県教育委員会

志賀智史2007「玉沢地区条里跡第9次調査出土の赤色顔料」『玉沢地区条里跡　第9次調査報告』大分市教育委員会

志賀智史2010「高江辻遺跡出土の赤色顔料について」『高江辻遺跡』筑後市教育委員会

志賀智史2013「津古永前遺跡出土の赤色顔料について」『津古永前遺跡』小郡市教育委員会

志賀智史2014「長目塚古墳出土の赤色顔料について」『長目塚古墳の研究』熊本大学文学部

志賀智史2016「鏡迫古墳群出土の赤色顔料について」『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告28』九州歴史資料館

志賀智史2017「城野遺跡１号方形周溝墓から出土した朱の産地推定について」『北九州市埋蔵文化財調査研究紀要』北九州市埋蔵文化財調査室

田代健二編1999『経塚横穴墓群・古墳群』田川市教育委員会

福本　寛2002「位登古墳の調査」『九前研通信』11号、九州前方後円墳研究会

福本　寛編2004『猫迫１号墳』田川市教育委員会

本田光子1988「弥生時代の墳墓出土赤色顔料－北九州地方にみられる使用と変遷－」『九州考古学』62、九州考古学会

本田光子1995「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』第31・32号（合併号）、日本文化財科学会

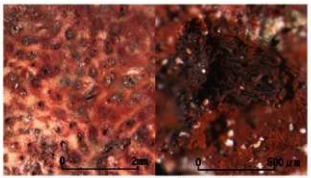
南　武志・河野摩耶・古川登・高橋和也・武内章記・今津節生2013「硫黄同位体分析による西日本日本海沿岸の弥生時代後期から古墳時代の墳墓における朱の産地同定の試み」『地球化学』47-４、一般社団法人日本地球化学会

Lafuente B, Downs R T, Yang H, Stone N（2015）The power of databases: the RRUFF project. In: Highlights in Mineralogical Crystallography, T Armbruster and R M Danisi, eds. Berlin, Germany, W. De Gruyter, pp 1−30

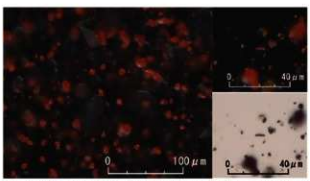
表３　田川市内出土赤色顔料分析結果一覧

時期	資料	古墳・遺跡	遺　構	各調査結果				赤色顔料の種類	備考
				生物顕微鏡	蛍光X線	X線回折チャート			
弥生終末	1	桐ヶ丘遺跡	箱式石棺	朱 ベンガラ（不定形）	Fe	辰砂* 赤鉄鉱		朱 ベンガラ（不定形）	朱は極々微量。ベンガラ（不定形）に巨大なパイプ状粒子を含む。
古・前	2	位登古墳	箱式石棺	朱 ベンガラ（P） ベンガラ（不定形）	Hg Fe	辰砂 赤鉄鉱		朱 ベンガラ（P） ベンガラ（不定形）	骨片には朱中心。白色結土にはベンガラ中心。ベンガラ（不定形）に巨大なパイプ状粒子を含む。
古・前・後	3	経塚３号墳	第１主体部（粘土棺）	朱 ベンガラ（不定形）	Hg Fe	辰砂 赤鉄鉱		朱 ベンガラ（不定形）	ベンガラ（不定形）に巨大なパイプ状粒子を含む。
古・中・前	4	猫迫１号墳	石室内・天井石中央	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	
	5		石室内・北壁中央	ベンガラ（不定形）	Fe	赤鉄鉱		ベンガラ（不定形）	
	6		石室内・東（奥）壁中央	ベンガラ（不定形）	Fe	赤鉄鉱		ベンガラ（不定形）	
	7		石室内・南壁中央	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	
	8		石室内・西壁北側中央	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	
	9		石室内・床面	朱 ベンガラ（不定形）	Hg Fe	辰砂		朱 ベンガラ（不定形）	朱は凝集している。
	10～34		円筒埴輪（24点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集　第11・12・13・14図1−9, 11, 13, 15, 16, 18, 20, 22−26, 28, 32, 33, 38
	35～40		朝顔形埴輪（5点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集第15図1−5
	41～47		蓋形埴輪（6点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集第16図1−6
	48～52		家形埴輪（4点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集第16図8−11
	53～71		線刻・透孔埴輪（18点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集 第17図1−3, 6, 7, 9−11, 13−19, 23, 24, 27
	72		形象埴輪（1点）	ベンガラ（不定形）	Fe	—		ベンガラ（不定形）	第11集第18図6
	73		甲冑形埴輪（1点）	ベンガラ（不定形）	Fe	赤鉄鉱*		ベンガラ（不定形）	第11集第21図2
古・中・後	74	セスドノ古墳	板石付着	ベンガラ（不定形）	Fe	赤鉄鉱*		ベンガラ（不定形）	

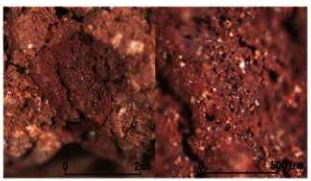
1．資料１（桐ケ丘遺跡）の赤色顔料（左５倍，右40倍）
左は多様な赤色系統色のベンガラ小塊。右はベンガラ（不定形）小塊中の直径30μm前後の巨大パイプ状粒子。生物顕微鏡観察では極々微量の朱も検出された。



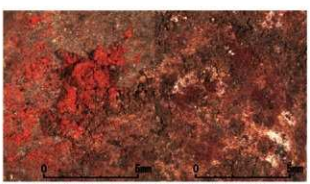
2．資料２（位登古墳）の赤色顔料（左10倍，右40倍）
左は人骨付着の朱。右は粘土付着のベンガラ（不定形）小塊中の直径25μm前後の巨大パイプ状粒子。通常の直径約１μmのパイプ状粒子を含むベンガラ（P）も検出。



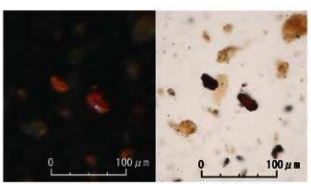
3．資料２人骨付着の赤色顔料粒子（左200倍・右400倍）
ほとんどが朱であった（左）が、直径約１μmのパイプ状粒子を含むベンガラ（P）も検出された（右各中央）。



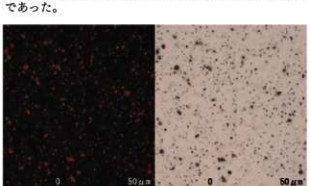
4．資料３（経塚３号第１主体）の赤色顔料（左10倍，右40倍）
左はベンガラ（不定形）小塊。右は小塊中の直径30μm前後の巨大パイプ状粒子。朱も検出された。



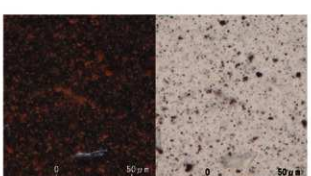
5．資料９（猫迫１号墳石室床面）の赤色顔料（５倍）
左は凝集、点在した朱。右は壁面や天井石も含め石室全面に塗布されたベンガラ。ベンガラはベンガラ（不定形）であった。



6．資料９の赤色顔料粒子（200倍／左側射・右透過）
各中央右が朱粒子で、同左がベンガラ（不定形）粒子。

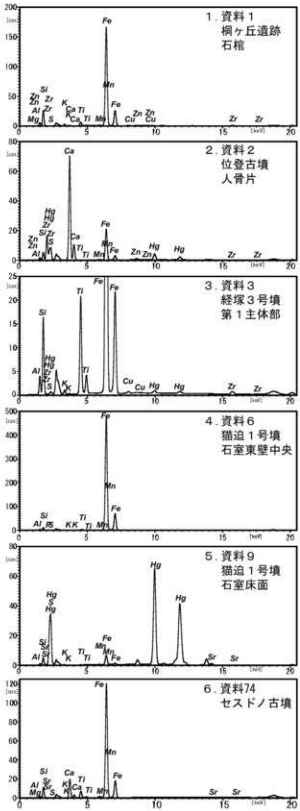


7．資料６（猫迫１号墳石室東壁）の赤色顔料粒子（400倍）
ベンガラ（不定形）であった。調査を行った埴輪63点も全てベンガラ（不定形）であった。



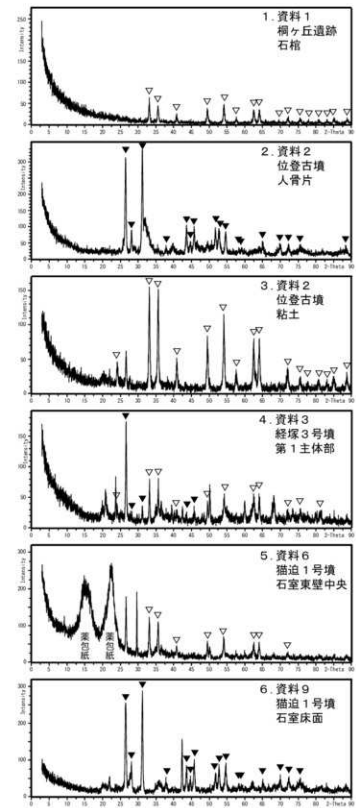
8．資料74（セスドノ古墳板石）の赤色顔料粒子（400倍）
ベンガラ（不定形）であった。

第１図　赤色顔料の顕微鏡写真



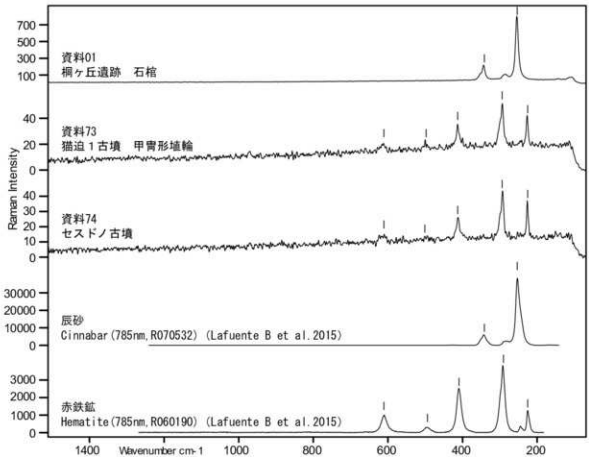
第２図　蛍光Ｘ線スペクトル図

Hg（水銀）は朱に由来する。Fe（鉄）のほとんどはベンガラ由来で、土壌や岩石等由来の鉄分も検出されている。資料１と２のZn（亜鉛）とCu（銅）は、盗掘後の混入品由来か。資料３のCuは、副葬された鏡由来であろう。その他の元素のほとんどは土壌や岩石等由来と考えられる。



第３図　Ｘ線回折図

朱と判断した資料のうち資料２，３，９からは、辰砂（▼）が同定された。ベンガラと判断した資料のうち資料１，２，３，５，６からは、赤鉄鉱（▽）が同定された。その他、未同定のピークの多くは土壌や岩石等由来と考えられる。



第４図　ラマン分光スペクトル図

第Ⅴ章　まとめ

弓削田原Ｂ遺跡２次の調査

本遺跡は個人住宅建設に伴う調査である。調査区は一部攪乱を受けていたが、残存状況は比較的よく、確認できた主な遺構は、土坑跡２基、柱穴跡約30基、住居跡１基（SC１）である。このうち、方形プランの住居跡であるSC１では須恵器と砥石が出土しており、形状から６世紀後半～末頃に位置付けられる。弓削田原Ｂ遺跡はこれまで弥生時代の遺跡と周知されており、実際、今回の調査では客土から弥生土器片も採集されたが、古墳時代後期の集落も立地していたことが明らかになった一方で、同遺跡の弥生時代の遺構は、別地点にあることが想定された。

上の原遺跡群３次の調査

本遺跡は個人住宅建設に伴う調査である。調査区は遺構の残存状況が比較的よく、確認できた遺構は、住居跡４基（SC１～４）、土坑跡７基（SK１～７）、溝跡１条、柱穴跡約60基である。住居跡は円形プランが１基（SC４）、方形プランが３基（SC１～３）で、うちSC２はSC１の建て替え前の住居、その北側に位置するSC３はほとんどが調査区外で全容は不詳である。これまでの調査成果等から、上の原遺跡群は弥生時代の遺跡として周知されていたが、ベット状遺構をもつSC１から古墳時代の土師器が出土しており、同時期の集落も形成されていたことが今回の調査で明らかとなった。

また、調査区南側で確認された遺構では、円形住居であるSC４の廃絶後に、廃棄土坑（SK４）と貯蔵穴（SK７）が作られた状況が確認された。SC４は出土土器が限られているため時期は不詳だが、続くSK４では口縁部が平坦となる甕が主体となり、SK７では口縁部が立ち上がる甕が主体となって

いる。なお、SK 7 の形状は貯蔵穴だが、欠損した石製品も出土しているため、廃棄土坑として転用された可能性が高い。一方、調査区北側には溝跡と長方形の土坑（SK 6）が確認されたが、出土遺物がないこともあり、時期や性格は不詳である。

今回の調査は、部分的ではあるが、バリエーションのある住居跡とともに廃棄土坑や貯蔵穴などの遺構が確認され、上の原台地における弥生～古墳時代の集落の一面が明らかとなった。

猫迫１号墳２次の調査

今回の調査は宅地造成に伴うもので、前回の範囲確認調査に加えて新たに墳丘土の堆積状況や、石室構築の掘方を確認した。各トレンチの結果、当古墳の墳丘の大半は、後世の盛土が認められた。削平は石室側壁まで認められたが、南側は墳丘の一部が残存していた。また、石室も攪乱が認められた。削平の時期は後世の墳丘土より、現代の磁器片が認められたこと、記録より昭和40年頃には行われたと推測される。このような状況であったが、石室構築技法を検討したい。

墳丘南側では、黒色粘質土（黒色帯）を確認した。堆積は水平に近く、古墳築造の際の整地と捉えられる。自然科学分析の結果、築造前の植生はササ類等の群生が想定され、古墳築造時は表土部分の草木を伐採し、平坦に整地する。墳丘は、黒色粘質土に黒色土・褐色土の楕円形の土塊を互層に積上げて墳丘を構築するが、墳丘端部では土塊状はみられず、帯状を呈する。墳丘東側は、南側で確認できた黒色粘質土が含まれた墳丘土の残存が認められた。一方、前庭部は範囲確認調査で墳丘土が被さっていた調査結果と合せると、石室周囲に土塊状の積上げ技術による墳丘土の構築が考えられる。墳丘を一定の高さまで積上げると、長方形の掘方を石室側へ斜位に石室床面より下部まで掘削する。石室の床面が地山であることから、凹状に掘削したと捉えられる。石室の側壁・奥壁の構築は、凹状に天井まで届く板石や腰石を据え、石室床面まで裏込め土・小礫を充填し、墳丘土を構築する。

本古墳は墳丘南東側に張出しを備える大型の円墳で、墳丘径は30mに近い首長墳である。石室構造は伽耶・新羅地域の技術を導入しつつ、福岡平野以西で成立していた初期横穴式石室を採用した構築技術を採用する。また、出土資料は北部九州と朝鮮半島との関係が深い。この端緒を開いた人物を示す古墳として、極めて重要であったことが考えられる。

上の原遺跡群４次の調査

本遺跡は個人住宅建設に伴う調査である。調査区は本遺跡群の中央部に位置する。確認できた遺構は、竪穴住居跡１基、土壙墓１基、土坑跡６基、柱穴跡約40基と遺構が密集していた。

竪穴住居跡は調査区西側で検出し、隅丸の角部分を確認した。形状は方形もしくは長方形が想定でき、壁溝を備える。時期の特定は不詳であるが、形状から弥生時代後期以降と捉えられる。土壙墓は調査区南側で確認した。形状は隅丸長方形を呈し、幅が狭い。堆積状況から棺等は確認されていないが、堆積はレンズ状を呈する。出土遺物は石剣片４点で、出土位置は墓壙中央付近の床面もしくは直上である。出土した角度は２の切先・４の身が床面に対し水平、３の切先は斜角である。SK 1 は弥生時代中期頃に位置づけられる。土坑跡は６基を確認したが、調査区の面積に対して集中している。平面の形状は隅丸長方形や楕円形で、SK11・12のような並列の配置と多様性が見られる。SK 8・11～13は廃棄土坑として使用されたと考えられ、弥生時代中期中頃～後半頃に位置付けられる。

本遺跡群では、弥生期・古墳期の集落跡が確認されていたが、今回の調査で、弥生期の土壙墓の可能性が高い SK 1 が検出され、集落の在り方が明らかとなった。

番町遺跡の調査

本遺跡は個人住宅建設に伴う調査で、初例である。調査地は遺跡範囲の東南に位置し、遺構の残存状況は、根跡により良好ではなかった。確認できた遺構は、性格不明遺構３基、柱穴跡約３基である。性格不明遺構３基は堆積状況から、地層横転が想定される。出土遺物は、弥生時代前期末頃に位置づけられる。今後は、同丘陵北側に位置する糸田町糸田原遺跡など、周辺との比較検討を重ねたい。

第VI章　付　編

第１節　上の原遺跡群１次の調査

（1）　発掘調査に至る経緯と歴史的環境

①　発掘調査に至る経緯（第71～80図、表14、図版６～８）

昭和62年10月12日付け田教文第208号にて、文化財保護法第57条の３を田川市長 滝井義高より通知された。施工内容は金川小学校講堂を解体し２階建て体育館新設に拠るもので、同年10月30日付け田教文第41号で、福岡県教育庁筑豊教育事務所所長・文化課を経て文化庁に通知を行う。発掘調査期間は同年11月１日から11月５日の期間で実施した。

②　調査組織

昭和62年度の発掘調査に係る関係者は下記のとおりである。

田川市教育委員会　【文化体育課】

教　育　長　　角銅　　圓
教育次長　　森脇　晃治
課　　長　　西村　　勝
係　　長　　平　　賢一、矢野　勝美（前任）、清水　弘子（後任）
学　芸　員　　森本　弘行（発掘調査担当）
嘱託職員　　上野　智裕（発掘調査担当）

③　歴史的環境

上の原遺跡群は昭和時代初期頃に郷土史家等によって把握されていたが、森貞次郎氏が昭和17（1942）年に紹介されて以降、本市の倉ヶ原遺跡を含めた下伊田遺跡群として、弥生時代を代表する遺跡の１つである。遺跡が立地する台地の地質は、後期更新世－完新世の火山岩類に分類されている。

本遺跡群は台地上一帯が上の原遺跡群として遺跡地図に登載されているが、発掘調査当時は、寺の上遺跡を上の原Ａ遺跡、金川小学校周辺を上の原Ｂ遺跡と認識されていた。また、台地一帯を１～５地点に分けて包蔵地と認識されていた時期もあった。本報告では、上の原Ｂ遺跡として記録保存を行っていたが、当台地上でこの発掘調査が初例であったため、１次として報告する。

森貞次郎1942「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』第13巻第7号 日本古代文化学会

第71図　上の原遺跡群１次位置図（S＝1/5,000）、Ａ地点位置図（S＝1/400）

(2) 遺構と遺物

① A地点（第71～73図、図版７）

確認された遺構は14基で内訳は、土坑跡３基、柱穴跡11基である。調査面積は約50㎡である。

土坑跡

Ｐ１（第72図）

遺構の規模は上端が長軸2.06m、短軸1.04m、下端は長軸1.89m、短軸0.93mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.33mを測る。

出土遺物（第76図、表14、図版７）

土器

１～３は甕である。１は頸部に二条の沈線を巡らす。３は底部で、外底は上げ底状を呈する。

Ｐ２（第72図）

遺構の規模は上端が長軸1.44m、短軸0.84m、下端は長軸1.31m、短軸0.80mを測る。平面の形状は、南東側が狭まる隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.19mを測る。

Ｐ３（第71図）

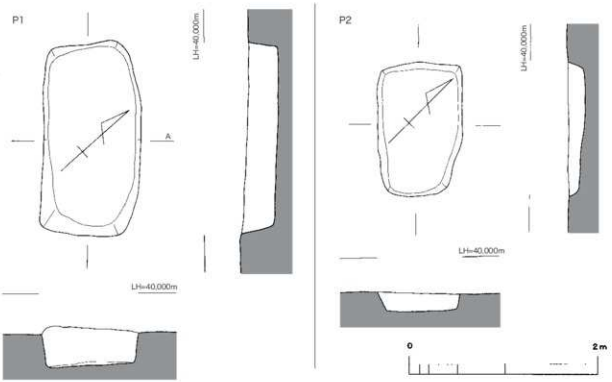
遺構の規模は直径が約2.50mを測る。詳細は不明である。

ア－10、Ｐ３横、表採（第73図、表14）

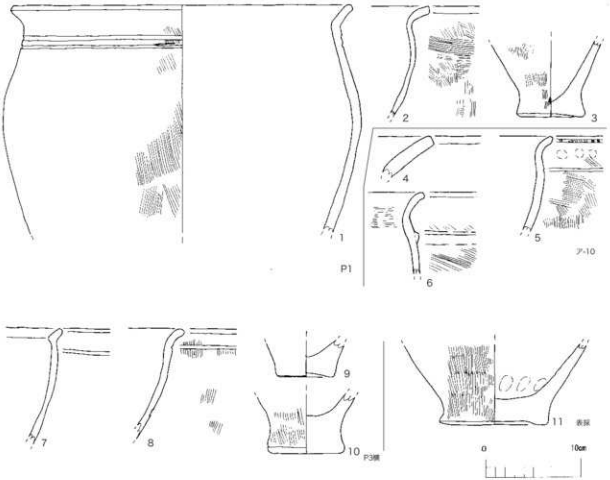
出土遺物

土器

４は口縁部が残存する鉢である。５・６は甕で、５は口唇部にキザミ、胴部上半に一条の沈線を巡らす。６は胴部に断面が三角形の突帯を一条巡らす。７・８は甕で、７は口縁部が短く、外面の胴部上半に二条の沈線を巡らす。８は頸部に一条の沈線を巡らす。９は壺底部で、外底は上げ底を呈する。10は甕底部で、外底は平底を呈する。11は壺底部で、外底は低い上げ底を呈する。



第72図　Ｐ１・２実測図（S＝1/40）



第73図　Ｐ１、Ｐ10、Ｐ３横、表採出土遺物実測図（S＝1/4）

② Ｂ地点（第74図、図版６～８）

確認された遺構は12基で、内訳は土坑跡８基、柱穴跡３基、性格不明遺構１基である。調査面積は約118㎡である。

土坑跡

Ｐ１（第75図）

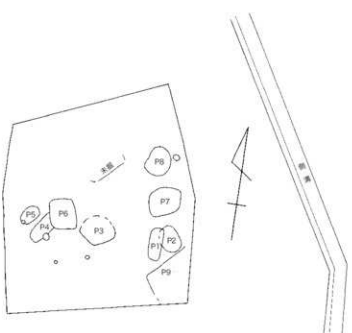
遺構の規模は上端が長軸1.62m、短軸0.73m、下端は長軸1.23m、短軸0.64mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.55mを測る。北東側に位置するＰ２より新しい。

出土遺物

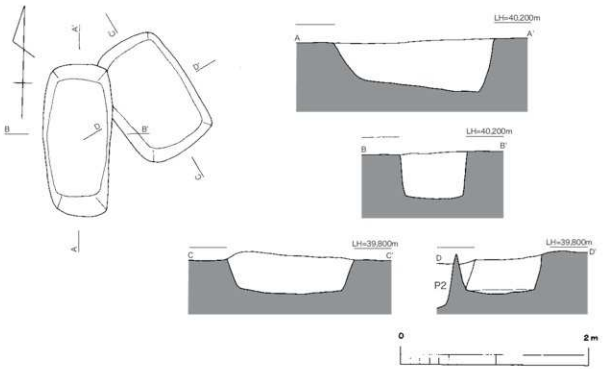
（第76・80図、表14、図版７）

土器

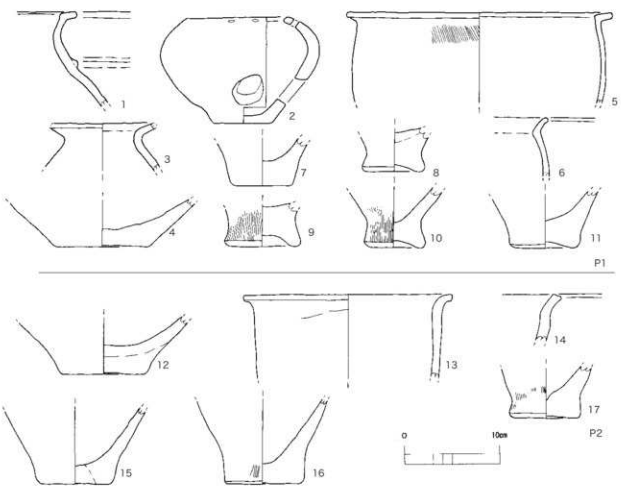
１は壺で、断面が三角形の突帯を一条巡らす。２は無頸壺で、口縁部２箇所、胴部下半に１箇所の穿孔が認められる。３は口唇部を欠損する。４は壺底部、５・６は甕口縁部、７～11は甕底部である。



第74図　Ｂ地点遺構配置図（S＝1/200）



第75図　Ｐ１・２実測図（S＝1/40）



第76図　Ｐ１・２出土遺物実測図（S＝1/4）

Ｐ２（第75図）

遺構の規模は上端が長軸1.33m、短軸0.92m、下端は長軸1.21m、短軸0.74mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.41mを測る。

出土遺物（第76図、表14、図版７）

土器

12は壺底部で底部は厚く、外底は中心が凹む。13・14は甕口縁部、15～17は甕底部である。

Ｐ３（第74図）

遺構の規模は径約1.50mを測り、平面は不整形である。半分程掘削を進めて、深度は0.95mを測る。

出土遺物（第77・88図、表14、図版７）

土器

１～４は壺口縁部である。１は口唇部にキザミと胴部上半に一条の沈線が施される。２は外面に三条の沈線が施される。３は口縁端部が肥厚を呈する。４は口唇部に二段のキザミが施される。５は壺底部である。６～17は甕で、６の外面は頸部下に指押さえ後全体に縦位のハケが施され、外底は穿孔が施される。７は大形で底部は肥厚、外底は上げ底を呈する。８は頸部下に二条、10～13は一条の沈線が施される。11・13は口唇部にキザミが施される。９は、外面の胴部上半に断面が三角形の突帯を一条巡らす。14～17は底部で、14は底部外面に、16は外底に穿孔が施される。

石器

15は、珪質頁岩製の扁平片刃石斧である。

Ｐ４（第78図、図版７・８）

遺構の規模は上端が長軸1.49m、短軸0.98m、下端は長軸1.27m、短軸0.90mの隅丸長方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.69mを測る。北東側に位置するＰ６より新しい。

出土遺物（第79図、表14、図版19）

土器

１・２は鉢である。１は頸部の指押さえにより、口縁部が外方へ開く。２は口唇部にキザミ、外面は縦位のハケ後、横位のミガキが施される。３・４は壺底部である。５～11は甕である。５・６の口唇部はキザミ、５は頸部下に二条の沈線、６は一条の沈線、８は胴部上半に一条の沈線と楕円形のキザミが施される。９の口縁部は、頸部の指押さえにより外方へ開く。外面は縦位のハケとミガキ、内面は斜位後、縦位のミガキが施される。11は底部で、外底に円形の穿孔が施される。

Ｐ５（第78図）

遺構の規模は上端が長軸1.62m、短軸1.45m、下端は長軸1.43m、短軸1.20mの隅丸方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.36mを測る。

Ｐ６（第79図）

遺構の規模は上端が長軸1.10m、短軸0.86m、下端は長軸0.84m、短軸0.71mの隅丸正方形を呈する。断面は台形状を呈し、深度は0.27mを測る。

出土遺物（第80図、表14、図版８）

土器

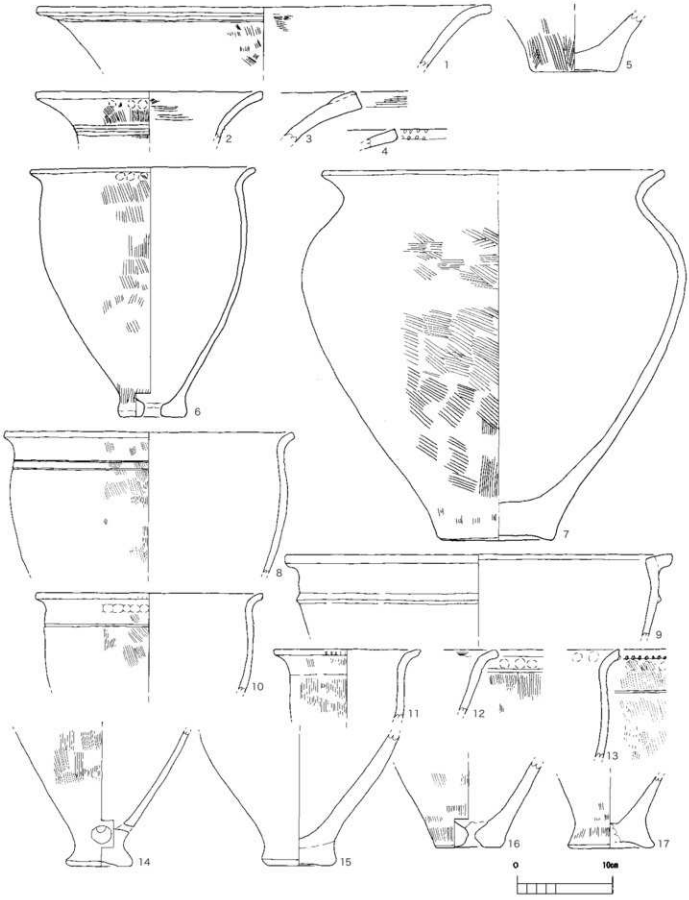
１は壺底部である。２～５は甕で、２・３は胴部上半に一条、４は二条の沈線が施される。

石器

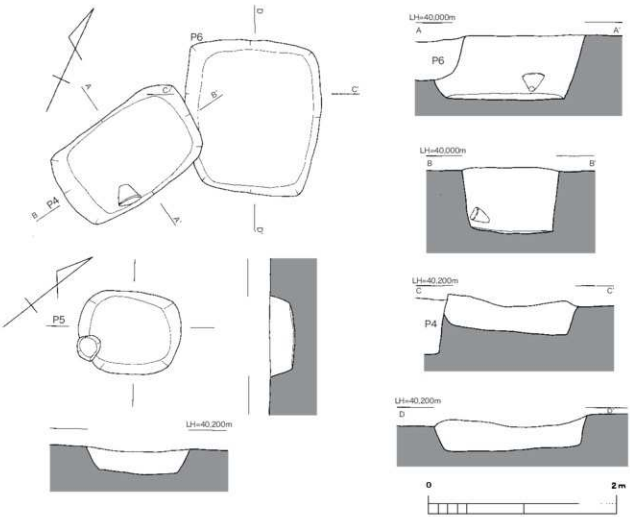
16は赤紫色泥岩製の石庖丁である。

Ｐ９（第74図）

調査区南東で確認された遺構で、調査区外へ延びる。遺構は東西約2.7m、南北約1.0m、深度は



第77図　P３出土遺物実測図（S＝1/4）



第78図　P４～６実測図（S＝1/40）

0.40mを測る。平面は方形を呈するが、住居跡ではない。

出土遺物（第80図、表14、図版８）

土器

７・８は壺である。８は外面に断面が台形の突帯を一条巡らす。11～14は甕である。11は口唇部に円形のキザミと胴部上半に一条の沈線、12は胴部上半に一条の沈線が施される。

石器

17は砂岩製の砥石で、砥面は３面認められる。

金川小学校横道路壁面工事（第80図）

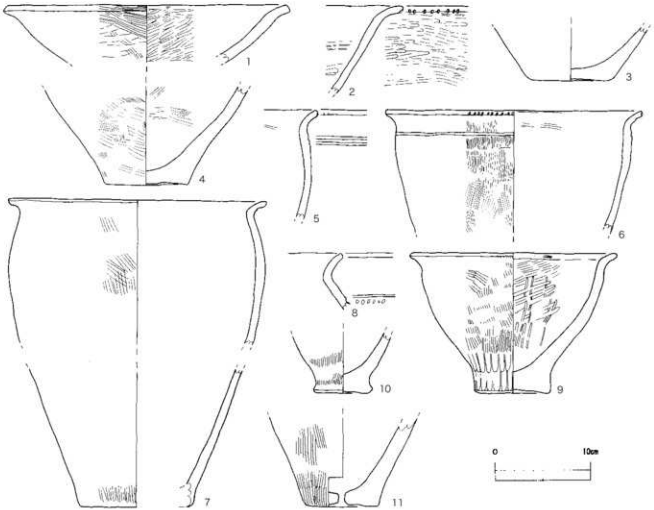
1988（昭和63）年に金川小学校横の道路壁面工事の際確認された遺構で、正確な位置は不明であるが略図が記録されていたので報告する。工事長は約50mで、確認された遺構は土坑跡４基、柱穴跡２基である。１は上端径1.40m、下端径2.14m、深度は1.50mを測る。形状は袋状を呈する。２は上端径0.70m、下端径1.67m、深度は1.16mを測る。形状は袋状を呈する。

第２節　位登古墳の調査

（1）　発掘調査に至る経緯と概要（第81～85図、表10～12・14、図版８・９）

①　発掘調査に至る経緯

位登古墳は、福岡県の『史蹟名勝天然紀念物調査報告書第九輯（史蹟之部）』（1934年）にて「豊前猪位金村位登古墳」として紹介された古墳で、昭和８（1933）年に調査した報文では、箱式石棺から鏡１面、管玉62個、太刀片とともに人骨が出土したとあるが、現在は出土品の行方は不明である。



第79図　P４出土遺物実測図（S＝1/4）

その後、『田川市史　上巻』（1974年）で紹介され、『田川歴史資料集（1）－古墳時代編－』（田川歴史懇話会1982年）では測量図が掲載された。いずれにせよ、田川地域では唯一の内部主体が明らかな前方後円墳とされている。

平成13年度、位登古墳上の地蔵堂（大師堂）等が鉱害復旧工事の対象となり、事業者である新エネルギー・産業技術総合開発機構鉱害本部九州事業部田川事務所から、平成13年６月25日付けで文化財の有無について照会があった。これを端緒として、鉱害復旧工事にともなう保存の協議を重ね、平成13年７月18日付け田教文第22号にて文化財保護法による土木工事等の発掘通知を提出し、主体部にかかる地蔵堂の建て替え及び参道などの工事対象範囲について、田川市教育委員会が保存を目的とした範囲内容確認調査を実施することとなった。

調査期間は平成14年１月21日から５月10日で、調査対象面積は約50㎡である。調査中の平成14年３月23日・27日には現地説明会を行い、地元の猪位金五区を中心に市内外から81名の参加者があった。調査後は、遺構に影響を与えないよう真砂土で埋戻しを行った上で、地蔵堂の原形復旧工事を行った。

②　調査組織

平成13年度の発掘調査に係る関係者は下記のとおりである。

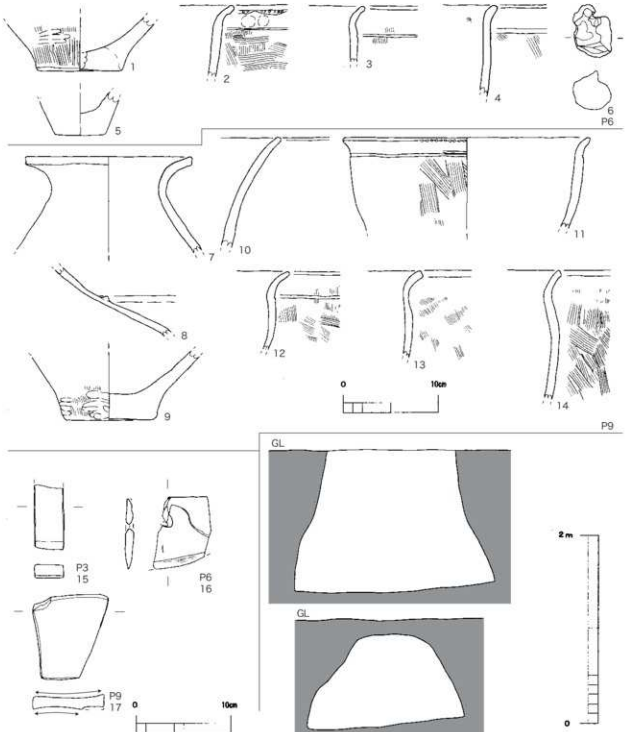
田川市教育委員会

【文化課】

平成13年度

教　育　長　　月森清三郎

教育部長　　越知　作光



第80図　P３・６・９出土遺物実測図（S＝1/4）、検出遺構略測図（S＝1/40）

課　　長　　久原　秋男
課長補佐　　林　　晋一
係　　長　　身吉　泰子
主　　任　　森本　弘行
主　　事　　福本　　寛（発掘調査担当）

③　位置と環境（第81図）

位登古墳は、田川市西部の中元寺川流域に所在し、中元寺川にそって南北にのびる標高34m前後の丘陵の先端部に立地している。この丘陵は古墳のすぐ南側に鉄道が建設されたために切断され、また、周辺の水田も石炭産業によって大きく変貌している。

第81図　位登古墳位置図（S＝1/5,000）

墳丘上には大師堂が設置されているため、地元では「弘法塚」と呼ばれ親しまれている。地元の方の話によると、大師堂の以前は住宅があり、住人が石棺内の人骨を披露していたという。したがって、位登古墳は、少なくとも昭和9年時の報文以降、墳丘の形態や主体部が大きく変容している。

(2)　遺構

①　墳丘（第82図、図版８）

位登古墳の墳丘については、過去1979年に田川東高校の生徒が中心となって、測量を行っている（田川歴史懇話会1982年）。今回の調査では、より精度の高い測量図を作成することを目的とし、25㎝の等高線で測量図を作成した。その結果、位登古墳の現存長は約52m、後円部径約28m、後円部と前方部の比高差は、現状で約１ｍを測った。

住居や地蔵堂で後円部が削平されたことから考えても、築造当初は前方部が後円部より低く、また、前方部の裾が広がらないことから、古墳時代前期の前方後円墳の形状が想定される。

なお、地蔵堂に続く参道（階段）の復旧工事にともなって、後円部南側にトレンチを設定し土層観察を行ったが、明確な盛土は確認できなかった。白色粘質土（八女ローム層）の地山を削り出して、墳丘を作っていることが想定されるが、今回の調査では調査区が限られたため、位登古墳の全容解明についてはさらなる調査と検討が必要である。

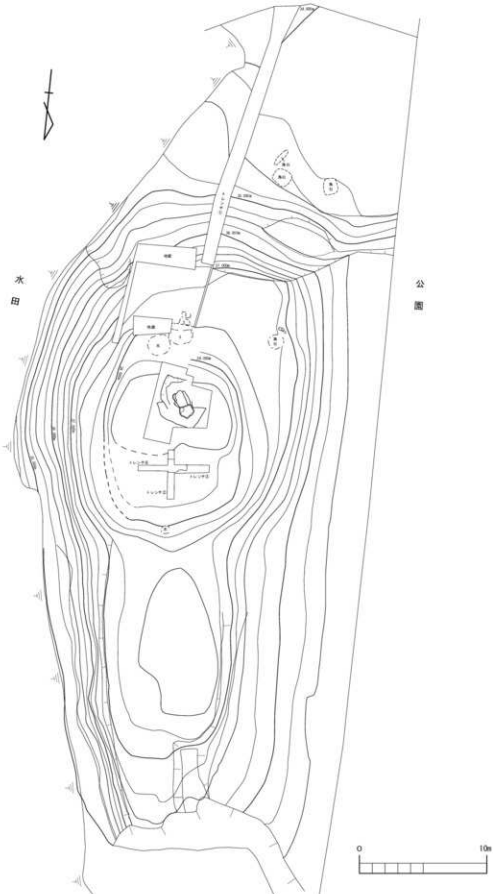
②　主体部（第83図、図版８）

後円部中央の地蔵堂を撤去した後、GLより約30㎝下で箱式石棺の蓋石と墓坑を確認した。石棺と墓坑は昭和８年の調査坑等により攪乱を受けていた。昭和９年の報文によると、石棺は蓋石３枚、左右側石各２枚、前後各１枚、底石２枚とあったが、その後の住宅や地蔵堂建設で動かされており、調査では、蓋石１枚、側石は前方部に向かって、左側が２枚、右側が１枚、前小口が１枚、床石が１枚のみが原位置を保って検出された。

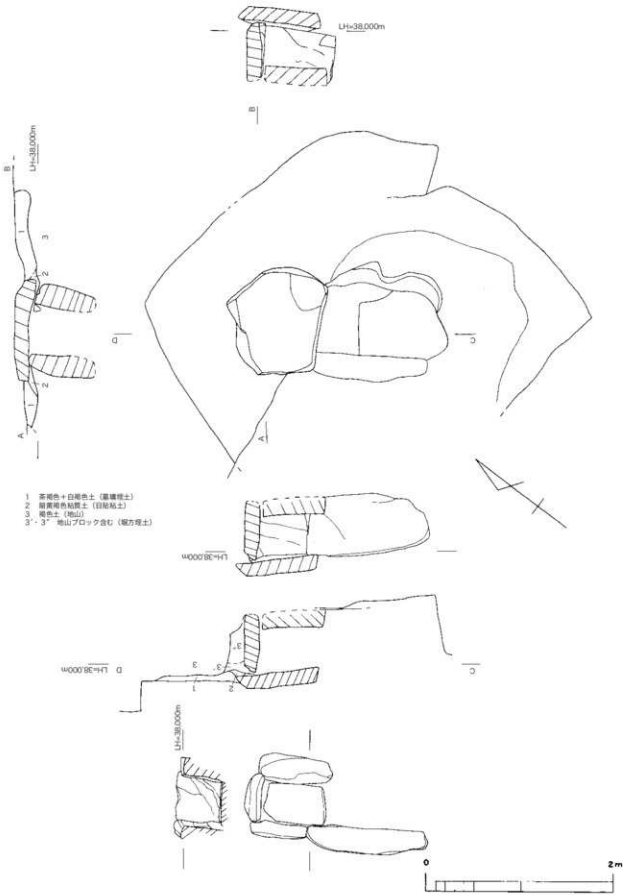
墓坑は石棺とともに南側が攪乱を受けていたが、本来や略方形のプランであったと考えられ、石棺はＮ－32°－Ｗの方向に墓坑の対角線上に設置されていた。蓋石は1.1×0.8～1.0mで厚さ約0.16mを測り、蓋石側の左側石の長さは0.6mで、その隣の左側の長さは1.3m、右側石の長さは0.8mを測る。側石は蓋石側が短い。床石は0.67×0.4mの長方形で、蓋石側の両側石とほぼ同じ長さである。したがって、本来あったもう1枚の右側石と床石は、現存する左側石の南側のものと同じ長さのものと推測される。

石棺の内法は約0.5×1.7mを測り、内部には赤色顔料が塗布されていた。また、昭和９年の報文にある人骨が確認されたが、原位置を保っておらず、ガラス板で仕切られた状態で蓋石の下に片付けられていたため、昭和９年以降に大きく動かされたようである。

また、土層観察から石棺の築造過程を検討した。まず、略方形の墓坑を彫り、その対角線上に石棺



第82図　測量図（S＝1/300）



第83図　箱式石棺実測図（S＝1/40）

の床石、小口石、側石を埋める。次に、朱を石棺の中及び石棺外の墓坑に塗布する。その後遺体を埋葬して、蓋石をかぶせて粘土で目張りを行う過程が想定された。

このように、主体部は比較的大きな石材を使用して石材の個数を減らした箱式石棺で、かつ、朱を塗布した上に粘土で目張りもしており、通常の石棺墓とは一線を画した大型の石棺である。

③　遺物（第84図、図版８）

位登古墳の主要な遺物については、昭和９年時の報文では、石棺から鏡１面、管玉62個、太刀片があったとされているが、現在は行方不明である。今回の調査では、主体部確認のためのグリッドから、管玉１点と土器片１点のみ出土したが、２点とも埋土および攪乱坑での出土である。

１は碧玉製の管玉で、長さ2.0㎝、幅0.4㎝の細長い形状である。孔径は0.2～0.15㎝と片面孔径がやや大きいため、片面穿孔である。形状等から弥生時代のものと考えられるが、昭和９年時の報文にあった管玉62点は、径（幅）約１分（約0.3㎝）、長さ約５分ないし７分（1.5～2.1㎝）とあり、今回出土した管玉もその範疇に収まる。２は、ややM字状の突帯がある土器片で、形状から円筒埴輪の破片と考えられる。内面は大小２種のハケメがみられる。

第84図　位登古墳出土遺物実測図
（１はS＝1/1、２はS＝1/2）

④　位登古墳出土人骨の形質人類学的研究（第85図、表10～12、図版９）

足達悠紀[1]・米元史織[2・3]・山下理呂[1]・松尾樹志郎[1]・舟橋京子[3・4]
1：九州大学大学院地球社会統合科学府　　2：九州大学総合研究博物館
3：九州大学アジア埋蔵文化財研究センター　4：九州大学比較社会文化研究院

１）　はじめに

福岡県田川市位登古墳の2001年度の調査において、石棺内より人骨が２体出土した。調査にあたった田川市教育委員会が取り上げを行い、人骨が同教育委員会から九州大学比較社会文化研究院基層構造講座に搬入された。その後、2020年度に同教育委員会より比較社会文化研究院および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに調査・報告の依頼があったため、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、栃原の歯牙咬耗度（栃原 1957）、頭蓋骨の縫合（Buikstra and Ubelaker 1994）を用いた。性別推定については、Buikstra and Ubelaker（1994）を基準に、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起で性判定を行った。計測はMartin-saller（1957）に従った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成２』（九州大学医学部第二解剖学教室編 1988）記載の区分に従い、乳児０－１歳、幼児１－６歳、小児６－12歳、若年12－20歳、成年20－40歳、熟年40－60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。

なお、人骨は現在、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

２）　人骨所見

【保存状態】

保存状態は良好ではない。頭蓋骨は右頬骨突起・前頭骨の左側・左前頂骨・左側頭骨の鱗部・左蝶形骨を除いて遺存し、顔面骨は右眼窩上縁・左上顎の一部が遺存する。下顎骨は完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	•M^2	／	／	／	／	／	／	○	○	○	×	×	○	／	／
○	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	○	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	×

（○歯槽解放、×歯槽閉鎖、／欠損、△歯根のみ、•遊離歯、c齲歯）

歯牙咬耗度は、栃原（1957）の2°a－2°bであり、左下顎M１のみ３°である。

躯幹骨の遺存状態は以下の通りである。環椎・軸椎、頸椎が４点、胸椎が11点、腰椎が４点、椎骨片が３点遺存している。左右の第一肋骨、左肋骨片が少なくとも７本、右肋骨片が12本、胸骨体の一部が遺存している。

上肢骨の遺存状態は以下のとおりである。右鎖骨が遺存している。左右の肩甲骨は関節窩・肩甲棘の一部・烏口突起の一部・棘下窩の一部・関節下結節から外側縁の一部が遺存している。右上腕骨の骨体部・左上腕骨の近位端から骨体部・右尺骨の遠位端から骨体部・右橈骨の遠位端から骨体部が遺存している。右手骨は第二中手骨・第三中手骨・第四中手骨・第五中手骨・第一基節骨・有頭骨・小菱骨・大菱骨・有鉤骨、左手骨は第一中手骨・第四中手骨・第一基節骨・有鉤骨、左右不明の基節骨が２点遺存している。

下肢骨の遺存状態は以下のとおりである。右寛骨は腸骨稜の一部・寛骨臼の一部から坐骨体の一部が遺存している。右大腿骨の骨頭から転子部の一部・骨体部、左大腿骨骨体部・遠位端、左脛骨の骨体部が遺存している。

また、部位重複のため別個体と考えられる大腿骨骨体部片（右１点、左右不明１点）が遺存している。

【性別と年齢】

性別は、外後頭隆起・眼窩上隆起・乳様突起が発達していること、前頭結節が発達していないことから、男性と判定される。年齢は、ラムダ縫合・矢状縫合の外板が癒合し、冠状縫合の外板が癒合途中であること、内板は全て癒合していることに加え、歯牙の咬耗度が栃原（栃原　1957）の2°a－2°bであることから、熟年と推定される。左下顎M１は３°であるが、この歯牙のみ咬耗度が強いため加齢変化というよりむしろ噛み癖や歯牙の特殊利用によるものと考えられる。

また、別個体と考えられる大腿骨に関しては年齢・性別ともに不明である。

【特記事項】

頸椎と胸椎の椎体に小孔と骨棘の形成が確認される。軸椎の歯突起にも骨増殖が認められる。頸椎の椎体の変性のほうが胸椎よりも重度であること、腰椎には骨棘の形成が確認されないことから、活動負荷や生活様式によるものと考えられる。

全身に朱が付着している。

3）　形質的特徴

頭蓋骨の計測可能部位はBa-Br高141㎜のみである。本古墳と同様に北豊前に位置する折戸ノ上遺跡出土１号人骨のBa-Br高は143㎜、北豊前古墳時代人骨は135.2㎜、南豊前古墳時代人骨は136㎜、豊後古墳時代人骨は132.6㎜であり、本人骨のBa-Br高は比較群中で比較的大きい値を示す。

下顎骨は、下顎頭間幅が137㎜で、比較群中において最大の値を示す。下顎角幅が107㎜で、土井ヶ浜弥生人骨と近似した値を示し、比較群中において中間的な値を示す。下顎骨長が72.5㎜で、西南日本近代人骨に次いで小さい値を示す。オトガイ高が32㎜で、津雲・吉胡縄文人骨及び吉母浜中世人骨と近似した値を示し、比較群中において深堀弥生人骨に次いで２番目に小さい値を示す。下顎枝高が66㎜で、比較群中において最大の値を示す。下顎枝幅が34㎜で、深堀弥生人骨及び津雲・吉胡縄文人骨と近似した値を示し、比較群中において津雲・吉胡縄文人骨に次いで２番目に小さい値を示す。下顎枝角が125°で、西南日本近代人骨に次いで２番目に大きい値を示す。

右鎖骨の肋鎖靱帯圧痕に小孔が形成されており、Hawkey and Merbs（1995）のスコア４段階であり、発達している。

上腕骨は、中央最大径が23.3㎜で、北部九州古墳時代人骨と近似した値を示し、比較群中において中間的な値を示す。中央最小径は19.5㎜で、比較群中において最大の値を示す。骨体最小値は62㎜で、比較群中において小さい値を示す。骨体断面示数は83.7㎜で、比較群中において最大の値を示す。三角筋粗面の発達はやや明瞭であり、大胸筋付着部（大結節稜）と大円筋・広背筋付着部（小結節稜）も中程度の発達を示す。

尺骨・橈骨ともに、観察できる限りではあるが、骨間縁の発達は明瞭ではない。橈骨の円回内筋付着部の発達は明瞭である。

大腿骨は縄文時代人骨のような柱状性の形成はみられないが、大腿骨の粗線に付着する筋群の発達は比較的明瞭である。また、別個体と考えられる大腿骨に関しても、大腿骨粗線は比較的明瞭である。

脛骨は、栄養孔位最大径が33.5㎜で、南部九州古墳時代人骨と近似した値を示し、比較群中において小さい値を示す。栄養孔位横径は21.7㎜で、比較群中において最小の値を示す。栄養孔位周は87㎜で、比較群中において最小の値を示す。栄養孔位断面示数は64.7㎜で、津雲縄文時代人骨に次いで2番目に小さい値を示す。栄養孔位の計測値からわかるように、ヒラメ筋線の発達は不明瞭である。一方、鉛直線の形成は明瞭ではないが確認され、後脛骨筋と長趾屈筋の発達がうかがえる。

以上みてきた通り、上肢下肢ともに発達が明瞭な部位が多く、特に大胸筋や大円筋、広背筋、粗線に付着する筋群の発達は明瞭である。また、脛骨のヒラメ筋線の発達は不明瞭であるが鉛直線は確認されており、下腿の筋発達の傾向は水稲農耕的ではない（米元　2016）。観察される限りにおいて全身の筋付着部はやや発達しており、活動負荷はやや高かったと考えられる。

4）　位登古墳出土人骨の位置づけ

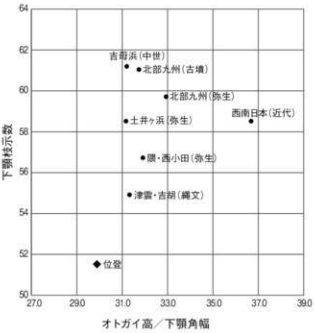
先述の通り、位登古墳から出土した人骨のうち頭蓋骨の計測が可能であったのは1体のみであった。本来形質的特徴の比較分析は、集団を代表させうるに足る個体数を用いて行うべきである。しかし、当該地域の資料は少なく、その形質的特徴を明らかにするために、この１個体を現時点でどのように位置づけることができるかを検討する意味はあると考える。したがって、以下、本遺跡出土人骨と比較群の平均値との比較を行っていく。さらに、本人骨は顔面骨の遺存状態が良好ではなく、頭蓋骨の形質的特徴を比較群と比較することが難しい。一方、下顎骨の遺存状態は非常に良好であるため、本稿では下顎骨の形質的特徴の検討を通して、頭蓋骨の形質的特徴の推測及び下顎骨の形質的特徴の位置づけを考察する。

日本人男性の形質相互関係として、頭蓋最大幅と頬骨弓幅・下顎角幅が相関し、上顔高とオトガイ高が相関することが知られている（溝口　2000）。したがって、あくまでも目安に留まるものの、位登古墳出土人骨においては頭蓋骨の各計測値が不明であるために、頭蓋最大幅と上顔高の関係が下顎角幅とオトガイ高に反映される可能性があると考え、以下分析を行っていく。

第85図では横軸で下顎角幅とオトガイ高の関係（オトガイ高／下顎角幅）を示すことで頭蓋最大幅と上顔高の関係を推測し、縦軸で下顎枝示数を示すことで、横軸と合わせて下顎骨自体の形態を比較群と比較した。横軸で大きい値を示すほど、下顎角幅に対してオトガイ高が高く、高顔である可能性がある。また、縦軸で大きい値を示すほど、下顎枝が広くて低いことを示す。

本人骨は図中左下にプロットされており、低顔である可能性が示唆される。下顎骨の形態は、オトガイ高は低いが下顎角幅が広く、下顎枝は狭くて高いことが示される。先学において、筑前・筑後・北豊前は高顔・高眼窩・狭鼻という形質を示し、北部九州・土井ヶ浜・隈西小田の各弥生時代集団が示すいわゆる渡来的な形質に近い傾向をもつこと、豊後・肥後が低眼・低眼窩・広鼻といった「在来的」な形質を有することが指摘されている（Doi and Tanaka 1987）。本人骨の下顎骨から推測された頭蓋骨の低顔という特徴は、「在来的」な形質に類するものであると言え、本古墳が所在する北豊前の古墳時代人骨とは異なる傾向にある可能性が示された。下顎角幅・オトガイ高の結果であるため、あくまで推測にすぎないものの、北豊前地域内において筑豊地域から出土する人骨の形質的特徴に地域性がある可能性が考えられる。

位登古墳出土人骨の形質的特徴がこれまで北豊前地域で確認されている特徴とやや異なる要因に関しては、以下のような可能性が考えられる。従来、渡来的形質の拡散は筑前地域を起点とした地理勾配が指摘されており、特に山間部・海浜ルートでの拡散は急激な地理勾配を示すとされている（Doi and Tanaka 1987）。当該地域は三方を山に囲まれており、「在来的」な形質を有するとされる豊後地域とも比較的近い場所に位置していることから、豊前地域内においても渡来的形質の拡散の影響をあまり受けなかったため、「在来的」な形質を残していたのではないかと考えるのである。ただし、前



第85図　オトガイ高／下顎角幅と下顎枝示数の関係

述の通り顔面骨の遺存状態が良好ではなく、頭蓋骨の形質的特徴が直接判明したわけではないため、本稿での分析結果はあくまでも可能性に留まるものである点を再度強調しておきたい。加えて、下顎骨形態は遺伝的影響よりも生活様式や生業形態に強い影響を受けることが指摘されており（Von Cramon-Taubadel 2011）、下顎骨形態から渡来系・在来系といった系統に関する議論に直結させることはできない点も確認しておきたい。本項で検討した下顎骨の傾向や、筑豊地域の古墳時代人骨については検討されていない部分が多い。これらの点については今後の資料の増加を待って検討する必要があろう。

5）おわりに

以上、出土人骨について報告を行ってきた。位登古墳石棺内から出土した人骨は2体で、熟年の男性と年齢性別不明の個体である。熟年男性人骨の形質的特徴としては、計測可能部位が少なかったために頭蓋骨の形質が確認できなかったが、下顎骨から低顔である可能性が示唆された。

一方、北豊前地域は概して高顔・高眼窩を示し、いわゆる渡来的形質が強く、弥生時代の北部九州の人々の形質に類似することが指摘されている（Doi and Tanaka 1987）。これは、本古墳が北豊前地域の中でも三方を山に囲まれ、豊後とも近接する筑豊地域に位置していることから、渡来的形質の影響をあまり受けずに「在来的」な形質が残ったためであると考えた。しかし、実際の頭蓋骨の形質的特徴は不明であるので、可能性を提示するに留まる点を注意しておきたい。

また、頸椎に変形性関節症が確認され、活動負荷や生活様式に起因する変性と考えられる。観察される限りにおいて全身の筋付着部はやや発達しており、活動負荷はやや高かったと考えられる

謝辞

田川市教育委員会の福本寛氏および各位には報告に際して様々なご配慮を賜った。また、九州大学文学部考古学研究室所属の永島さくら・諸岡初音・田渕朱莉・松村祐奈の諸氏には、人骨のクリーニング作業のご協力を賜った。深謝したい。

参考文献

金高勘次1928「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」『人類学雑誌』43

九州大学医学部解剖第二講座編1988『日本民族・文化の生成2　九州大学医学部解剖第二講座所蔵古人骨資料集成』六興出版

清野謙次・宮本博人1926「津雲貝塚人人骨の人類学的研究第2部頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41

坂田邦洋1996『比較人類学』青山社　p.181-193, 231-265

高椋浩史2021「九州における古墳時代人骨の四肢骨形態の研究」『岩永省三先生退職記念論文集：持続する志上』中国書店　pp.407-426

栃原博1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31　pp.607-656

中橋孝博・永井昌文1989「弥生人の形質、男女差、寿命」弥生文化の研究1　雄山閣出版

内藤芳篤1971「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79

溝口優司2000『情報考古シリーズ1　頭蓋の形態変異』勉誠出版株式会社

米元史織・高椋浩史・岩橋由季・中井歩・舟橋京子・田中良之2012「別府折戸ノ上遺跡出土人骨」『別府遺

跡群１」宇佐市教育委員会　pp.45-57
米元史織2016「筋付着部の発達度からみる弥生時代の生業様式の地域的多様性」『田中良之先生追悼論文集：考古学は科学か』 中国書店　pp.579-602
Buikstra, J. E., & Ubelaker, D. (1994). Standards for data collection from human skeletal remains. Research series no. 44.
Doi N. and Tanaka Y. (1987). A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. Anthropological Science, 95:325-343
Martin-Saller (1957) Lehrbuch der Anthropologie.Bd.I.Gustav Fischer Verlag. stuttgart
Von Cramon-Taubadel N. (2011). Global human mandibular variation reflects differences in agricultural and hunter-gatherer subsistence strategies. Proceeding of the National Academy of Sciences USA 108:19546-19551

表10　下顎骨計測比較（男性）

		位登古墳（古墳）		北部九州[1]（古墳）			曽・西小田[2]（弥生）		北九州[3]（弥生）		土井ヶ浜[4]（弥生）		深堀[5]（弥生）		津雲・吉備[6]（縄文）		吉母浜[7]（中世）		西南日本[8]（近代）	
		N	M	N	M	S.D	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
下顎骨		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
65	下顎頭間幅	1	137	7	130.4	3.7	18	135.3	49	132.9	35	131.2	3	127.3	30	131.2	18	122.7	85	123.7
66	下顎角幅	1	107	5	104.4	12.6	13	111.5	33	108.4	42	106.8	–	–	46	103.1	19	102.8	86	97.1
68	下顎長	1	72.5	–	–	–	16	75	44	75.1	42	76	3	75.3	46	75.9	19	73.3	86	65.2
68(1)	下顎投影最大長	–	–	14	109.5	5.7	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
69	オトガイ高	1	32	21	33.1	2.9	32	35.6	89	35.7	47	33.3	3	30.7	31	32.3	16	32.1	85	35.6
70	下顎枝高（左）	1	66	17	56.6	6.8	18	64.1	26	64.5	45	62.2	3	61	38	62	15	59.9	87	59.6
71	下顎枝幅（左）	1	34	18	36.6	2.9	26	36.5	46	37.4	54	36.4	3	34.3	53	33.8	19	35.9	87	34.7
71/70	下顎枝示数	–	51.5	16	61.0	17.6	18	56.7	25	59.7	44	58.5	3	56.4	38	54.9	15	61.2	86	58.5
79	下顎枝角	–	125	–	–	–	15	121.9	51	120.8	43	123.9	3	124	45	122.7	19	121.2	86	128.3

1）九州大学医学部解剖学第２講座　2）中橋（1993）　3）中橋・永井（1989）　4）松下（1981）　5）内藤（1967）　6）清野・宮本（1926）、金高（1928）　7）中橋・永井（1985）　8）原田（1954）

表11　上肢骨計測比較（位登人骨：両側、R：右側、L：左側、比較群上肢左側・男性）

		位登古墳（古墳）		北部九州[1]（古墳）			南部九州[2]（古墳）			北部九州・山口[3]（弥生）			津雲[4]（縄文）		九州[5]（現代）	
		R	L	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	N	M
上腕骨																
1	最大長	–	–	15	298.9	17.99	4	283.5	14.22	59	306.3	12.04	36	284.3	106	295.3
2	全長	–	–	12	291.8	27.17	3	280.3	17.52	47	301.2	11.70	35	280.6	106	290.6
5	中央最大径	–	23.3	33	23.2	2.13	20	22.3	1.52	210	23.4	1.78	50	24.1	106	21.9
6	中央最小径	–	19.5	33	17.5	1.69	20	17.1	1.34	210	17.7	1.35	50	17.8	106	16.9
7	骨体最小周	–	62	47	64.0	4.50	20	61.2	3.07	201	64.2	3.91	50	64	106	61.8
7 a	中央周	–	–	34	67.4	5.97	19	63.6	6.79	201	68.0	4.28	50	69.3	106	63.7
6/5	骨体断面示数	–	83.7	32	75.6	4.73	20	76.8	4.92	210	75.8	4.98	50	73.9	106	79.1
7/1	長厚示数	–	–	11	21.3	0.84	3	22.1	0.84	56	20.9	1.32	36	22.7	106	20.9
橈骨																
1	最大長	–	–	12	226.6	8.29	7	224.6	10.43	71	238.1	11.53	27	230.6	64	219.9
2	機能長	–	–	11	216.4	3.52	7	210.6	7.61	60	223.8	11.07	28	217.4	64	208.2
3	最小周	41	–	30	41.6	3.61	29	41.0	2.30	175	42.7	2.46	38	44	63	40.1
4	骨体横径	16.7	–	35	17.1	1.37	33	16.1	1.22	179	17.1	1.35	42	17.1	63	16.0
5	骨体矢状径	11.5	–	35	12.2	0.92	30	11.9	0.87	181	12.3	0.93	42	12	63	11.7
3/2	長厚示数	–	–	10	19.7	1.49	6	18.6	1.53	58	19.2	1.21	27	20.5	61	20.4
5/4	骨体断面示数	68.9	–	35	71.5	5.26	29	74.3	6.04	174	72.0	5.39	42	70.2	60	71.4
尺骨																
1	最大長	–	–	5	250.2	12.09	–	–	–	47	258.0	11.40	19	249.1	62	236.2
2	機能長	–	–	7	226.0	9.61	8	210.5	7.76	49	227.2	12.26	25	219.7	64	209.2
3	最小周	37	–	17	35.8	2.43	19	35.1	2.51	131	37.5	3.01	34	37.7	65	35.8
11	矢状径	–	–	28	13.4	1.26	19	13.2	0.89	205	13.3	1.11	50	14.3	63	12.8
12	横径	–	–	28	17.1	1.65	19	16.2	1.24	204	17.3	1.50	50	16.3	64	16.5
3/2	長厚示数	–	–	6	16.7	1.22	8	16.5	1.12	49	16.9	1.67	25	17.4	63	17.0
11/12	骨体断面示数	–	–	27	78.1	8.29	18	81.1	6.22	202	77.2	8.43	50	88.5	63	74.9

1）高橋（2021）　2）清野・平井（1928）　4）専頭（1957）、溝口（1957）

表12　下肢骨計測比較（位登人骨：両側、R：右側、L：左側、比較群上肢左側・男性）

		位登古墳（古墳）		北部九州1）（古墳）			南部九州1）（古墳）			北部九州・山口1）（弥生）			津雲3）（縄文）		九州4）（現代）	
		R	L	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	N	M
大腿骨																
1	最大長	−	−	37	429.0	21.53	18	414.7	18.01	135	434.9	16.41	19	414.1	59	406.5
2	自然位長	−	−	21	426.7	24.05	8	419.5	11.95	53	431.7	19.10	19	411.0	59	403.2
6	中央矢状径	(27.1)	(27.4)	94	28.8	2.25	59	27.7	2.12	359	29.8	2.34	47	29.0	59	26.5
7	中央横径	(28.7)	(29.1)	95	27.4	1.93	60	25.1	1.76	360	27.7	1.96	47	26.0	59	25.6
8	中央周	(89)	(91)	88	88.4	5.25	57	83.4	4.56	358	90.8	5.17	47	87.4	59	82.4
9	骨体上横径	−	−	75	32.1	2.15	31	29.9	1.50	260	32.6	2.18	43	30.7	59	29.4
10	骨体上矢状径	−	−	75	25.6	1.96	28	24.2	1.58	260	26.3	2.06	43	25.5	59	24.3
8/2	長厚示数	−	−	21	20.5	0.75	7	20.2	1.27	52	21.1	1.32	19	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	(94.5)	(94.2)	94	105.3	9.02	57	110.9	9.87	359	108.0	9.83	47	111.8	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	−	−	74	79.7	7.31	28	80.9	6.78	252	80.8	7.15	43	83.1	58	82.8
脛骨																
1	全長	−	−	16	334.9	17.82	4	322.5	17.92	63	348.9	18.07	20	340.0	61	320.3
1a	最大長	−	−	20	340.1	20.97	7	333.7	16.61	95	353.3	17.50	22	343.6	60	326.9
8	中央最大径	−	−	40	29.8	2.38	30	29.2	1.63	210	31.6	2.27	46	32.3	61	27.8
8a	栄養孔最大径	−	33.5	63	34.7	2.76	43	33.2	2.55	296	36.3	2.75	38	35.2	60	30.6
9	中央横径	−	−	41	21.8	1.53	32	20.8	1.49	207	22.6	1.74	46	20.4	61	21.1
9a	栄養孔位置横径	−	21.7	63	24.2	1.97	43	22.4	1.66	302	25.1	2.20	38	22.2	61	23.7
10	骨体周	−	−	39	82.0	5.64	30	79.1	3.92	201	85.4	4.79	45	84.5	62	78.4
10a	栄養孔位周	−	87	63	94.3	6.68	43	88.1	5.31	290	96.3	5.97	38	92.8	61	88.9
10b	最小周	−	−	59	75.1	4.41	25	73.0	3.09	261	77.2	4.44	41	76.7	60	71.3
9/8	中央断面示数	−	−	40	73.5	6.34	30	71.6	4.43	204	71.9	5.88	46	63.3	61	76.1
9a/8a	栄養孔位断面示数	−	64.7	63	69.9	5.77	42	67.8	5.61	290	69.4	5.94	38	63.0	60	77.5
10b/1	長厚示数	−	−	16	22.5	1.12	3	21.6	0.67	62	22.2	1.35	20	22.9	60	22.4
腓骨																
1	全長	−	−	2	332.5	5.50	−	−	−	25	342.5	15.21	13	329.5	58	322.9
2	中央最大径	−	−	9	16.6	2.01	1	15.0	0.00	118	16.8	1.61	44	17.8	59	14.5
3	中央最小径	−	−	8	11.4	0.86	1	12.0	0.00	120	11.5	1.31	44	12.2	59	10.0
4	中央周	−	−	9	46.2	3.97	1	46.0	0.00	119	46.5	4.37	44	51.3	59	41.5
4a	最小周	−	−	12	37.0	5.05	1	29.0	0.00	71	39.2	3.64	29	39.2	59	35.6
3/2	中央断面示数	−	−	8	67.6	8.83	1	80.0	0.00	117	68.5	7.47	44	68.6	59	69.5
4a/1	長厚示数	−	−	2	11.7	0.71	−	−	−	25	11.1	2.58	13	12.0	58	11.1

1）高橋（2021）　2）清野・平井（1928）　3）阿部（1955）、鐘鳴（1955）

⑥　調査の成果

今回の調査では、部分的ではあったが、昭和９年の報文以降で初めて位登古墳の主体部が明らかとなった。略方形の墓坑の対角線上に箱式石棺を設置する形態は、弥生時代の豊前地方に多い特徴であるため、位登古墳は在地色の強い伝統的な墓制であるといえる。しかしながら、主体部である箱式石棺は、大型石材の調達や赤色顔料の塗布や粘土の目張りなど、丁重な埋葬を行っており、前方後円墳を採用した首長墓にふさわしいものである。人骨の検討から被葬者は熟年男性と考えられるが、彼は在地色の強い首長であるという、田川地域の地域色もうかがわれた。

一方で、残された課題も少なくない。位登古墳は測量図の墳形から4世紀後半から末頃の時期が考えられるが、今回出土した管玉は、古墳時代のものに形状がそぐわない感がある。また、墳丘の構造や複人数の埋葬など、詳細が完全に把握できていないため、今後は、出土遺物を含めた総合的な調査を行って、田川地域における位登古墳の位置づけをより詳細に検討していきたい。

表13　遺物観察表

確認調査・工事立会

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
	第41図－1	図版1－1	弥生土器	壺		5.1		7.5YR 5/6 明褐色 7.5YR 5/2 灰褐色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ハケ	
	第41図－2	図版1－2	弥生土器	壺		9.7		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ナデ	
	第41図－3	図版1－3	弥生土器	鉢		3.8		7.5YR 8/4 浅黄橙色 7.5YR 8/6 浅黄橙色	φ1～3mの白色粒子、長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第41図－4	図版1－4	弥生土器	甕		6.4	8.0	7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～5mの長石、石英を含む/良	縦ハケ	
	第41図－5	図版1－5	弥生土器	甕	(19.0)	8.5		7.5YR 7/6 黄橙色 7.5YR 6/6 橙色	1～5mの長石、石英を含む/良	マメツ	
	第41図－6		陶器	筒状容器	38.4	40.4	35.8	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～5mの長石、石英、雲母を含む/良	回転・横ヘラケズリ	井戸側
	第41図－7		陶器	筒状容器	36.8	40.5	35.4	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～5mの長石、石英、雲母を含む/良	回転・横ヘラケズリ	井戸側

弓削田原Ｂ遺跡２次

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SC1	第44図－1	図版2－③	須恵器	坏蓋	(15.8)	4.4		N5/1 灰色 N5/1 灰色	1～3mの白色砂粒を含む/良	回転ナデ	
	第44図－2	図版2－③	須恵器	坏蓋	(17.6)	(3.3)		N4/1 灰色 N5/1 灰色	1～2mの白色砂粒を含む/良	回転ケズリ、回転ナデ	内面にヘラ記号
	第44図－3	図版2－③	須恵器	坏蓋	(17.6)	(3.3)		N4/1 灰色 N4/1 灰色	1mの白色砂粒を含む/良	回転ナデ	
	第44図－4	図版2－③	須恵器	坏身	(16.8～19.0)	(4.6)		2.5YR5/3 にぶい黄色 2.5YR5/3 にぶい黄色	1～2mの白色砂粒を含む/良	回転ナデ	
	第44図－5	図版2－③	土師器					5YR5/8 明黄褐色 5YR5/8 明黄褐色	1～5mの長石・石英を含む/良		検出時

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）最大長	最大幅	最大厚	重5ｇ	備考
第44図－6	図版2－③	石器	砥石	11.0	6.6		456.5	砂岩製、一部欠損
第44図－7	図版2－③	石器	砥石	10.8	8.0		511.0	砂岩製、一部欠損

	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
表採	第44図－8	図版2－③	須恵器					N3/ 暗灰色 N3/ 暗灰色	1～3mの白色砂粒を含む/良	回転ナデ	口縁部片、自然釉
	第44図－9		土師器	甕				5YR2/1 黒褐色 5YR6/8 橙色	1～3mの長石・石英を含む/良		

上の原遺跡群３次

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SC1	第47図－1	図版2－⑥	土師器	壺				5YR3/1 黒褐色 7.5YR2/1 黒色	1～3mの長石・石英を含む/良	ハケメ	
	第47図－2	図版2－⑥	土師器	碗	(20.4)			5YR6/8 橙色 5YR6/8 橙色	1～3mの長石・石英を含む/良	ミガキ	
	第47図－3	図版2－⑥	土師器	器台		(6.4)		5YR5/8 明赤茶褐色 5YR5/8 明赤茶褐色	1～3mの長石・石英を含む/良	ナデ、ケズリ	
SK1	第47図－4	図版2－⑥	弥生土器	壺			8.8	7.5YR5/8 明褐色 7.5YR5/8 明褐色	1～5mの長石・石英を含む/良	ナデ	
	第47図－5	図版2－⑥	弥生土器	甕			8.2	7.5YR6/8 橙色 7.5YR3/1 黒褐色	1～3mの長石・石英を含む/良	ハケメ	
	第47図－6	図版2－⑥	弥生土器	壺	(16.0)			7.5YR4/1 褐灰色 7.5YR7/8 黄橙色	1～3mの長石・石英を含む/良	ハケメ、羽状文	
	第47図－7	図版2－⑥	弥生土器	壺	(21.0)			7.5YR7/8 黄橙色 7.5YR7/8 黄橙色	1～3mの長石・石英を含む/良	ハケメ	
SK2	第47図－8	図版2－⑥	弥生土器	甕				10YR6/6 明黄橙色 10YR6/6 明黄橙色	1～4mの長石・石英・雲母を含む/良	ハケメ	
SK4	第49図－1	図版2－⑧	弥生土器	甕	(24.0)			褐色 明赤褐色	0.5～1mの前後の黒色砂粒をやや含む/良	ハケメ	口縁部L6残
	第49図－2	図版2－⑧	弥生土器	甕	(29.4)			褐色～赤褐色 褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－3	図版2－⑧	弥生土器	甕	(30.8)			赤褐色 赤褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	口縁部L6残
	第49図－4	図版2－⑧	弥生土器	甕		32.0		7.5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色	1～3mの長石・石英を含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－5	図版2－⑧	弥生土器	甕			6.8	7.5YR2/1 黒色 7.5YR6/8 橙色	1～3mの長石・石英・雲母を含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－6	図版2－⑧	弥生土器	甕				5YR3/3 暗赤褐色 7.5YR6/8 橙色	1～3mの長石・石英・雲母を含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－7	図版2－⑧	弥生土器	甕				2.5YR3/3 暗赤褐色 2.5YR3/2 暗赤褐色	1～3mの長石・石英・赤色砂粒を含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－8	図版2－⑧	弥生土器	甕			6.8	茶褐色 暗褐色	1～2mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底部片
	第49図－9	図版2－⑧	弥生土器	甕		32.0	6.7	茶褐色 暗褐色	3～4mの前後の白色砂粒をやや密に含む/良	ハケメ	底部片
	第49図－10		弥生土器	甕			(6.8)	明赤褐色 暗褐色	0.5mの前後の白色砂粒を少量含む/良	ハケメ	底部片
	第49図－11	図版2－⑧	弥生土器	甕			(6.2)	明褐色 明褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底部片、スス付着
	第49図－12	図版2－⑧	弥生土器	甕			9.0	暗褐色 褐色	1～7mの前後の白色砂粒をやや含む/良		底部片
	第49図－13	図版2－⑧	弥生土器	甕			(7.0)	赤褐色 暗褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底部L/2残
	第49図－14	図版2－⑧	弥生土器	甕			7.2	赤褐色 褐色	4～5mの前後の白色砂粒を密に含む/良		底部片、修底部か
	第49図－15	図版2－⑧	弥生土器	壺	(31.6)			5YR4/6 赤褐色 5YR5/6 明赤褐色	1～3mの長石・石英・雲母を含む/良	丹塗	口縁部片
	第49図－16	図版2－⑧	弥生土器	壺	(29.4)			黄褐色 黄褐色	1～2mの前後の白色砂粒を含む/良		口縁部L4残

出土遺構	陣図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値） 口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SK4	第49図－17		弥生土器	壺	(28.8)			7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色	1～3mの長石・石英・雲母を含む/良	ハケメ	口縁部片
	第49図－18	図版2－⑥	弥生土器	壺				10YR3/2 黒褐色 10YR3/2 黒褐色	1mの長石・石英を含む/良		頸部片
	第49図－19	図版2－⑦	弥生土器	壺			(6.0)	黒褐色 暗茶褐色	1mの前後の白色砂粒を含む/良	ハケメ	底部1/2残
	第49図－20	図版2－⑧	弥生土器	壺			(6.2)	暗褐色 暗褐色	0.5～1mの前後の白色砂粒をやや含む/良		底部2/3残
	第49図－21		弥生土器	壺		10.0		暗褐色 茶褐色	1～2mの前後の白色砂粒を含む/良		底部片
	第49図－22	図版2－⑨	弥生土器	壺		(6.8)		明茶褐色 茶褐色	1～2mの前後の白色砂粒を含む/良		底部1/2残
	第49図－23	図版2－⑩	弥生土器	壺		6.0		赤～褐色 明赤褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底～胴部、ススが付着
SC4	第49図－24		弥生土器	壺				10YR5/6 黄褐色 10YR5/6 黄褐色	1～2mの長石・石英を含む/良		口縁部片
SK7	第50図－1	図版2－⑪	弥生土器	壺	(27.2)			褐色 褐色	1mの前後の黒色砂粒をやや含む/良	ハケメ	口縁部片
	第50図－2	図版2－⑫	弥生土器	壺	(33.2)			明褐色 明褐色	1mの前後の黒色砂粒を少量含む/良	ハケメ	口縁部1/4残
	第50図－3	図版2－⑬	弥生土器	壺	(31.2)			暗赤褐色 暗赤褐色	1mの前後の白色砂粒を少量含む/良		口縁部1/8残、大ス付着
	第50図－4	図版2－⑭	弥生土器	壺	(27.2)			明褐色～赤褐色 明褐色～赤褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/やや甘い		口縁～胴部1/4残
	第50図－5	図版2－⑮	弥生土器	壺	(23.6)			明茶褐色 褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/やや甘い	ハケメ	口縁部1/6残
	第50図－6	図版2－⑯	弥生土器	壺				明褐色 明褐色	0.5～1mの前後の黒色砂粒をやや密に含む/良	ハケメ	胴部片
	第50図－7	図版2－⑰	弥生土器	壺？	(15.8)			暗茶褐色 暗茶褐色	0.5～1mの前後の白色砂粒をやや含む/良		口縁部1/8残
	第50図－8	図版2－⑱	弥生土器	壺？				暗茶褐色 暗褐色	1mの前後の白色砂粒を少量含む/良	ミガキ	口縁部片
	第50図－9	図版2－⑲	弥生土器	壺				黒褐色 暗茶褐色	0.5～1mの前後の白色砂粒をやや含む/良		胴部片
	第50図－10	図版2－⑳	弥生土器	壺			6.9	明茶褐色 暗茶褐色	0.5～1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底部片
	第50図－11	図版2－㉑	弥生土器	壺			6.9	茶褐色 茶褐色	2～3mの前後の白色砂粒を含む/良		底部片
	第50図－12	図版2－㉒	弥生土器	壺			5.8	明褐色 明褐色	1～2mの前後の白色砂粒をやや含む/良		底部片
	第50図－13	図版2－㉓	弥生土器	壺			6.3	明黄褐色 黄褐色	2～3mの前後の白色砂粒をやや含む/やや甘い		底部片
	第50図－14	図版2－㉔	弥生土器	壺			8.1	茶褐色 暗茶褐色	1mの前後の白色砂粒をやや含む/良	ハケメ	底部片
	第50図－15	図版2－㉕	弥生土器	壺			7.4	明赤褐色 明赤褐色	1～2mの前後の白・黒色砂粒をやや含む/やや甘い		底部片
	第50図－16	図版2－㉖	弥生土器	壺			8.4	明黄褐色 明黄褐色	1～2mの前後の茶色砂粒をやや含む/良		底部片

陣図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値） 最大長	最大幅	最大厚	重さ g	備考
第50図－17	図版2－㉗	石器	砥石	(9.8)	(8.1)	4.0	424.0	砂岩製、一部欠損
第50図－18	図版2－㉘	石器	砥石	(10.9)	(10.5)	10.5	470.5	砂岩製、一部欠損
第50図－19	図版2－㉙	石器	石支	(6.7)	(4.7)	1.6	46.9	凝灰岩製、一部欠損

陣図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値） 口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
ピット	第50図－20		弥生土器	壺			7.5YR4/6 赤褐色 7.5YR7/6 橙色	1～3mの長石・石英を含む/良		口縁部片
表採	第50図－21		弥生土器	壺			暗茶褐色 暗褐色	1～2mの前後の白色砂粒をやや含む/やや甘い		口縁部片

猫迫１号墳２次

出土遺構	陣図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値） 口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
墳丘土東南	第56図－1	図版3－㉑	埴輪	円筒埴輪	2.4			7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良		
墳丘土南	第56図－2	図版3－㉒	埴輪	円筒埴輪		5.9		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ、斜ハケ	
墳丘土南	第56図－3	図版3－㉓	埴輪	円筒埴輪		3.2		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	朱付着
南トレンチ	第56図－4	図版3－㉔	埴輪	円筒埴輪		3.8		5YR 4/8 赤褐色 5YR 4/8 赤褐色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
墳丘土採取	第56図－5	図版3－㉕	埴輪	円筒埴輪		7.3		7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良		
墳丘土東南	第56図－6	図版3－㉖	埴輪	円筒埴輪		4.0		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
墳丘土東南	第56図－7	図版3－㉗	埴輪	円筒埴輪		2.6		7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/6 橙色	φ2～3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
墳丘土南	第56図－8	図版3－㉘	埴輪	円筒埴輪		7.8	胴径 (11.6)	7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 5/2 灰褐色	φ2mの長石、石英を含む/良	ナデ	
石室台側	第56図－9	図版3－㉙	埴輪	円筒埴輪		5.4		5YR 4/8 赤褐色 5YR 5/8 明赤褐色	φ1～4mの長石、石英を含む/良	ナデ、ハケ	
石室台側	第56図－10	図版3－㉚	埴輪	円筒埴輪		6.3		7.5YR 5/6 明赤褐色 7.5YR 5/6 明赤褐色	φ1～3mの長石、石英、角閃石を含む/良	ハケ	
墳丘土東南	第56図－11	図版3－㉛	埴輪	形象埴輪		3.3		7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～4mの長石、石英を含む/良	ナデ	
北トレンチ	第56図－12	図版3－㉜	須恵器	壺		4.5		5G 5/1 緑灰色 N 6/ 灰色	φ1mの白色粒子を含む/良	平行タタキ、ナデ	
東トレンチ	第56図－13	図版3－㉝	須恵器	壺		5.2		N 3/ 暗灰色 N 4/ 灰色	φ1～3mの粒子を含む/良	ナデ	
北トレンチ	第56図－14	図版3－㉞	須恵器	壺		9.9		N 3/ 暗灰色 N 4/ 灰色	φ1～3mの粒子を含む/良		
墳丘土東南	第56図－15	図版3－㉟	須恵器	壺		7.0		5G 5/1 緑灰色 N 6/ 灰色	φ1mの白色粒子を含む/良		12と同一個体か
石室内 カクラン	第56図－16	図版3－㊱	須恵器	壺		7.6		N 3/ 暗灰色 N 6/ 灰色	φ1mの粒子を含む/良		
玄門脇側埋	第56図－17	図版3－㊲	土師器	高坏		4.6		7.5YR 7/8 黄橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	マメツ	

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
石室右側	第56図－18		土師器	高坏		6.7		2.5YR 5/8 2.5YR 5/8	明赤褐色 明赤褐色	φ1mm長石、石英を含む/良	ナデ
墳丘上東南	第56図－19		土師器	甕		7.0		7.5YR 6/6 7.5YR 8/6	橙色 浅黄橙色	φ1～5mm長石、石英を含む/良	ナデ
墳丘上東南	第56図－19		土師器	甕		7.0		7.5YR 6/6 7.5YR 8/6	橙色 浅黄橙色	φ1～5mm長石、石英を含む/良	ナデ
南トレンチ	第56図－20	図版3－②2	縄文土器			2.4		10YR 3/2 10YR 6/2	黒褐色 灰黄色	φ1～3mm長石、石英を含む/良	条痕

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）最大長	最大幅	最大厚	重さ g	備考
第56図－21	図版3－②2	石器	剥片	5.3	4.2	1.3	33.4	サヌカイト製
第56図－22	図版3－②2	石器	剥片	4.5	3.8	1.2	17.5	メノウ製

墳丘上南東

墳丘上南

上の原遺跡群４次

出土遺構	掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SC5	第59図－7		弥生土器	甕		4.2	(6.2)	7.5YR 7/6 7.5YR 5/1	橙色 褐灰色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	マメツ
	第59図－8		弥生土器	甕		1.9		7.5YR 7/3 7.5YR 8/2	にぶい橙色 灰白色	φ1mm長石、石英を含む/良	マメツ

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）最大長	最大幅	最大厚	重さ g	備考
SK1　3層	第61図－1	図版4－⑤	石器	石刃	6.6	3.4	0.8	12.8	凝灰岩
4層	第61図－2	図版4－⑤	石器	石刃	2.3	2.2	0.6	1.8	凝灰岩
4層	第61図－3	図版4－⑤	石器	石刃	3.5	2.8	0.5	5.9	砂岩
4層	第61図－4	図版4－⑤	石器	石刃	9.4	4.0	1.0	40.3	凝灰岩

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
1層	第61図－5	図版4－⑦	弥生土器	甕		5.7	8.6	7.5YR 8/3 7.5YR 6/3	浅黄橙色 灰褐色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ
SK2	第61図－6	図版4－⑦	弥生土器	甕		11		5YR 6/6 5YR 6/6	橙色 橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ
	第61図－7	図版4－⑦	弥生土器	甕		6.8	6.1	2.5YR 7/4 10YR 8/4	淡赤橙色 浅黄橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ
	第61図－8	図版4－⑦	弥生土器	甕		7.6	7.2	10YR 3/1 2.5Y 2/1	黒褐色 黒色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ
SK3　1層	第61図－9	図版5－②	弥生土器	壺		(14.0)	6.3	5YR 5/8 5YR 5/8	明赤褐色 明赤褐色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、ハケ
上層	第61図－10	図版5－②	弥生土器	壺		(15.4)	4.4	7.5YR 7/6 7.5YR 8/4	橙色 浅黄橙色	φ1mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ
4層	第61図－11	図版5－②	弥生土器	壺		(11.4)	5.3	10YR 7/3 10YR 7/4	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	φ1～3mm長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	ナデ
4層	第61図－12		弥生土器	壺		5.0	(8.0)	7.5YR 6/3 7.5YR 6/4	にぶい褐色 にぶい橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ
	第61図－13		弥生土器	壺		3.6	4.5	7.5YR 6/6 7.5YR 7/4	橙色 にぶい橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、ハケ
1層	第61図－14		弥生土器	壺		4.6	4.6	5YR 6/8 5YR 6/8	橙色 橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、黒斑
3層	第61図－15		弥生土器	壺		1.8	(2.4)	7.5YR 3/6 7.5YR 6/2	黒褐色 灰褐色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	指頭圧痕
3層	第61図－16	図版5－②	弥生土器	甕	(41.0)	7.4		7.5YR 5/3 7.5YR 5/2	にぶい褐色 灰褐色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ
2層	第61図－17	図版5－②	弥生土器	甕	(15.0)	10.2		7.5YR 7/8 7.5YR 8/8	黄橙色 黄橙色	φ1～3mm長石、石英、雲母を含む/良	横・縦ハケ
3層	第61図－18	図版5－②	弥生土器	甕	(19.2)	9.5		7.5YR 7/6 7.5YR 7/8	黄橙色 黄橙色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ
2層	第61図－19	図版5－②	弥生土器	甕	(16.0)	13.3		7.5YR 7/4 7.5YR 6/2	にぶい橙色 灰褐色	φ1～3mm長石、石英を含む/良	縦ハケ、マメツ
3層	第61図－20	図版5－②	弥生土器	甕		5.1		7.5YR 5/4 7.5YR 6/8	にぶい褐色 橙色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ
1層	第61図－21	図版5－②	弥生土器	甕		8.2	(6.0)	7.5YR 6/4 7.5YR 4/1	にぶい橙色 赤灰色	φ1～3mm長石、石英を含む/良	ナデ
3層	第61図－22		弥生土器	甕		7.1	(5.2)	7.5YR 6/6 7.5YR 6/1	橙色 褐灰色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ
4層	第61図－23		弥生土器	甕		5.9	(6.2)	7.5YR 5/2 7.5YR 7/2	灰褐色 明褐色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ
4層	第61図－24		弥生土器	鉢		(8.0)	4.6	7.5YR 4/1 7.5YR 4/1	褐灰色 褐灰色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ
2層	第61図－25	図版5－③	弥生土器	高坏		14.2		7.5YR 8/8 7.5YR 8/8	黄橙色 橙色	φ1～2mm長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ後ナデ
2層	第61図－26	図版5－③	弥生土器	高坏		12.7	(11.4)	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	にぶい橙色 にぶい橙色	φ1～3mm長石、石英を含む/良	マメツ
2層	第61図－27		弥生土器	高坏		7.8		7.5YR 6/6 7.5YR 4/1	にぶい橙色 褐灰色	φ1～3mm長石、石英、雲母を含む/良	ナデ
2層	第61図－28		弥生土器	高坏		3.0	(12.0)	7.5YR 6/4 7.5YR 7/8	にぶい橙色 黄橙色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ
上層	第61図－29	図版5－③	弥生土器	器台	8.1	13.1	7.8	7.5YR 7/6 7.5YR 8/4	橙色 浅黄橙色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ
3層	第61図－30	図版5－③	弥生土器	器台	8.0	13.5	8.2	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	にぶい橙色 にぶい橙色	φ1～2mm長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
3層	第61図－31	図版5－②	石器	砥石	8.4	3.9	3.3	145.5	砂岩製

掲図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 内： 内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SK8　13層	第63図－1	図版5－⑤	弥生土器	壺		2.4		7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	橙色 橙色	φ1～3mmの長石、石英を含む/良	ナデ
SK13	第63図－2	図版5－⑤	弥生土器	壺		2.6		7.5YR 4/1 7.5YR 4/1	褐灰色 褐灰色	φ1～6mmの長石、石英を含む/良	ナデ
SK13	第63図－3	図版5－⑤	弥生土器	壺		3.7		7.5YR 6/3 7.5YR 6/3	にぶい褐色 にぶい褐色	φ1～3mmの長石、石英を含む/良	ナデ

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
北側平敷	第63図-4	図版5-㉓	弥生土器	壷	3.4	(9.8)		2.5YR 1/3 暗赤灰色 2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
13層	第63図-5	図版5-㉓	弥生土器	壷	6.1	9.7		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1~4mの長石、石英を含む/良	ナデ	
北側平敷	第63図-6	図版5-㉓	弥生土器	甕	(25.2)	14.9		7.5YR 7/3 にぶい橙色 7.5YR 8/2 灰白色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
13層	第63図-7	図版5-㉓	弥生土器	甕	11.8			7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
北側平敷	第63図-8	図版5-㉓	弥生土器	甕	5.3			7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	横ハケ	
北側平敷	第63図-9	図版5-㉓	弥生土器	甕	7.8			7.5YR 3/1 黒褐色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	縦ハケ後ミガキ、指頭圧痕 φ1~2mの長石、石英を含む/良		
北側平敷	第63図-10	図版5-㉓	弥生土器	甕	6.5	7.8		7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 8/2 灰白色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ、ナデ	
13層	第63図-11	図版5-㉓	弥生土器	甕	6.6	5.8		7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/1 黒褐色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ、ナデ	
13層	第63図-12		弥生土器	甕	7.4	6.0		5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 5/2 褐灰色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	縦ハケ、ナデ	
13層	第63図-13		弥生土器	甕	5.0	6.0		5YR 6/4 にぶい橙色 5YR 6/6 橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	縦ハケ	
北側平敷	第63図-14	図版5-㉓	弥生土器	甕	10.0	7.3		7.5YR 6/2 褐灰色 7.5YR 6/3 にぶい褐色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	縦ハケ、ナデ	
北側平敷	第63図-15		弥生土器	甕	10.3	6.6		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ハケ牛ナデ	
北側平敷	第63図-16		弥生土器	甕	11.5	6.4		7.5YR 6/2 灰褐色 2.5YR 6/6 橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
北側平敷	第63図-17		弥生土器	甕	9.2	6.2		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ、ミガキ	
北側平敷	第63図-18	図版5-㉓	弥生土器	甕	9.0	7.9		5YR 6/6 橙色 5YR 4/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
SK10 1層	第64図-1	図版5-㉓	弥生土器	壺	(10.0)	6.9		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1~2mの長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、ミガキ	
2層	第64図-2	図版5-㉓	弥生土器	壺	(24.4)	5.2		7.5YR 6/4 にぶい褐色 7.5YR 6/6 橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
1層	第64図-3	図版5-㉓	弥生土器	壺	(3.4)	6.8		3.5YR 6/4 にぶい橙色 2.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
1層	第64図-4	図版5-㉓	弥生土器	壺		9.5		7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ミガキ、ナデ	
1層	第64図-5	図版5-㉓	弥生土器	壺	7.2	9.8		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 5/2 灰褐色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-6		弥生土器	壺	5.8	(7.2)		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/8 橙色	φ1~3mの長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	マメツ	
1層	第64図-7	図版5-㉓	弥生土器	壺	7.9	(10.0)		7.5YR 8/3 浅黄橙色 7.5YR 8/6 浅黄橙色	φ1~3mの長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	マメツ	
2層	第64図-8		弥生土器	壺	6.6	(8.2)		7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ、ミガキ	
1・2層	第64図-9	図版5-㉓	弥生土器	壺	5.0	(10.4)		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	マメツ、工具痕	
2層	第64図-10	図版5-㉓	弥生土器	壺	(20.8)	14.8		7.5YR 8/6 浅黄橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	マメツ	
2層	第64図-11	図版5-㉓	弥生土器	壺	7.9			7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
1層	第64図-12	図版5-㉓	弥生土器	壺	9.0			7.5Y 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-13	図版5-㉓	弥生土器	壺	6.4			5YR 6/8 橙色 5YR 6/8 橙色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
1層	第64図-14	図版5-㉓	弥生土器	壺	5.6			7.5YR 7/3 にぶい橙色 7.5YR 7/3 にぶい橙色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	マメツ	
1層	第64図-15		弥生土器	壺	6.8	(6.2)		7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/2 灰褐色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-16		弥生土器	壺	7.7	5.6		7.5YR 5/4 にぶい褐色 7.5YR 2/1 黒色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-17		弥生土器	壺	10.2	9.4		7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-18	図版5-㉓	弥生土器	鉢	(23.0)	10.1	(5.8)	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/6 橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
2層	第64図-19	図版5-㉓	弥生土器	鉢	(15.4)	9.2		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 8/4 浅黄橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ナデ、器面ハケリ	
2層	第64図-20	図版5-㉓	弥生土器	高坏		8.5		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	マメツ	
1層	第64図-21	図版5-㉓	弥生土器	高坏		6.0		7.5YR 6/4 にぶい橙色 5YR 4/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
第64図-22		弥生土器	壺	8.8	4.4		7.5YR 7/3 にぶい橙色 7.5YR 8/6 浅黄橙色	φ1~3mの長石、石英を含む/良	ナデ、マメツ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第64図-23	図版5-㉑	石器	石包丁	6.5	5.0	1.1	28.4	片岩製
第64図-24	図版5-㉑	石器	石鏃	10.9	6.2	1.8	115.8	蛇紋岩製
第64図-25	図版5-㉑	石器	砥石	15.5	13.3	5.0	169.3	砂岩製

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SK11	第66図-21	図版5-㉓	弥生土器	壺		4.5		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1~4mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、ミガキ	
	第66図-22	図版5-㉓	弥生土器	壺		4.5	6.6	7.5YR 5/4 明褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1~3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図-23	図版5-㉓	弥生土器	甕		4.2		7.5YR 7/6 にぶい橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	工具ナデ	
	第66図-24	図版5-㉓	弥生土器	甕		6.2	6.4	7.5YR 6/1 褐灰色 7.5YR 6/1 褐灰色	φ1~2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第66図-25	図版5-㉑	石器	石刷	6.9	1.5	1.1	27.6	赤紫色泥岩製

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SK12	第66図－1	図版6－①	弥生土器	壺		4.5	(7.4)	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 8/6 浅黄橙色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－2	図版6－①	弥生土器	甕	(12.6)	8.8		7.5YR 7/6 黄橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良	マメツ	
4層	第66図－3	図版6－①	弥生土器	甕		8.2		7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1～3mの長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	ナデ	
4層	第66図－4	図版6－①	弥生土器	甕		4.8		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－5	図版6－①	弥生土器	甕		3.1		7.5YR 7/8 橙色 7.5YR 7/8 橙色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－6	図版6－①	弥生土器	甕		4.7		7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 5/3 にぶい褐色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－7	図版6－①	弥生土器	甕		7.2		2.5YR 6/8 橙色 2.5YR 6/8 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
	第66図－8	図版6－①	弥生土器	甕		7.0	(10.6)	7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 6/2 灰褐色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－9	図版6－①	弥生土器	甕		7.2	5.8	2.5YR 6/8 橙色 7.5R 7/8 黄橙色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－10	図版6－①	弥生土器	甕		8.3	6.4	2.5YR 5/8 明赤褐色 7.5YR 4/2 灰褐色	φ1～2mの石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第66図－11	図版6－①	弥生土器	甕		7.7	6.4	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 5/2 灰褐色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	縦ハケ、ナデ	
	第66図－12	図版6－①	弥生土器	甕		6.9	6.4	7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 4/2 灰褐色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ、ナデ	
	第66図－13	図版6－①	弥生土器	壺		6.6	6.6	7.5YR 3/3 暗褐色 7.5YR 3/3 暗褐色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ナデ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	頂部径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
第66図－14		弥生土器	壺		2.6	(3.2)	7.5YR 4/1 褐灰色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～2mの石英、雲母を含む/良	ナデ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
第66図－15	図版6－①	弥生土器	器台		11.3	8.7	7.5YR 8/4 浅黄橙色 7.5YR 6/1 褐灰色	φ1～3mの石英、雲母を含む/良	縦ハケ、ナデ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第66図－16		石器	石包丁	7.4	5.8	0.8	44.2	赤紫色泥岩製
第66図－17		石器	磨製石斧	6.5	6.7		156.5	蛇紋岩製
第66図－18		石器	石剣	7.3	4.5	1.3	54.6	凝灰岩製
第66図－19		石器	石鍾	7.3	6.5	1.0	79.5	凝灰岩製
第66図－20		石器	砥石	14.3	10.1	2.6	580.5	珪質岩製

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径/最大径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SP7	第66図－26		弥生土器	壺		3.6		7.5YR 5/1 褐灰色 7.5YR 5/1 褐灰色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、ミガキ	
SP12	第66図－27		弥生土器	壺		9.6		7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 5/3 にぶい褐色	φ1～3mの長石、石英、雲母を含む/良	ミガキ、マメツ	
SP25	第66図－28		弥生土器	壺		7.6	(31.4)	7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 6/2 灰褐色	φ1～2mの石英、石英を含む/良	ナデ	

掃図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第66図－29		石器	石包丁	5.5	0.6		18.8	赤紫色泥岩製

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
S4	第59図－1		弥生土器	壺		2.8	(5.6)	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
	第59図－2		弥生土器	甕		13.8		5YR 5/6 明赤褐色 5YR 4/6 赤褐色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	縦ハケ	
	第59図－2		弥生土器	甕	(26.4)	5.0		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	縦ハケ	
	第59図－3		弥生土器	甕		6.5	6.6	10YR 7/4 にぶい黄橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～2mの長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ	
	第59図－4		弥生土器	甕		7.1	5.4	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	縦ハケ、マメツ	
	第59図－5		弥生土器	甕		7.9	6.5	5YR 5/8 明赤褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	縦ハケ、ナデ	
	第59図－6		弥生土器	鉢		2.8		7.5YR 8/3 浅黄橙色 7.5YR 8/3 浅黄橙色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ナデ	

番町遺跡

出土遺構	掃図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
SX2	第70図－1	図版6－⑨	弥生土器	壺		16.2		7.5YR 4/2 灰褐色 7.5YR 4/2 灰褐色	φ1～2mの長石、石英、角閃石を含む/良	ミガキ、施文	
SX2	第70図－2	図版6－⑨	弥生土器	壺		6.2	(9.4)	7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ハケ後ミガキ	
SX1	第70図－3	図版6－⑨	弥生土器	壺		4.1	(6.4)	7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ナデ	
SX1	第70図－4	図版6－⑨	弥生土器	壺		4.0	(7.2)	7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 2/1 黒色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
SX2	第70図－5	図版6－⑨	弥生土器	甕	(30.2)	8.5		7.5YR 6/3 褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ	
SX1	第70図－6	図版6－⑨	弥生土器	甕	(18.8)	11.9		7.5YR 4/2 灰褐色 7.5YR 5/2 灰褐色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ミガキ、ナデ、キザミ	
SX1	第70図－7	図版6－⑨	弥生土器	甕		3.7		5YR 5/4 にぶい赤褐色 7.5YR 5/3 にぶい褐色	φ1～3mの長石、石英を含む/良	ナデ、キザミ	
SX3	第70図－8	図版6－⑨	弥生土器	甕		6.2	(9.4)	2.5YR 4/8 赤褐色 7.5YR 3/2 黒褐色	φ1～2mの長石、石英を含む/良	ナデ	

表14　付編　遺物観察表

上の原遺跡群１次

出土遺構	挿図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
A地点P1	第73図-1	図版7-㊀	弥生土器	壺	(28.8)	24.1		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 7/3 黄橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第73図-2	図版7-㊁	弥生土器	壺		11.7		7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母、を含む/良	縦・横ハケ	
	第73図-3	図版7-㊂	弥生土器	壺		8.1	6.6	7.5YR 3/1 黒色 5YR 5/6 明開加熱	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	縦ハケ	
A地点ブ－10	第73図-4	図版7-㊀	弥生土器	鉢		4.4		7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～2mm の長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	ナデ	
	第73図-5	図版7-㊁	弥生土器	壺		10.1		2.5YR 5/2 灰赤色 7.5YR 4/1 灰褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、指頭圧痕、キザミ、縦・横ハケ	
	第73図-6	図版7-㊂	弥生土器	壺		8.7		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ、斜・横ハケ	
P3横	第73図-7		弥生土器	壺		12.3		7.5YR 4/1 褐灰色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第73図-8		弥生土器	壺		11.7		7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ	
	第73図-9		弥生土器	壺		3.9	5.8	5YR 6/3 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい黄橙色	φ1～4mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第73図-10		弥生土器	壺		6.3	7.2	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 6/2 灰褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	縦ハケ	
表土	第73図-11		弥生土器	壺		8.6	11.2	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 4/6 褐色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石、雲母を含む/良	指頭圧痕、ナデ、縦ハケ	
B地点P1	第76図-1	図版7-㊀	弥生土器	壺		10		2.5YR 4/8 赤褐色 2.5YR 4/8 赤褐色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	ハケ	
	第76図-2	図版7-㊁	弥生土器	壺	(10.7)	11.3	6	7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 2/1 黒色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第76図-3	図版7-㊂	弥生土器	壺	(10.6)	5		2.5YR 4/8 赤褐色 2.5YR 4/8 赤褐色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石、雲母を含む/良	ハケ	
	第76図-4	図版7-㊀	弥生土器	壺		5	(9.6)	7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石、雲母を含む/良	ナデ	
	第76図-5	図版7-㊁	弥生土器	壺	(27.8)	9.6		7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ハケ	
	第76図-6	図版7-㊂	弥生土器	壺		6.2		7.5Y 8/4 浅黄橙色 7.5Y 8/4 浅黄橙色	φ1～4mm の長石、石英、雲母を含む/良	マメツ	
	第76図-7	図版7-㊂	弥生土器	壺		5.0	(6.0)	7.5YR 5/2 灰褐色 2.5YR 5/8 赤褐色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第76図-8	図版7-㊂	弥生土器	壺		4.6	7.2	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第76図-9	図版7-㊂	弥生土器	壺		4.6	6.0	7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 6/3 橙色	φ1～5mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第76図-10	図版7-㊂	弥生土器	壺		6.4	8.0	7.5YR 6/3 にぶい褐色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第76図-11	図版7-㊂	弥生土器	壺		5.9	6.5	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色 2.5YR 5/4 にぶい赤褐色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
B地点P2	第76図-12	図版7-㊀	弥生土器	壺		6.0	8.8	2.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 3/1 黒褐色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ	
	第76図-13	図版7-㊁	弥生土器	壺	(22.0)	8.9		7.5YR 5/3 灰褐色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～4mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ	
	第76図-14	図版7-㊂	弥生土器	壺		5.0		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 7/2 明褐灰色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第76図-15	図版7-㊂	弥生土器	壺		8.0	7.2	5YR 6/8 橙色 5YR 6/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、赤色粒子を含む/良	マメツ	
	第76図-16	図版7-㊂	弥生土器	壺		8.9	7.8	7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第76図-17	図版7-㊂	弥生土器	壺		6.8	5.5	2.5YR 5/8 明赤褐色 7.5YR 5/4 にぶい褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
B地点P3	第77図-1	図版7-㊀	弥生土器	壺	(48.2)	6.1		7.5YR 7/8 黄橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1～2mm の長石、石英を含む/良	ナデ、ハケ	
	第77図-2	図版7-㊀	弥生土器	壺	(24.0)	6.5		7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、指頭圧痕、ハケ	
	第77図-3	図版7-㊀	弥生土器	壺		5.2		7.5YR 7/2 明褐灰色 7.5YR 6/2 灰褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	マメツ、ハケ	
	第77図-4	図版7-㊀	弥生土器	壺		6.1		7.5YR 7/8 黄橙色 7.5YR 7/8 黄橙色	φ1～2mm の長石、石英を含む/良	ナデ、キザミ	
	第77図-5	図版7-㊁	弥生土器	壺		6.1	(8.6)	7.5YR 6/6 橙色 7.5YR 4/2 灰褐色	φ1～2mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第77図-6		弥生土器	壺	33.4	26.4	6.6	7.5YR 5/4 にぶい褐色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～2mm の長石、石英を含む/良	ナデ、指頭圧痕、縦ハケ	
	第77図-7	図版7-㊂	弥生土器	壺	35.6	38.9	11.8	7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～2mm の長石、石英を含む/良	ナデ、斜・縦ハケ	
	第77図-8	図版7-㊂	弥生土器	壺	(30.4)	3.3		7.5YR 6/2 灰褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第77図-9	図版7-㊂	弥生土器	壺	(40.8)	8.6		7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 6/8 橙色	φ1～5mm の長石、石英、赤色粒子を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第77図-10	図版7-㊂	弥生土器	壺	(24.0)	10.5		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～2mm の長石、石英、φ6mm の赤色粒子を含む/良	ナデ、指頭圧痕、縦ハケ	
	第77図-11	図版7-㊂	弥生土器	壺	(15.6)	7.3		2.5YR 5/8 明赤褐色 5YR 6/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、キザミ、縦ハケ	
	第77図-12	図版7-㊂	弥生土器	壺		6.9		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、指頭圧痕、縦ハケ	
	第77図-13	図版7-㊂	弥生土器	壺		11.5		7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～5mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、キザミ、指頭圧痕、縦ハケ	
	第77図-14	図版7-㊂	弥生土器	壺		14.2	6.4	7.5YR 6/8 橙色 7.5YR 7/2 灰褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第77図-15	図版7-㊂	弥生土器	壺		13.9	(6.8)	7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 6/3 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第77図-16	図版7-㊂	弥生土器	壺		(9.0)	6.6	5YR 5/8 赤褐色 7.5YR 7/4 にぶい褐色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	

出土遺構	神図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
B地点P3	第77図－17	図版7－(7)	弥生土器	甕		2.7		7.5YR 3/3 暗褐色 7.5YR 6/3 にぶい褐色	φ1～2mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	

神図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第80図－15	図版8－(2)	石器	扁平片刃石斧	6.8	1.4	3.1	63.9	珪質頁岩製

神図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
B地点P4	第79図－1	図版7－(5)	弥生土器	鉢	(29.4)	6.1		10YR 3/2 黒褐色 10YR 2/1 黒褐色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ハケ、ミガキ	
	第79図－2	図版7－(5)	弥生土器	鉢			9.3	7.5YR 6/4 にぶい橙色 7.5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、キザミ、縦ハケ、横ミガキ	
	第79図－3		弥生土器	壺		5.7	7.6	5YR 6/6 橙色 5YR 6/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ	
	第79図－4		弥生土器	壺		10.4	8.6	2.5YR 5/4 にぶい赤褐色 7.5YR 2/1 黒色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第79図－5	図版7－(5)	弥生土器	甕		11.3		5YR 5/3 にぶい赤褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ、キザミ、縦ハケ	
	第79図－6	図版7－(5)	弥生土器	甕	(26.8)	13		7.5YR 6/3 にぶい褐色 5YR 5/2 灰褐色	φ1～3mm の長石、石英、赤色粒子を含む/良	ナデ、キザミ、縦ハケ	
	第79図－7	図版7－(5)	弥生土器	甕	(27.0)	29.3	(11.8)	7.5YR 5/3 にぶい褐色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～5mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第79図－8	図版7－(5)	弥生土器	甕		5.5		5YR 6/6 橙色 5YR 8/4 淡橙色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ	
	第79図－9	図版7－(5)	弥生土器	甕	(21.4)	14.8	7.1	5YR 4/1 褐灰色 5YR 4/1 褐灰色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	縦ハケ・ケズリ、斜・縦ミガキ	
	第79図－10	図版7－(5)	弥生土器	甕		3.0	(4.8)	10YR 8/4 浅黄橙色 10YR 8/4 浅黄橙色	φ1mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ、器面剥離	
	第79図－11	図版7－(5)	弥生土器	甕		9.4	9.4	5YR 4/1 褐灰色 5YR 3/1 黒褐色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
B地点P6	第80図－1		弥生土器	壺		5.7	(8.8)	7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 4/1 褐灰色	φ1～5mm の長石、石英を含む	ナデ、縦ハケ	
	第80図－2		弥生土器	甕		7.6		7.5YR 4/1 褐灰色 7.5YR 5/8 明赤褐色	φ1～5mm の長石、石英を含む/良	ナデ、キザミ、指頭圧痕、縦・横ハケ	
	第80図－3		弥生土器	甕		6.0		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～6mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第80図－4		弥生土器	甕		9.8		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第80図－5		弥生土器	甕		4.6	3.5	5YR 5/8 明赤褐色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	ナデ	

神図番号	種類	器種	最大長	最大幅	最大厚	色調	胎土	備考
第80図－6		焼土	5.6	4.1	4.0	5YR 5/8 明赤褐色	φ1～2mm の長石、石英、角閃石を含む	重さ 4.8g

神図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第80図－16	図版8－(2)	石器	石包丁	5.3	5.6	0.8	57.1	赤紫色泥岩製

神図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
B地点P9	第80図－7	図版8－(1)	弥生土器	壺	(27.6)	10.1		7.5YR 7/6 黄橙色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～3mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ、縦ハケ	
	第80図－8	図版8－(1)	弥生土器	壺		7.4		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～7mm の長石、石英、角閃石を含む/良	ナデ	
	第80図－9	図版8－(1)	弥生土器	壺	7.3	8.5		7.5YR 7/4 にぶい橙色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ、ナデ	
	第80図－10	図版8－(1)	弥生土器	鉢		11.6		7.5YR 6/6 にぶい褐色 7.5YR 6/6 橙色	φ1～5mm の長石、石英、雲母を含む/良	ナデ	
	第80図－11	図版8－(1)	弥生土器	甕	(20.6)	10.0		7.5YR 8/6 浅黄橙色 7.5YR 8/4 浅黄橙色	φ1～5mm の長石、石英、雲母、角閃石を含む/良	ナデ	
	第80図－12	図版8－(1)	弥生土器	甕		8.2		2.5YR 5/4 にぶい赤褐色 2.5YR 5/8 明赤褐色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	縦・斜ハケ	
	第80図－13	図版8－(1)	弥生土器	甕		5.1		7.5YR 7/6 橙色 7.5YR 7/6 橙色	φ1～5mm の長石、石英、雲母を含む/良	縦ハケ	
	第80図－14	図版8－(1)	弥生土器	甕		13.7		7.5YR 5/2 灰褐色 7.5YR 7/4 にぶい橙色	φ1～3mm の長石、石英を含む/良	縦ハケ	

神図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	備考
第80図－17	図版8－(2)	石器	砥石	8.9	7.7	1.9	121.7	砂岩製

位登古墳

出土遺構	神図番号	図版番号	種類	器種	法量（復元値）最大長 cm	最大幅 cm	孔径 cm	重さ g	備考
	第84図－1	図版8－(6)	装身具	管玉	2.0	0.4	0.2～40.15	0.4	片面穿孔、碧玉製

神図番号	図版番号	種類	器種	法量 cm（復元値）口径	器高	底径／最大径	色調 外：内：	胎土/焼成	成形・調整技法	備考
	第84図－2	図版8－(6)	埴輪	埴輪片			褐色 赤褐色	1～3mm 前後の白色砂粒をやや含む/良	ヨコナデ、ハケメ	

図　　版

平成29～令和元年度工事立会、試掘・確認調査

平成28年度工事立会⑫上の原遺跡群（東から）

平成29年度⑥包蔵地外Ｔ１完掘状況（南から）

令和元年度弓削田原Ｃ遺跡工事立会①

平成29年度工事立会⑵上の原遺跡群（南から）

平成30年度上の原遺跡群Ｔ１完掘状況（南から）

令和元年度弓削田原Ｃ遺跡工事立会②

平成29年度弓削田原Ｂ遺跡Ｔ１完掘状況（北から）

平成30年度確認調査⑿上の原遺跡群（北から）

令和元年度工事立会⒇上の原遺跡群（南から）

平成29年度上の原遺跡群Ｔ１完掘状況（南から）

令和元年度番町散布地Ｔ１完掘状況（西から）

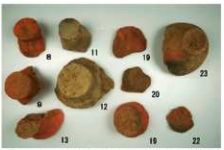
確認調査・工事立会出土遺物

図版２

弓削田原Ｂ遺跡２次、上の原遺跡群３次、猫迫１号墳２次

① 弓削田原Ｂ遺跡２次調査区全景（南から）

⑤ 上の原遺跡群３次SK１遺物出土状況（西から）



⑨ 上の原遺跡群３次SK４出土遺物②

② 弓削田原Ｂ遺跡２次SC１完掘状況（東から）

⑥ 上の原遺跡群３次SC１、SK１・２出土遺物

⑩ 上の原遺跡群３次SK７完掘状況（北から）

③ 弓削田原Ｂ遺跡２次出土遺物

⑦ 上の原遺跡群３次SK４完掘状況（北から）

⑪ 上の原遺跡群３次SK７・ピット出土遺物

④ 上の原遺跡群３次SC１・２完掘状況（東から）

⑧ 上の原遺跡群３次SK４出土遺物①

⑫ 猫迫１号墳２次北トレンチ土層（北から）